

吉野ヶ里遺跡 古代編 1

—辛上廃寺跡—

令和 3（2021）年 3 月

佐賀県

序

吉野ヶ里遺跡の発掘調査は、工業団地計画に伴い昭和61年5月から開始しましたが、国内最大規模の環壕集落跡や豊富な副葬品が出土した墳丘墓の発見などにより、平成元年2月以来大いに注目されてきました。その後、遺跡を取り巻く環境は、平成元年3月の遺跡保存の決定、平成2年の史跡指定、平成3年の特別史跡指定、平成4年の国営歴史公園設置の閣議決定、平成7年11月の公園整備工事着手という急速な展開を遂げ、平成13年4月23日には第1期開園を迎えました。現在、公園整備はほぼ完了しており、多くの来園者でにぎわっています。

さて、吉野ヶ里遺跡の発掘調査では弥生時代のみならず、奈良・平安時代においても重要な成果が得られています。なかでも、官道や郡衙・駅家に関連すると考えられる建物群、寺院に関する調査が特筆され、古代の神埼地域さらには佐賀県の研究をするうえで、欠くことのできない資料となっています。

本書は、文化庁の補助を受け、吉野ヶ里遺跡の古代に関する調査成果を総括する報告書の第1冊目になります。本書を学術資料としてお役立ていただき、吉野ヶ里遺跡の今後の調査研究や保存活用に関して、適切な御指導、御助言をいただきますようお願い申し上げます。

最後になりましたが、これまでの発掘調査にあたり、適切な御指導をいただいた文化庁、調査指導委員をはじめ諸先生方、調査や遺跡の保存などに多大な御協力をいただいた地元市町村教育委員会や国土交通省九州地方整備局国営海の中道海浜公園事務所歴史公園課をはじめ関係機関、発掘や整理作業に従事いただいた作業員の方々には、心より厚くお礼申し上げます。

令和3（2021）年3月

佐賀県地域交流部

文化・スポーツ交流局長 田中 裕之

例 言

- 1 本書は、佐賀県教育委員会が実施した佐賀県神埼市大字志波屋・鶴・田道ヶ里、吉野ヶ里町大字田手・大曲に所在する吉野ヶ里遺跡の発掘調査報告のうち、古代総括編の第1冊目で、大曲一の坪地区に位置する辛上廃寺跡の調査報告書である。
- 2 本書の作成は、文化庁の了承を得て国庫補助事業として実施したが、発掘調査は平成12～15年度に佐賀県土木部（現：県土整備部）からの再配当事業として行った。
- 3 発掘調査は、佐賀県教育委員会が主体となり実施した。
- 4 吉野ヶ里遺跡の範囲については、現行の『佐賀県遺跡地図』に従った。
- 5 報告書作成に係る整理作業は吉野ヶ里遺跡発掘調査事務所で実施した。
- 6 本書の執筆は、第1章は渡部芳久の文章を参照して渋谷格、第2章は渋谷の文章を元に塩見恭平が加筆、第3章1・2（1）は渋谷、その他の第3章は塩見の文章を元に渋谷が加筆・修正、第4章（4）は塩見、その他の第4章は渋谷が行った。なお、文責は渋谷にある。
- 7 本書の編集は、塩見恭平の協力を得て、渋谷格が行った。
- 8 吉野ヶ里遺跡の出土遺物・記録類は、吉野ヶ里遺跡発掘調査事務所で保管・管理しているが、一部の写真類や出土品は佐賀県文化財調査研究資料室、佐賀県立博物館で保管している。
- 9 吉野ヶ里遺跡の発掘調査は、文化庁、佐賀県文化財保護審議会や調査指導委員会の先生方をはじめ多くの研究者の御指導・御助言、発掘・整理作業員をはじめ地元の方々や関係機関の御協力によって成り立っている。紙数の都合などで御芳名を記すことができなかったが、感謝申し上げます。

本書の記載方法

1 吉野ヶ里遺跡の調査では、神埼工業団地計画に伴う発掘調査開始時において、当時の遺跡地図に基づく遺跡名を使用しており、遺跡の略号についてもそれぞれに与えていた。その後、それらの遺跡を統合し吉野ヶ里遺跡として登録しているが、当初の遺跡名を地区名として使用しており、混乱を防ぐため、略号の変更を行わず、当時と同じ英大文字3字の略号を使用して、実測図・写真等の記録類や出土遺物の注記に利用している。吉野ヶ里遺跡大曲一の坪地区の略号は、OITである。

2 個々の遺構名は、遺構記号と4桁の算用数字の組み合わせで示す。番号は、地区ごとに通し番号で数字を付している。今回用いた遺構記号は、次の通りである。このほか、小穴については調査区ごとの通し番号を基本とし、頭にPを付して表現する。

SB：掘立柱建物跡 SD：溝跡 SK：土坑 SX：その他・不明遺構

3 出土遺物の○○形土器は、○○とのみ表現する。例) 甕形土器→甕

4 実測した遺物には8桁の佐賀県遺物登録番号を1点ずつ付し、挿図では本書内の小節ごとに通し番号を付した。

5 平成14年4月に改正測量法が施行されたが、調査時の記録はすべて日本測地系による旧国土座標であることから、混乱を回避するため、吉野ヶ里遺跡の発掘調査では今のところ世界測地系による座標を使用していない。

本書で示す方位は、国土地理院の旧国土座標第Ⅱ系の座標北である。

6 遺物実測図のうち、断面塗り潰しは須恵器、器面網伏せは黒色土器を示す。

7 表で示した各項目の計測値は、復元値に*、残存値に+を付けて表現する。

8 神埼工業団地計画に伴う調査以降、佐賀県教育委員会が主体となって発掘調査を実施した吉野ヶ里遺跡関係の調査報告書は以下の通りである。この一連の報告書は、本書全体で頻繁に引用・参照されるため、本文中などで引用・参照する場合は、佐賀県文化財調査報告書の番号を用いて、『100集』『113集』と表記し、各章などの文献一覧では省略している。

佐賀県教育委員会（1990）『吉野ヶ里遺跡－佐賀県神埼郡三田川町・神埼町に所在する吉野ヶ里遺跡の確認調査報告書－』佐賀県文化財調査報告書第100集

佐賀県教育委員会（1992）『吉野ヶ里－神埼工業団地計画に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』佐賀県文化財調査報告書第113集

佐賀県教育委員会（1997）『吉野ヶ里遺跡－平成2年度～7年度の発掘調査の概要－』佐賀県文化財調査報告書第132集

- 佐賀県教育委員会（2001）『杉籠遺跡－国営吉野ヶ里歴史公園整備に伴う埋蔵文化財調査報告書 1－』佐賀県文化財調査報告書第 146 集
- 佐賀県教育委員会（2002）『吉野ヶ里銅鐸－吉野ヶ里遺跡大曲一の坪地区発掘調査概要報告書－』佐賀県文化財調査報告書第 152 集
- 佐賀県教育委員会（2003）『吉野ヶ里遺跡－平成 8 年度～ 10 年度の発掘調査の概要－』佐賀県文化財調査報告書第 156 集
- 佐賀県教育委員会（2004）『吉野ヶ里遺跡－平成 11 年度～ 12 年度の発掘調査の概要－』佐賀県文化財調査報告書第 160 集
- 佐賀県教育委員会（2005）『吉野ヶ里遺跡－田手二本黒木地区弥生時代前期環壕出土の土器と石器－』佐賀県文化財調査報告書第 163 集
- 佐賀県教育委員会（2007）『吉野ヶ里遺跡大曲一の坪地区・枝町遺跡－県立吉野ヶ里歴史公園整備に伴う埋蔵文化財調査報告書－』佐賀県文化財調査報告書第 172 集
- 佐賀県教育委員会（2007）『吉野ヶ里遺跡－国営吉野ヶ里歴史公園整備に伴う埋蔵文化財調査報告書 2－』佐賀県文化財調査報告書第 173 集
- 佐賀県教育委員会（2008）『吉野ヶ里遺跡－田手二本黒木地区の弥生時代中期の石器－』佐賀県文化財調査報告書第 177 集
- 佐賀県教育委員会（2015）『吉野ヶ里遺跡－弥生時代の集落跡－』佐賀県文化財調査報告書第 207 集
- 佐賀県教育委員会（2016）『吉野ヶ里遺跡－国営吉野ヶ里歴史公園整備に伴う埋蔵文化財調査報告書 3－』佐賀県文化財調査報告書第 211 集
- 佐賀県教育委員会（2016）『吉野ヶ里遺跡－弥生時代の墓地－』佐賀県文化財調査報告書第 214 集
- 佐賀県教育委員会（2018）『吉野ヶ里遺跡－弥生時代の墳丘墓－』佐賀県文化財調査報告書第 219 集
- 佐賀県教育委員会（2019）『吉野ヶ里遺跡－平成 13～23 年度の発掘調査－ 弥生時代の墓地総括・補遺編－』佐賀県文化財調査報告書第 222 集
- 佐賀県教育委員会（2020）『吉野ヶ里遺跡－弥生時代総括編 1－』佐賀県文化財調査報告書第 227 集

目次

本文目次

第1章 序説	1
1 はじめに	1
2 これまでの調査・研究	1
3 調査の経過	5
(1) 神埼工業団地計画に伴う調査	5
(2) 遺跡保存後の確認調査	9
(3) 大曲一の坪地区の確認調査	11
(4) 古代の概要	11
(5) 古代総括編の経過	14
第2章 位置と環境	17
1 遺跡の位置	17
2 地理的環境	17
3 歴史的環境	20
(1) 旧石器・縄文時代	20
(2) 弥生時代	22
(3) 古墳時代	28
(4) 古代	30
(5) 中世	32
第3章 辛上廃寺跡の調査成果	41
1 調査の概要	41
2 遺構と遺構に伴う遺物	48
(1) 塔基壇跡	48
(2) 掘立柱建物跡	50
(3) 溝跡	58
(4) 土坑	68

3	出土瓦	75
	(1) 軒丸瓦	75
	(2) 軒平瓦	77
	(3) 丸瓦	77
	(4) 平瓦	80
第4章	まとめ	95
	(1) 調査成果	95
	(2) 伽藍配置について	96
	(3) 肥前国における辛上廃寺	96
	(4) 塔心礎について	97

写真図版

挿図目次

図 1	大曲一の坪地区の位置 (1/10,000)	2
図 2	吉野ヶ里遺跡と古代肥前国における古代寺院の位置 (1/400,000)	4
図 3	吉野ヶ里遺跡北部の地区分けと周辺の遺跡 (1/5,000)	6
図 4	吉野ヶ里遺跡南部の地区分けと周辺の遺跡 (1/5,000)	8
図 5	平成 10・11 年度確認調査トレンチ位置図 (1/4,000)	12
図 6	古代の主要地区 (1/10,000)	13
図 7	吉野ヶ里遺跡周辺の地形分類	19
図 8	旧石器・縄文時代の遺跡分布 (1/100,000)	21
図 9	弥生時代前期の遺跡分布 (1/100,000)	23
図 10	弥生時代中期の遺跡分布 (1/100,000)	25
図 11	弥生時代後期の遺跡分布 (1/100,000)	27
図 12	古墳時代の遺跡分布 (1/100,000)	29
図 13	古代の遺跡分布 (1/100,000)	31
図 14	中世の遺跡分布 (1/100,000)	34
図 15	大曲一の坪地区 調査区の位置 (1/2,500)	42
図 16	遺構の分布 (1/750)	43
図 17	遺構の分布詳細 1 (1/400)	44
図 18	遺構の分布詳細 2 (1/400)	45
図 19	遺構の分布詳細 3 (1/400)	46
図 20	遺構の分布詳細 4 (1/400)	47
図 21	SX0049 (1/80)・土層 (1/40)	49
図 22	SX0049 出土遺物 (1/3)	50
図 23	SB0011 (1/80)・出土遺物 (1/3)、SB0058 (1/80)	51
図 24	SB0061 (1/80)	53
図 25	SB0095 (1/80)・出土遺物 (1/3)	54
図 26	SB0096 (1/80)・土層 (1/40)	55
図 27	SB0096 出土遺物 (1/3)	56
図 28	SB0097 (1/150)・出土遺物 (1/3)	57
図 29	SB0120 (1/80)	58
図 30	311・342 調査区南部 溝跡の分布 (1/250)	60
図 31	SD0009・0010・0036 土層 (1/40)、溝跡出土遺物 1 (1/3)	61
図 32	348 調査区 溝跡の分布 (1/200)・SD0066 土層 (1/40)	63
図 33	溝跡出土遺物 2 (1/3)	65
図 34	SD0105・0112・0113 土層 (1/40)、溝跡出土遺物 3 (1/3)	67
図 35	SK0014・0017・SK0033 (1/40)	69
図 36	土坑出土遺物 (1/3)	70
図 37	軒丸瓦 1 (1/4)	76
図 38	軒丸瓦 2・軒平瓦 (1/4)	78
図 39	丸瓦 1 (1/6)	79
図 40	丸瓦 2 (1/6)	80
図 41	平瓦 1 (1/6)	81
図 42	平瓦 2 (1/6)	83
図 43	平瓦 3 (1/6)	84
図 44	平瓦 4 (1/6)	85
図 45	平瓦 5 (1/6)	86

目次

図 46	平瓦 6 (1/6)	87
図 47	平瓦 7 (1/6)	88
図 48	平瓦 8 (1/6)	89
図 49	平瓦 9 (1/6)	90
図 50	辛上廃寺跡 古代の主な遺構 (1/750)	94
図 51	辛上廃寺跡・塔の塚廃寺跡・寺浦廃寺跡 塔心礎	99

表目次

表 1	辛上廃寺跡 出土須恵器・土師器	71
表 2	辛上廃寺跡 出土瓦	91

写真図版

写真図版 1

吉野ヶ里遺跡全景（上空から 昭和23年米軍撮影）

写真図版 2

吉野ヶ里遺跡全景（南から）

写真図版 3

311・342・348・349 調査区 全景（南から）

写真図版 4

348 調査区 全景（西から）

366 調査区 全景（南から）

写真図版 5

SX0049（真上から 上が南）

SB0061（真上から 上が南）

写真図版 6

SB0011（真上から 上が北）

SB0058（真上から 上が南）

写真図版 7

SX0049 東西土層東半部（南から）

SX0049 A-B 土層（東から）

SB0011 P1（東から）

SB0061 P1（東から）

SB0095 P6（北から）

SB0095 P7（北から）

SB0095 P11（北から）

SB0095 P14（北から）

写真図版 8

SB0096 P1（南から）

SB0096 P4（北から）

SB0096 P6（北から）

SB0096 P11（北から）

SB0096 P15（北から）

SB0097 P1（北から）

SB0097 P4（北から）

SB0097 P5（北から）

写真図版 9

SB0097 P10（北から）

SB0097 P12（北から）

SB0097 P13（北から）

SB0097 P14（北から）

SB0097 P18（北から）

SB0097 P21（北から）

SB0097 P22（北から）

SB0097 P23（北から）

写真図版 10

SB0097 P24（北から）

SD0003・0009 土層（西から）

SD0007 遺物出土状況（南西から）

SD0009・0036 土層（北西から）

SD0010 土層（西から）

SD0064（南から）

SD0066 遺物出土状況（北から）

SD0066 土層（北から）

写真図版 11

SD0067 遺物出土状況（南から）

SD0105 遺物出土状況（東から）

SK0004 検出状況（南から）

SK0013 検出状況（西から）

SK0014（南から）

SK0102（西から）

塔心礎

塔心礎柄穴部

第1章 序説

1 はじめに

吉野ヶ里遺跡は、佐賀県神埼市・吉野ヶ里町に所在する縄文時代～中世の遺跡で、「ムラ」から「クニ」へという弥生時代の社会変化を一つの遺跡で追うことができる唯一の遺跡として特別史跡に指定されている。さらに、日本で2番目の国営歴史公園として整備されており、多数の建物、環壕などが復元整備され、弥生時代終末期の集落の様子が体感できる。

しかしながら、吉野ヶ里遺跡では弥生時代のみならず、これまでの調査で古墳時代、古代、中世の遺跡としても重要な成果が得られている。このうち、古代では官道跡や官衙的建物群、古代寺院跡など、古代の神埼郡を知るうえで欠かすことのできない成果となっている。

ところが、弥生時代を含め、これまでの調査成果をまとめ、総括することができていない状態が続いていた。これは、遺跡保存決定後も遺跡の範囲・内容確認のための発掘調査を継続するとともに、史跡整備としては異例の規模・速さで事業が進展することへの対応が必要となり、膨大な出土資料の整理・検討が進まなかったという事情があり、報告は概報にとどまらざるをえなかった。

その整備も、特別史跡・佐賀県史跡範囲にあたる国営公園部分については、平成24年度にその大部分が開園することとなった。それに伴って、これまでの調査成果を総括することが課題となり、文化庁と協議を重ねたうえ、発掘作業を平成25年度からいったん休止して、時代ごとに総括報告書を順次作成していくこととした。まず、もっとも重要な成果が得られた弥生時代の総括報告書を作成し、その後に古代、古墳時代、中世と続けていく計画を立てている。

弥生時代の総括報告書は、平成26年度に集落編、平成27～30年度に墓地編、令和元年度に弥生時代全体の総括報告書を作成した。しかしながら、弥生時代については、未整理資料も多く残されており、まだ十分に解明できていない点が多くあることから、今後も発掘調査は継続していく必要がある。

さて本書は、弥生時代総括報告に続く古代の総括報告書の第1冊目にあたる。古代についても前述したように、これまでの発掘調査で重要な成果が得られているが、詳細な報告、総括がなされていない。そこで、吉野ヶ里遺跡の古代について、令和6年度までにこれまでの調査成果を順次報告し、総括する報告書を作成する予定である。

まず、本書では吉野ヶ里遺跡大曲一の坪地区で確認した辛上廃寺跡の調査成果を報告するが、古代の総括報告書の第1冊目にあたることから、これまでの経過を古代の成果を中心に述べることにする。

2 これまでの調査・研究

ここでは、今回の報告に関わる佐賀県内の古代寺院の調査・研究についての概要を述べる。

吉野ヶ里遺跡北東部に位置する大曲一の坪地区では、戦前から古代の瓦が多量に採集され、塔心礎と考えられる礎石が存在していることが知られており、七田忠志氏（七田 1935）や松尾禎作氏（松尾 1936）によ



図1 大曲一の坪地区の位置 (1/10,000)

て辛上廃寺跡として報告されている。七田氏は、この地区に「古墳の如き小丘」があったことを聞き取り、これが塔基壇である可能性を指摘しており、また塔心礎や出土瓦の分析により、奈良時代の寺院であることを推定している。これらのことから、七田氏は辛上廃寺が『肥前風土記』神埼郡条に記された「寺壹所僧寺」に比定できると指摘した。松尾氏も、同様の指摘をしている。なお、「辛上」は大曲一の坪地区に近接する集落名である。

さらに、七田氏が神崎市仁比山の野之内古瓦窯跡において、斜面から焼土や炭塊とともに布目瓦片が採集されることを根拠に、辛上廃寺の瓦窯であった可能性を指摘している点は注目される。ただし、この「瓦窯」は、『佐賀県遺跡地図』で神崎市の弁財天山瓦窯跡として周知化されている遺跡を指すとみられるが、現地踏査では位置を特定することができておらず、後世の削平により遺跡が残存していない可能性がある。

このほか、佐賀県内の古代寺院については、小城市に所在する寺浦廃寺（晴気廃寺）跡（七田 1937、松尾 1938b）、佐賀市に所在する肥前国分寺・尼寺跡（松尾 1938a、鏡山・桧垣 1938）、三養基郡上峰町に所在する塔の塚廃寺跡（松尾 1940a・1949）、佐賀市に所在する大願寺廃寺跡（松尾 1940b）に関する先行研究がある。

このうち、辛上廃寺跡と塔の塚廃寺跡とは3 kmほどしか離れておらず、塔の塚廃寺跡が所在する律令制の三根郡は、神埼郡から分かれて成立していることから、二つの寺院の関係が注目される。塔の塚廃寺跡は、塔基壇と推定される土壇に礎石が残されていたが、戦時中の飛行場整地作業により削平されている。発掘調査が実施されていないため、現在においても伽藍配置などの詳細は不明であるが、百済系単弁軒丸瓦などが採集されている。二つの寺院跡とも、塔基壇のみ確認されていたことは共通する。

このように、古代寺院については、瓦の出土や基壇・礎石が残っている場合があることなどから、戦前から注目されてきた。なお、昭和33年に大願寺廃寺跡、昭和46年に寺浦廃寺塔跡ならびに礎石が佐賀県史跡に指定された。

昭和後半代になると、古代寺院に関連する遺跡の内容を把握するための確認調査や、開発に伴う本調査が行われるようになる。

肥前国分寺跡では、昭和49（1974）～50（1975）年に大和町（現：佐賀市）教育委員会によって確認調査が実施され、建物基壇跡・掘立柱建物跡・築地跡などが確認されている（大和町教委 1976）。後年の調査で、一部の遺構の評価には再考の余地があるものの（大和町教委 1989・1990）、金堂の北側に講堂が並び、金堂の南東側に塔が配置された伽藍配置の概要が明らかとなっている。

寺浦廃寺跡では、昭和49（1974）年開発に伴う小規模な本調査が佐賀県教育委員会によって行われ、西側回廊部分とみられる基壇の一部が検出されたほか、伽藍配置等の概要が明らかになり、遺構の残存状況がよいことが判明した（佐賀県教委 1976）。

昭和59（1984）年には、九州横断自動車道建設に伴い、寺浦廃寺北側約400 mの位置にある寺浦瓦窯跡の発掘調査が佐賀県教育委員会によって行われた。窯跡そのものは検出されなかったが、百済系単弁・鴻臚館系軒丸瓦、三重弧文軒平瓦などが出土し、寺浦廃寺に供給していたものと推定される。特に、糸切痕が残る平瓦については一枚づくりの可能性も指摘されており、肥前地域における一枚づくりの平瓦の出現を考える上で重要な資料となっている（佐賀県教委 1989、山口 2019）。

寺浦廃寺跡については、昭和61年度～平成2年度の5ヶ年計画で内容把握の確認調査が小城市（現：小城市）教育委員会によって実施された。残存している塔跡が調査されるとともに、中門跡、回廊跡が確認さ

れた。調査の結果により、創建当初は金堂の周りを掘立柱の回廊が取り囲んでおり、塔は建てられていなかったことが明らかとなった。この回廊は1回建て替えられているが、その後、西側回廊上の金堂に並列する位置に塔が建てられ、法隆寺系伽藍配置をとるといふ変遷が判明した（小城町教委 1991）。このほか、平成元（1989）年に農業基盤整備事業に伴う本調査が小城町教育委員会によって行われ、溝跡と小穴を確認し、百済系単弁軒丸瓦、三重弧文軒平瓦などが出土した（小城町教委 1989）。

平成 12～15 年度には、佐賀県教育委員会が辛上廃寺跡の確認調査を実施した（本書）。

以上のように、佐賀県内では塔の塚廃寺跡、辛上廃寺跡、国分寺跡・尼寺跡、大願寺廃寺跡、寺浦廃寺跡

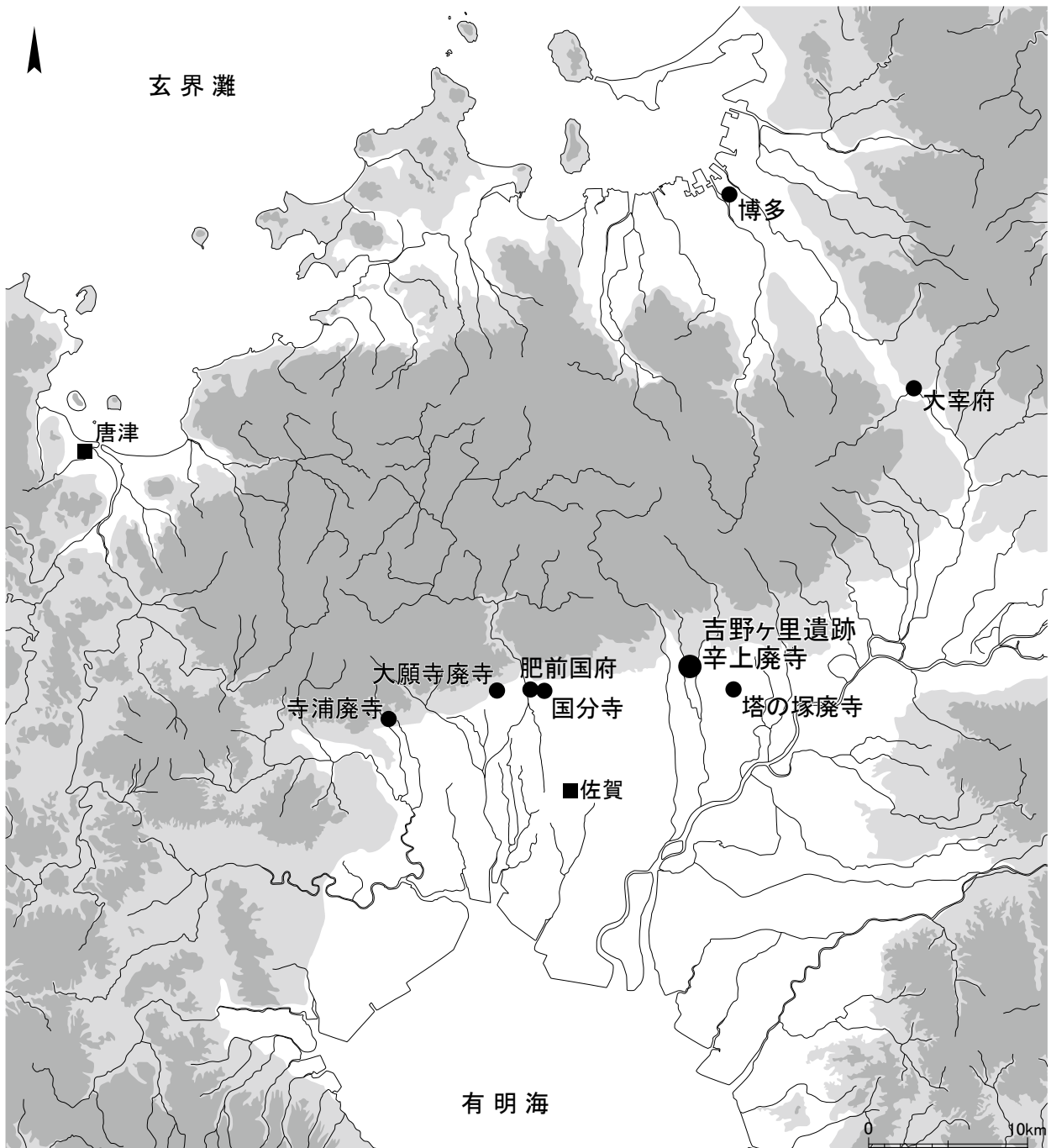


図2 吉野ヶ里遺跡と古代肥前国における古代寺院の位置 (1/400,000)

の存在が知られている。このうち、肥前国分寺・尼寺は律令制の国レベルの官寺、そのほかは1郡1寺的な在り方であり、郡司クラスの氏寺として建立された私寺的な性格とされている（小田 1995）。

3 調査の経過

（1）神埼工業団地計画に伴う調査

昭和 56 年度に神埼郡神埼町（現：神崎市）、^{ひがしせふり}東脊振村・^{みたがわ}三田川町（現：吉野ヶ里町）にまたがる^{しわや}志波屋・吉野ヶ里段丘が、その立地条件の良さから、工業団地開発の最優先・有力候補地として内定した。この段丘一帯は戦前から「吉野ヶ里遺跡」として考古学界でも知られていた遺跡であったが、発掘調査がほとんど行われていないことから、遺跡の内容については不明な点が多く、保存協議を進めたものの、開発計画を白紙に戻すまでには至らず、工業団地計画は当初の予定どおり進められることとなった。

そこで、昭和 57・60 年度に確認調査を行い、その結果を基に文化財保護の協議を進め、工業団地予定地のうち約 6 ha を文化財保存緑地とし、約 30ha については佐賀県土地開発公社からの受託事業として本調査を実施することとなった。調査期間は、昭和 61～63 年度に発掘作業、その後の 2 年間に整理・報告書作成作業を行う計画を立てた。

なお、発掘調査に至る経緯、調査の経過の詳細については、『吉野ヶ里』（『113 集』）や『吉野ヶ里遺跡—弥生時代の集落跡—』第 1 分冊（『207 集』）を参照にされたい。

また、遺跡名や地区名については、いろいろと経緯があったものの、本書では現在の『佐賀県遺跡地図』に基づき、吉野ヶ里遺跡を志波屋四の坪地区・志波屋三の坪（乙）地区・吉野ヶ里地区・^{でんいつぽんまつ}田一本松地区（以上、神崎市）、^{た で にほんくろき}大曲一の坪地区、吉野ヶ里丘陵地区・^{いつぽん}田手二本黒木地区・^{すぎごもり}田手一本黒木地区・杉籠地区（以上、吉野ヶ里町）に区分して記述する。

昭和 61 年度の調査

志波屋四の坪地区 I 区、志波屋三の坪（乙）地区、吉野ヶ里地区 I 区について発掘作業を行った。

志波屋四の坪地区 I 区では、弥生時代の集落・墓地、古墳時代の集落・墓地などを確認した。古代関連では、奈良・平安時代の多数の掘立柱建物跡や井戸跡・土坑等を検出したが、掘立柱建物には企画的に配置されたものもあり、特徴的な遺物として木簡や須恵器硯などが出土している。また、以前から官道ではないかと推測されていた段丘を東西方向に横断する切通しの西側において、切通しラインに沿った 2 条の溝跡を確認し、官衙的な性格を帯びた地区であることが考えられた。なお、調査は昭和 62 年度へ継続した。

志波屋三の坪（乙）地区では、独立低丘陵上の調査を行い、弥生時代の集落・墓地、古墳時代の集落・墓地などを確認した。古代関連では、奈良時代の掘立柱建物跡などを検出し、掘立柱建物群が主軸を南北方向に揃えて配列されていることが判明し、官衙的様相をうかがうことができた。

吉野ヶ里地区 I 区では、弥生時代の集落・墓地、平安時代の土坑を確認した。なかでも調査区南部を南北方向にのびる弥生時代後期の溝跡は、集落全体を囲む大規模な環壕である可能性が考えられた。

昭和 62 年度の調査

志波屋四の坪地区 I 区、志波屋三の坪（乙）地区、志波屋三の坪（甲）遺跡、志波屋六の坪（甲）遺跡、志波屋五の坪遺跡、吉野ヶ里丘陵地区 I・II・III 区、吉野ヶ里地区 II・III・IV 区について発掘作業を行った。

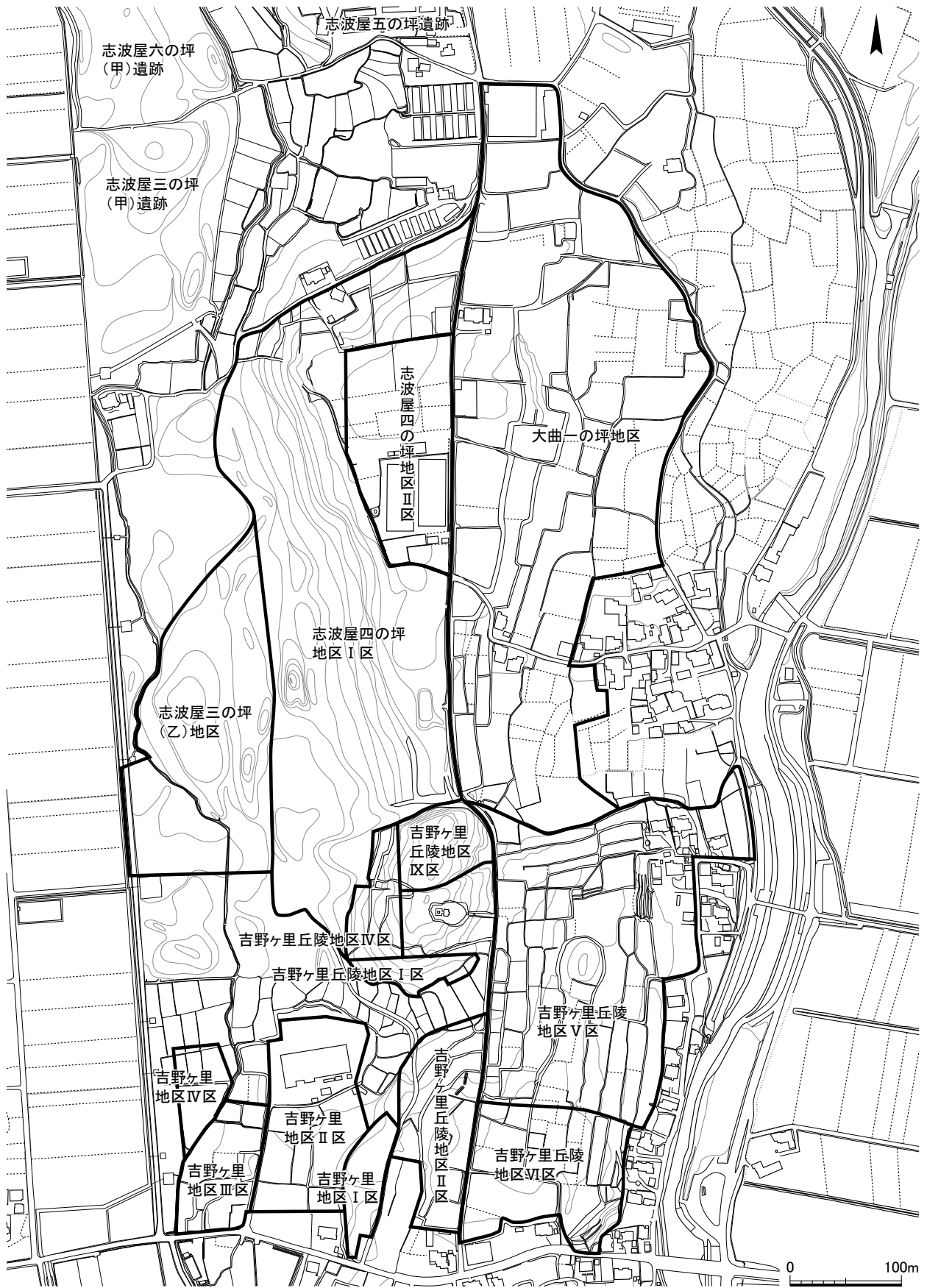


図3 吉野ヶ里遺跡北部の地区分けと周辺の遺跡 (1/5,000)

一部の地区は、昭和 63 年度初めまで調査を実施した。

志波屋四の坪地区 I 区では、地区南部の水田域周辺について調査を行い、弥生時代の土坑、古墳時代の集落などを確認した。古代関連では、奈良・平安時代の掘立柱建物跡・竪穴建物跡・井戸跡・土坑・柵跡などを検出し、また前年度に確認した 2 条の溝跡は道路の側溝跡であることが明確となり、発掘調査で確認された官道跡としては県内での初見となった。さらに、玉砂利敷きの流路が設けられた奈良時代の石組井戸跡を確認するなど、遺構・遺物の面からこの地区で確認した遺構群が官衙的施設である可能性が高まった。このほか、古墳時代後期の土坑からは木製馬鞍の前輪・後輪未成品が揃って出土した。また、志波屋五の坪遺跡に南に隣接する最北部では、奈良時代の大型掘立柱建物跡などを確認した。

志波屋三の坪（乙）地区では、南部と西部の水田部について調査を行った。南部では古墳時代の土坑、溝跡、奈良時代の道路跡、中世の墓地・道路跡などを確認した。奈良時代の道路跡は、志波屋四の坪地区 I 区で確認した道路跡の西側延長部分にあたり、官道跡と考えられた。西部では室町時代の土坑墓群が確認され、副葬品として中国の銅銭や輸入陶磁器、土師器小皿などが出土した。

志波屋三の坪（甲）遺跡では、弥生時代の集落・墓地、古墳時代の集落、古代～中世の掘立柱建物跡・井戸跡・土坑・柵跡などを確認した。古代関連では、奈良・平安時代の掘立柱建物跡・土坑を数多く検出し、掘立柱建物には企画的に配置されたものがあり、土坑や井戸跡からは木簡や墨書土器、木製机、須恵器硯・水滴、甕土器などが出土していることから、官衙群の一部であった可能性が高い。

志波屋六の坪（甲）遺跡では、弥生時代の集落、古墳時代の集落、奈良・平安時代の井戸跡・土坑、中世の集落などを確認した。また、志波屋五の坪遺跡の調査では、古墳時代の土坑、奈良・平安時代の溝跡、中世の掘立柱建物跡・土坑などを確認した。

吉野ヶ里丘陵地区のうち、I 区では、弥生時代の集落・墓地、奈良・平安時代の掘立柱建物跡・土坑墓などを確認した。II 区では、弥生時代の集落・墓地、古墳時代の集落・墓地、中世の溝跡・土坑を確認し、弥生時代後期の環壕跡、中期初頭～後期前半の大規模な甕棺墓がこの地区の特徴である。III 区では、弥生時代の集落・墓地、古墳時代の墳墓、奈良・平安時代の掘立柱建物跡、中世の溝跡などを確認し、南内郭の一部がこの地区に位置している。全体的に古代関連の遺構が少ない地区である。

吉野ヶ里地区 II・III・IV 区では、弥生時代の集落・墓地、古墳時代の集落、古代の掘立柱建物跡・井戸跡などを確認した。古代関連では、志波屋四の坪地区 I 区で確認された奈良時代を主体とする建物群と異なり、平安時代前期に属する遺構が多いことが注目された。

昭和 63 年度の調査

志波屋六の坪（乙）遺跡、志波屋四の坪地区 I 区、吉野ヶ里丘陵地区 IV・V 区、吉野ヶ里地区 V 区、田手二本黒木地区 II 区について調査を行った。

志波屋六の坪（乙）遺跡では、弥生時代の集落、古墳時代の集落、奈良時代の集落、中世の集落などを確認した。弥生時代後期の集落が主体の地区であるが、奈良時代の竪穴建物跡を検出している。

志波屋四の坪地区 I 区では、段丘上北部の調査を行い、弥生時代の集落・墓地、古墳時代の集落などを確認した。古代関連では、奈良時代の掘立柱建物跡などを検出した。

吉野ヶ里丘陵地区 IV 区では、弥生時代の墓地、古墳時代の集落などを確認した。古代関連では、奈良・平安時代の掘立柱建物跡などを検出し、西側に隣接する志波屋四の坪地区 I 区南端部の建物群の広がりを確認することができる。

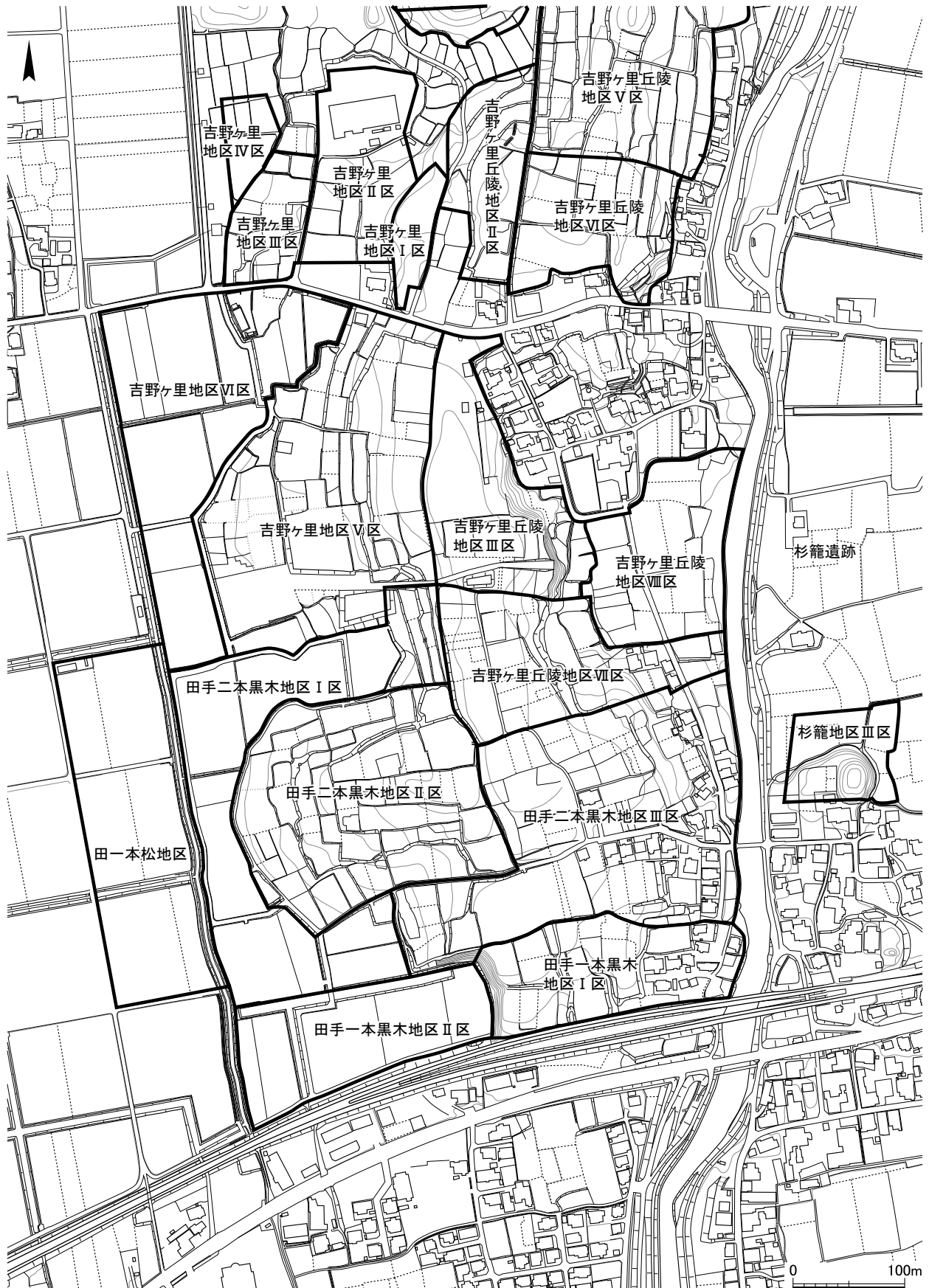


図4 吉野ヶ里遺跡南部の地区分けと周辺の遺跡 (1/5,000)

吉野ヶ里地区Ⅴ区では、弥生時代の集落・墓地、古墳時代の集落、古代の掘立柱建物跡、中世の溝跡などを確認した。弥生時代について、Ⅴ区東部は東側に隣接する吉野ヶ里丘陵地区Ⅲ区と合わせて南内郭を構成しており、外環壕の一部、Ⅴ区西部は高床倉庫群が特徴的な地区である。古代関連では、Ⅴ区西部で平安時代を中心とした掘立柱建物跡・井戸跡などを検出した。

田手二本黒木地区Ⅱ区では、弥生時代の集落・墓地、中世の道路状遺構などを確認した。古代関連の遺構は確認していない。

吉野ヶ里丘陵地区Ⅴ区では、弥生時代の集落・墳墓、古代の掘立柱建物跡、中世の溝跡などを確認した。古代関連では、奈良時代の掘立柱建物跡を検出し、数棟のみ段丘上に位置していることは、志波屋四の坪地区などとは状況を異にしている。

さて、南内郭や大規模環壕集落などの調査成果が、平成元年2月下旬、新聞・テレビ等によって大々的に報道され、吉野ヶ里遺跡は一躍全国的な注目を浴びた。そのような中、吉野ヶ里丘陵地区Ⅴ区で北墳丘墓の調査が行われ、有柄式銅剣やガラス管玉が副葬された甕棺墓を始めとして、次々と甕棺墓から副葬品が出土し、さらに注目を集めることとなった。発掘現場に連日1万人を超える見学者が来訪するという大きな社会現象となったこともあり、調査成果の重要性から遺跡主要部の保存が決定されることとなった。

なお、神埼工業団地計画に伴う本調査についての概要報告書は、平成4年3月に刊行した（『113集』）。

（2）遺跡保存後の確認調査

遺跡保存の決定を受け、吉野ヶ里遺跡の全体的な規模の把握と、未調査区域の内容把握を目的として、平成元年度からは国庫補助事業による遺跡全体の確認調査を行うこととした（吉野ヶ里遺跡発掘調査事業）。国庫補助事業による発掘作業は、平成23年度まで継続して実施した。その後、平成4年10月に国営吉野ヶ里歴史公園の設置が閣議決定されたことを受け、約54haに及ぶ国営公園の整備に伴う発掘調査を建設省（現：国土交通省）からの受託事業（国営吉野ヶ里歴史公園区域内文化財発掘調査事業）として平成9年度から開始し、平成24年度まで発掘作業を継続した。さらに、国営公園と合わせて設置されることが決定した県立吉野ヶ里歴史公園の整備に伴う調査を県土木部（現：県土整備部）からの再配当事業（県営吉野ヶ里歴史公園区域内文化財発掘調査事業）として平成9年度から開始し、平成15年度まで発掘作業を実施した。以下では、発掘調査に係る予算の違いに基づき、国庫補助事業による調査は「補助事業」、建設省からの受託事業による調査は「受託事業」、県土木部からの再配当事業による調査は「県再配当事業」と呼称する。

以上の3事業の住み分けとして、補助事業では、遺跡の全体像を把握するため遺跡全域を対象とし、公園整備に対し遺跡情報を提供するとともに、公園整備に関わらない緊急的な発掘調査を行った。受託事業及び県再配当事業では、国営公園区域（特別史跡・県史跡）及び県立公園区域（無指定地区）における園路やトイレといった便益施設及び復元建物等の恒久的施設や、極端な盛土を施す区域を発掘調査の対象とし、整備工事の実設計策定前に地下遺構の状況を緊急に把握し、遺跡保護の観点から設計協議を行ってきた。

なお、平成元～24年度の調査体制などは、『吉野ヶ里遺跡—弥生時代の集落跡—』第1分冊（『207集』）を参照にされたい。

平成元～8年度の調査

平成元年度は、主に遺跡の範囲確認を目的として調査を実施した。その結果、弥生時代後期の環壕集落の規模をうかがい知ることができるようになり、そのほか青銅器鑄造関連の遺構や墳丘墓状の土層などを確認

した。ただ、古代関連では、確認できた遺構・遺物は少なく、吉野ヶ里丘陵地区V区で竪穴建物跡、吉野ヶ里地区V区で井戸跡などを検出した程度である。また、1～89調査区までの調査成果について、平成2年3月に報告書を刊行した（『100集』）。

平成2・3年度には、未調査区域の内容把握の調査も開始した。弥生時代では、田手二本黒木地区Ⅲ区で青銅器鑄造関連遺構、田手一本黒木地区I区で北墳丘墓と同様の盛土遺構、吉野ヶ里丘陵地区Ⅶ区で甕棺墓地などを確認したが、古代関連の遺構などはほとんど確認されなかった。なお、約22haが平成2年5月に史跡、平成3年5月に特別史跡に指定された。

平成4～8年度は、補助事業による遺跡の内容を把握する調査を継続した。弥生時代では、吉野ヶ里丘陵地区Ⅵ区での北内郭の発見、吉野ヶ里丘陵地区V区の北墳丘墓の再調査により新たな甕棺墓が確認され、また、遺跡南西部の低地部の調査で多数の木製品が出土するなど重要な調査成果が得られた。古代関連では、吉野ヶ里丘陵地区Ⅵ区で平安時代の土坑墓などを確認したが、全体的には遺構・遺物は少ない。また、平成2～7年度の調査成果の概要について、平成9年3月に報告書を刊行した（『132集』）。

平成9～15年度の調査

平成9年度からは、補助事業による遺跡の内容を把握する調査を継続するとともに、前述のように、受託事業・県再配当事業を開始した。このうち、平成9年度の受託事業により、国営吉野ヶ里歴史公園センター建設に伴う本調査を遺跡東側に位置する杉籠遺跡において実施した。古代関連では、奈良・平安時代の土坑群を確認し、土師器・須恵器が多量に出土するものがあり、廃棄土坑群と考えられる（『146集』）。

平成9～15年度の3事業の確認調査によって、弥生時代では、九州初出土の銅鐸、前期初頭の溝跡、遺跡最古の首長墓など、また古墳時代前期の新たな前方後方墳の発見などの重要な成果が得られた。古代関連では、吉野ヶ里地区V区で平安時代の掘立柱建物跡・井戸跡（『160集』）、大曲一の坪地区で寺院跡（『172集』・本書）、田手二本黒木地区Ⅲ区で奈良・平安時代の土坑（『222集』）、平安時代の道路状遺構とみられる溝跡（『211集』）、^{えだまち}枝町遺跡で奈良時代の土坑（『172集』）などを確認した。また、補助事業については、平成8～10年度の調査成果概要を平成15年3月に（『156集』）、平成11・12年度の調査成果概要を平成16年3月に刊行した（『160集』）。

なお、県再配当事業で実施した大曲一の坪地区の調査概要については、後述する。

平成16～24年度の調査

平成16年度には、吉野ヶ里丘陵地区Ⅸ区での補助事業による調査において、前漢鏡・イモガイ製腕輪が副葬された弥生時代中期末の甕棺墓を確認した。

さらに、平成16～22年度は、遺跡北側の志波屋四の坪地区Ⅱ区を中心に、遺跡北部の遺跡内容や北方への遺跡の広がりを確認する調査を補助事業・受託事業により実施した。弥生時代では、志波屋四の坪地区の甕棺墓地の様相がより詳細に判明するようになった。古代関連では、志波屋四の坪地区Ⅱ区で掘立柱建物跡・竪穴建物跡・土坑（『211集』）、吉野ヶ里遺跡北方の志波屋五の坪遺跡・^{ながたに}長谷遺跡で柱穴跡・土坑・溝跡・土坑墓（『222集』）などを確認した。

平成23・24年度には、補助事業・受託事業により遺跡南東部の杉籠地区Ⅲ区の確認調査を実施し、弥生時代前期の環壕跡、中期の甕棺墓地などを確認した。

(3) 大曲一の坪地区の確認調査

ここでは、本書で報告する辛上廃寺跡の調査について概要を述べる。

吉野ヶ里遺跡北東部に位置する大曲一の坪地区では、前述のように、古代瓦の出土や塔心礎と考えられる礎石の存在などから、辛上廃寺の存在が推定されていた。大曲一の坪地区は、吉野ヶ里歴史公園の県立公園部分にあたり、佐賀県土木部（現：県土整備部）が公園整備を担当しており、公園整備と遺跡保存の調整については、県土木部と県文化財保護部局で行っている。県立公園区域は文化財指定範囲ではないものの、歴史公園であることから、調整のうえ、地下遺構に影響を与えない形での整備が進められている。

しかしながら、大曲一の坪地区では公園整備以前に調査が行われておらず、地下遺構の状況が不明であったため、公園整備との調整を図るため、前述した県土木部からの再配当事業として、平成10年度にトレンチによる確認調査を実施した。

この確認調査によって、九州初となる福田型銅鐸が出土し（『152集』）、大きな注目を集めたが、平成11年度まで継続した確認調査により、寺院に関連するとみられる古代の遺構も良好に遺存していることが判明した。そのため、遺跡の内容をさらに詳しく確認するため、県土木部からの再配当事業を継続して、平成12～15年度に広範囲の調査区7箇所を設定して、確認調査を実施した。

調査にあたっては、遺構の内容を知るための確認調査であることから、発掘による遺構の損害を最小限にとどめ、現時点の調査水準よりも進歩した調査・分析技術を用いた将来的な再検証調査のための遺構保存という観点から、調査では基本的に遺構内埋土を完全に掘削することは避けている。そのため、検出した遺構の掘削は半分にとどめる、土層観察用の畦を残すなどといった措置を取っている。

調査の結果、古代の寺院関係としては、塔基壇跡、金堂や門と推定される掘立柱建物跡、寺域を区画する溝跡などが確認され、伽藍配置がある程度判明する貴重な例となり、その概要を報告している（『172集』）。

なお、平成15年度に中位段丘上に調査区2箇所を設定し調査を行い、弥生時代の竪穴建物跡などを確認したが、古代の遺構などは検出していない。

(4) 古代の概要

調査の経過については、以上のようなものであるが、吉野ヶ里遺跡の古代に関するこれまでの調査成果を簡単にまとめておく。おおよそ、古代官道跡より北側に奈良時代を主体とする遺構・遺物、南側に平安時代を主体とする遺構・遺物が確認されている。

官道跡は、志波屋四の坪地区南部と志波屋三の坪（乙）地区南部で確認した。志波屋四の坪地区東部では、段丘を掘削した大規模な切通しとなり、西部と志波屋三の坪（乙）地区の低地部では、路面は明確ではないが、側溝を検出した。側溝出土遺物からみて、奈良時代に機能していた道路であると考えられる。

奈良時代の中心的な地区は、志波屋四の坪地区・志波屋三の坪（乙）地区・大曲一の坪地区、志波屋三の坪（甲）遺跡である。このうち、大曲一の坪地区では前述のように寺院跡を確認した。

志波屋四の坪地区では、段丘西斜面から低地部にかけて100棟以上の掘立柱建物跡を確認している。小型のものが多いものの、大型で庇がつく建物なども認められる。建物の詳細な時期や配置状況、性格などは今後検討することになるが、駅家の厩舎と推定されている建物（篠崎2010）もある。井戸跡・土坑も多数確認されており、なかには官道側溝跡に玉石敷きの溝跡によって水が流れ込むように配置され、周囲に方形の石敷きをもつ井戸跡がある。主な遺物としては、木簡・墨書土器・篋書土器・転用硯などが出土した。

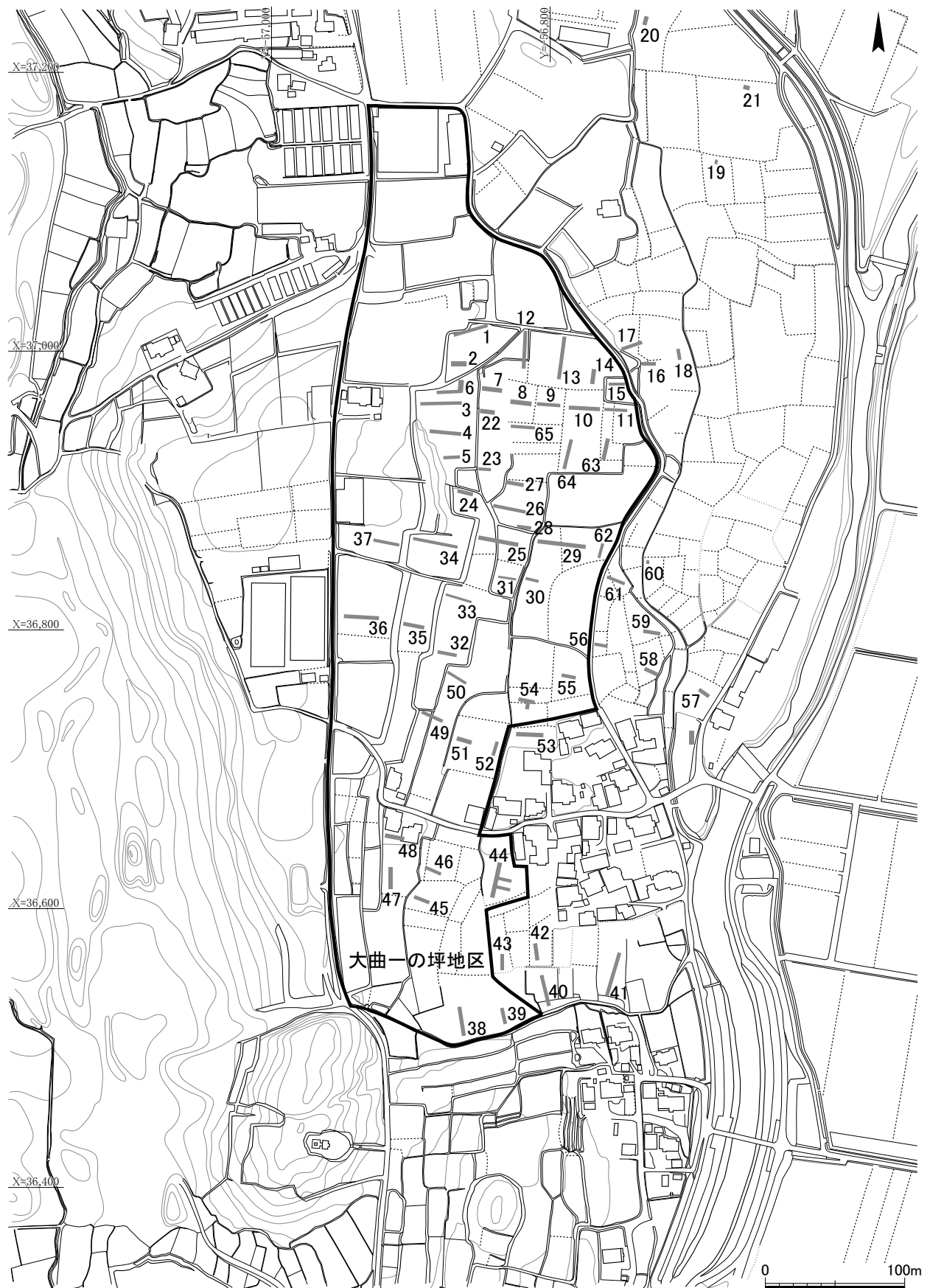


図5 平成10・11年度確認調査トレンチ位置図 (1/4,000)



図6 古代の主要地区 (1/10,000)

志波屋三の坪（乙）地区では、低段丘上で企画的に配置された掘立柱建物跡を確認している。

志波屋三の坪（甲）遺跡では、低段丘上から低地部にかけて掘立柱建物跡を多く確認している。企画的に配置されたものもみられ、その配置から複数の時期の建物群であることが推定されている。土坑・井戸跡も多数確認されており、木簡・墨書土器・円面硯・水滴などが出土した。

このように、奈良時代の遺構のほとんどが斜面部・低段丘上から低地部にかけて確認されているが、志波屋四の坪地区や吉野ヶ里丘陵地区Ⅴ区では、中位段丘上に位置する掘立柱建物跡も少ないが認められる。

平安時代の中心的な地区は吉野ヶ里地区Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ区とⅤ区で、ともに掘立柱建物跡や井戸跡などを確認している。このほか、土器類などを副葬した土坑墓が吉野ヶ里丘陵地区Ⅵ区などで、田手二本黒木地区Ⅲ区で道路状遺構などを検出している。

（５）古代総括編の経過

吉野ヶ里遺跡のこれまでの調査成果をまとめる総括報告は、前述のように、弥生時代から始め、次に古代を対象とすることとした。弥生時代の総括報告については、令和元年度に総括報告書 1（『227 集』）を刊行したが、古代については、平成 29 年度から準備を始めている。

平成 29 年度は、大曲一の坪地区の基礎整理を行うとともに、後述する調査指導委員会を設置した。平成 30 年度は基礎整理を継続し、令和元年度には本格的な整理作業を行った。令和 2 年度は本書の作成を行うとともに、主として来年度に報告書作成予定の地区の整理作業を実施した。

調査指導委員会

各時代の総括を行うにあたり、平成 28 年度に弥生時代の調査に関する調査指導委員会を設置したのに続き、古代の調査について専門的見地から指導助言を行うことを目的とする「吉野ヶ里遺跡古代調査指導委員会」を平成 29 年度に設置した。

指導委員 七田 忠昭（佐賀県立佐賀城本丸歴史館長）
亀田 修一（岡山理科大学教授）
重藤 輝行（佐賀大学教授）
柴田 博子（宮崎産業経営大学教授）
河上 麻由子（奈良女子大学准教授）

平成 29 年度は、平成 30 年 2 月 23 日に第 1 回の委員会を開催し、これまでの発掘調査概要を示すとともに、総括報告の方向性などについて指導を賜った。

平成 30 年度は、平成 31 年 2 月 14 日に委員会を開催するとともに、その前日にこれまで出土した遺物の検討会を県内外の発掘調査担当者も参加して実施した。遺物検討会では、参加者からの意見が多数あり、吉野ヶ里遺跡出土遺物の特徴が明らかとなってきた。調査指導委員会では、総括報告書の構成などについて指導を賜った。

令和元年度は、令和 2 年 2 月 6 日に委員会を開催し、総括報告書の構成、辛上廃寺跡に関する検討を行い、辛上廃寺跡出土遺物について実見していただき、指導を賜った。

調査体制

吉野ヶ里遺跡の調査については、佐賀県教育委員会に置かれた文化財保護部局が平成30年度まで担ってきたが、令和元年度に知事部局に移管され、佐賀県地域交流部文化・スポーツ交流局文化課文化財保護室として担当することになった。

平成29・30年度

佐賀県教育委員会 文化財課

課長 江島 秀臣 (29・30)
 参事 徳富 則久 (29・30)
 副課長 樋口 秀信 (29)
 山田 隆宏 (29・30)
 白木原 宜 (30)
 主幹 今泉 和孝 (29・30)
 主査 畑瀬 明日香 (29)
 松井 美穂 (30)
 副主査 白浜 渚 (29)
 主事 松尾 さつき (30)

【調査担当】文化財課 吉野ヶ里遺跡担当

副課長 樋口 秀信 (29)
 白木原 宜 (30)
 係長 宮崎 博司 (29・30)
 主査 古野 健太郎 (29・30)
 渡部 芳久 (29・30)

令和元・2年度

佐賀県 文化課文化財保護室

室長 川内野 修 (元)
 白木原 宜 (2)
 参事 白木原 宜 (元)
 副室長 古川 直樹 (元・2)
 山川 史 (元・2)
 主幹 今泉 和孝 (元・2)
 主査 松井 美穂 (元)
 主事 松尾 さつき (元)
 大塚 小百合 (2)

【調査担当】文化財保護室 吉野ヶ里遺跡担当

参事 白木原 宜 (元)
 副室長 古川 直樹 (2)
 係長 渋谷 格 (元・2)
 主査 渡部 芳久 (元)
 主事 塩見 恭平 (2)

第1章 参考文献

- 小城町教育委員会（1989）『寺浦廃寺』小城町文化財調査報告書第7集
- 小城町教育委員会（1991）『寺浦廃寺』小城町文化財調査報告書第8集
- 小田富士雄（1995）「肥前の奈良時代寺院跡」『風土記の考古学5 肥前風土記の巻』同成社
- 鏡山猛・松垣元吉（1938）「肥前國分寺」『國分寺の研究』考古学研究会
- 佐賀県教育委員会（1976）『寺浦廃寺跡』佐賀県文化財調査報告書第34集
- 佐賀県教育委員会（1989）「寺浦瓦窯跡」『老松山遺跡』佐賀県文化財調査報告書第92集
- 七田忠志（1935）「肥前風土記神埼郡の條に於ける僧寺に関する一考察」『上代文化』第13号 上代文化研究会
- 七田忠志（1937）「肥前晴氣廢寺址と九州地方に於ける古瓦の一様式に就いて」『考古学』8-4 東京考古学会
- 篠崎讓治（2010）『馬小屋の考古学』高志書院
- 松尾禎作（1936）「東脊振村辛上廢寺址の調査」『佐賀県史蹟名勝天然記念物調査報告第5輯』
- 松尾禎作（1938a）「肥前國分寺及尼寺」『佐賀県史蹟名勝天然記念物調査報告第6輯』
- 松尾禎作（1938b）「寺浦廢寺址の調査」『佐賀県史蹟名勝天然記念物調査報告第6輯』
- 松尾禎作（1940a）「塔の塚廢寺址」『佐賀県史蹟名勝天然記念物調査報告第7輯』
- 松尾禎作（1940b）「大願寺廢寺址」『佐賀県史蹟名勝天然記念物調査報告第7輯』
- 松尾禎作（1949）「塔の塚廢寺について」『佐賀県史蹟名勝天然記念物調査報告第9輯』
- 山口亨（2019）「九州地方の一本づくり、一枚づくり」『8世紀の瓦づくりⅧ 一本づくり・一枚づくりの展開2』第19回古代瓦研究会シンポジウム
- 奈良文化財研究所
- 大和町教育委員会（1976）『肥前國分寺跡』大和町文化財調査報告書第1集
- 大和町教育委員会（1989）『肥前國分寺跡』大和町文化財調査報告書第8集
- 大和町教育委員会（1990）『肥前國分寺跡—第4次発掘調査—』大和町文化財調査報告書第11集

第2章 位置と環境

1 遺跡の位置

吉野ヶ里遺跡は、佐賀県神埼市神埼町大字鶴字日吉・下ノ辻、大字田道ヶ里字田一本松、大字志波屋字三の坪乙・四の坪と、神埼郡吉野ヶ里町大字田手字三本杉・四本杉・一本黒木・二本黒木・杉籠・二本松、大曲字一の坪に所在する。神埼市・吉野ヶ里町は九州島北西部の一角を占める佐賀県の東部に位置し、市域が南北約22.6km・東西約13.4km、面積125.01km²である神埼市が西側に、町域が南北約16.1km・東西約5.1km、面積43.94km²である吉野ヶ里町が東側にあり、ともに南北に細長い市域・町域が並列するように隣接している。両市町の東には三養基郡上峰町・みやき町、西には佐賀市が隣接し、北は福岡県福岡市・筑紫郡那珂川町、南は福岡県久留米市・大川市との県境となっている。

なお、神埼市は平成18(2006)年3月20日に神埼郡神埼町・千代田町・脊振村が、吉野ヶ里町は平成18(2006)年3月1日に神埼郡三田川町・東脊振村がそれぞれ合併して誕生しており、合併以前の行政区分で言えば、遺跡は神埼町・三田川町・東脊振村の3町村にまたがっていたことになる。また、吉野ヶ里遺跡の範囲については、平成22年3月に改訂された『佐賀県遺跡地図』に拠っているが、地形的に比較的明瞭に区分できる妥当なものと考えられる。

吉野ヶ里遺跡の位置は、南北方向で遺跡の中心付近である北内郭跡でいえば、北緯33°19′25″、東経130°23′18″で¹⁾、平面直角座標系第Ⅱ系では、おおよそX=+35,200～+37,000m、Y=-56,600～-57,300mの範囲にある(図2)。

2 地理的環境

神埼市・吉野ヶ里町のおおよその地勢は、北部の山地と南部の平野に区分される。北部は佐賀・福岡県境をなす脊振山地の東西脊梁の南斜面にあたり、脊振山地の最高峰である脊振山(標高1,054.6m)は神埼市と福岡市早良区の県境にある。ただし、吉野ヶ里町最北部の小川内地区は東西脊梁北側の那珂川上流域となる。この北部の山地には、おおよそ南流する河川によって開析された小規模な谷底平野や河岸段丘が点在している。

両市町の南部は、有明海の湾奥に臨む九州最大の沖積平野である筑紫平野の西半部を占める佐賀平野の東部にあたる。広義の佐賀平野は、「筑紫次郎」と称される筑後川以西の白石・佐賀両地域をいうが、狭義には東方を筑後川、西方を牛津川で挟まれた平野を指す²⁾。佐賀平野の北部には、脊振山地南麓からのびる台地である洪積段丘が認められるが、神埼市のほぼ中央を南流する城原川以東の地域で河成段丘が特に発達している。その段丘の間には田手川、井柳川、切通川などの河川が南流しており、複合扇状地を形成している。これらの河川はいずれも筑後川に流れ込み、さらに有明海へと通じている。

佐賀平野南部は、「有明海北岸低地」と呼ばれる非常に平坦な臨海低地で、神埼市・吉野ヶ里町ではおおよそJR長崎線から南側の地域にあたる。この低地は非常に傾斜が緩やかであることに加え、干満の差が大

きいことで知られる有明海の潮汐作用の影響を強く受けており、満潮時に多量の降水があると広い範囲で冠水するが、干潮時には比較的早く排水される。したがって、この地域での生活や農業には、水をいかに管理するかが重要になるが、それに対して大きな役割を果たしているのが、村落や田を網目状に囲んでいる「クリーク」又は「堀」と呼ばれる溝渠網であり、これにより佐賀独特の景観が形成されている。

両市町の表層地質は、北部の脊振山地は主に中生代白亜紀に生成した花崗岩からなっている。山地南麓に発達する洪積段丘は、高位・中位・低位段丘の3群に区分されている（有明海研究グループ1965）。高位段丘は、立石層と呼ばれる風化が著しく進んだ砂礫層からなる。両市町では吉野ヶ里町と上峰町の町境に「二塚山」と通称されていた高位段丘があったが、佐賀東部中核工業団地建設に伴ってほとんど削平されており、現在では吉野ヶ里町三津地区にわずかにみられる程度である。なお、長期間の浸食によって著しく開析され、砂礫層の堆積面が残っていない尾根状の丘陵を含めて高位段丘とよぶ場合もある。中位段丘は中原層と呼ばれる砂礫層からなるが、阿蘇4火砕流堆積物に覆われている場合が多く、吉野ヶ里町横田地区や三津・吉野ヶ里地区にかけて分布している。吉野ヶ里町西隣の上峰町八藤遺跡下層では、阿蘇4火砕流によってなぎ倒された多数の樹木や樹根が発見されている。低位段丘は三田川層と呼ばれる砂礫層からなり、山地南麓から中位段丘周辺に広く分布している。低平地の泥質層は、非海成層である蓮池層と海成層である有明粘土層からなっている。

気候は、近隣の佐賀市の平年値（1980～2010年）を参考にすると、平均気温16.5℃、平均最高気温21.4℃、平均最低気温12.2℃、平均降水量1,870.1mm、平均相対湿度70%、平均日照時間1969.0時間となっている。やや古いデータではあるが『三田川町史』によると、三田川町は佐賀市と比べ気温が高く、降水量が多い傾向があり、脊振山系の気流の関係だろうと考えられると述べられている。また、北部の山地では平野部に比べ平均気温が低く、降水量が多い。このように、南部の平野部では夏の蒸し暑さは厳しいものの、全般的に暮らしやすい気候であるといえる。

吉野ヶ里遺跡周辺の地形についてやや詳しく見ていくと、遺跡は南北に細長い志波屋・吉野ヶ里段丘の南部に立地しており、同じ段丘上に三津永田遺跡や下三津西古墳などが所在している。この段丘から西側には発達した段丘はみられず、佐賀から北東方面に行くと、最初にみられる明瞭な台地となる。志波屋・吉野ヶ里段丘は、遺跡でいうと吉野ヶ里遺跡志波屋四の坪地区と神崎市志波屋五の坪遺跡の間に比較的大きな鞍部があり、遺跡の分布状況と合わせて、遺跡を区分することができよう。段丘南端部にはJR長崎線・国道34号線が東西に走っており、おそらく線路敷設に伴うとみられる地形の改変が著しいこともあり、南側の水田部との段差など地形の詳細が判別しにくくなっている。

遺跡が立地している段丘は中・低位段丘に分類され、段丘面の標高はおおよそ20～25mで、周辺の水田面との比高差は10m前後である。中位段丘上では阿蘇4火砕流堆積物が厚く堆積しており、良好な部分では上部に褐色系統の「おがくず状ローム」、その下に黄灰～灰白色系統の八女粘土層という典型的な地層を見ることができる。

段丘の東側、特に吉野ヶ里遺跡の東側では段丘直下を田手川が南流しているが、元々は段丘が南東方向にのびている杉籠地区の東側を段丘に沿うように蛇行して流れていたものを、人工的に段丘鞍部を掘削して南北方向にほぼ真っ直ぐの流路に付け替えたことが推定されている。鎌倉時代末期の状況が描かれたと考えられている「東妙寺并妙法寺境内絵図」には現在とほぼ同じ流路で田手川が描かれており、古代に流路の付け替えが行われたようである。

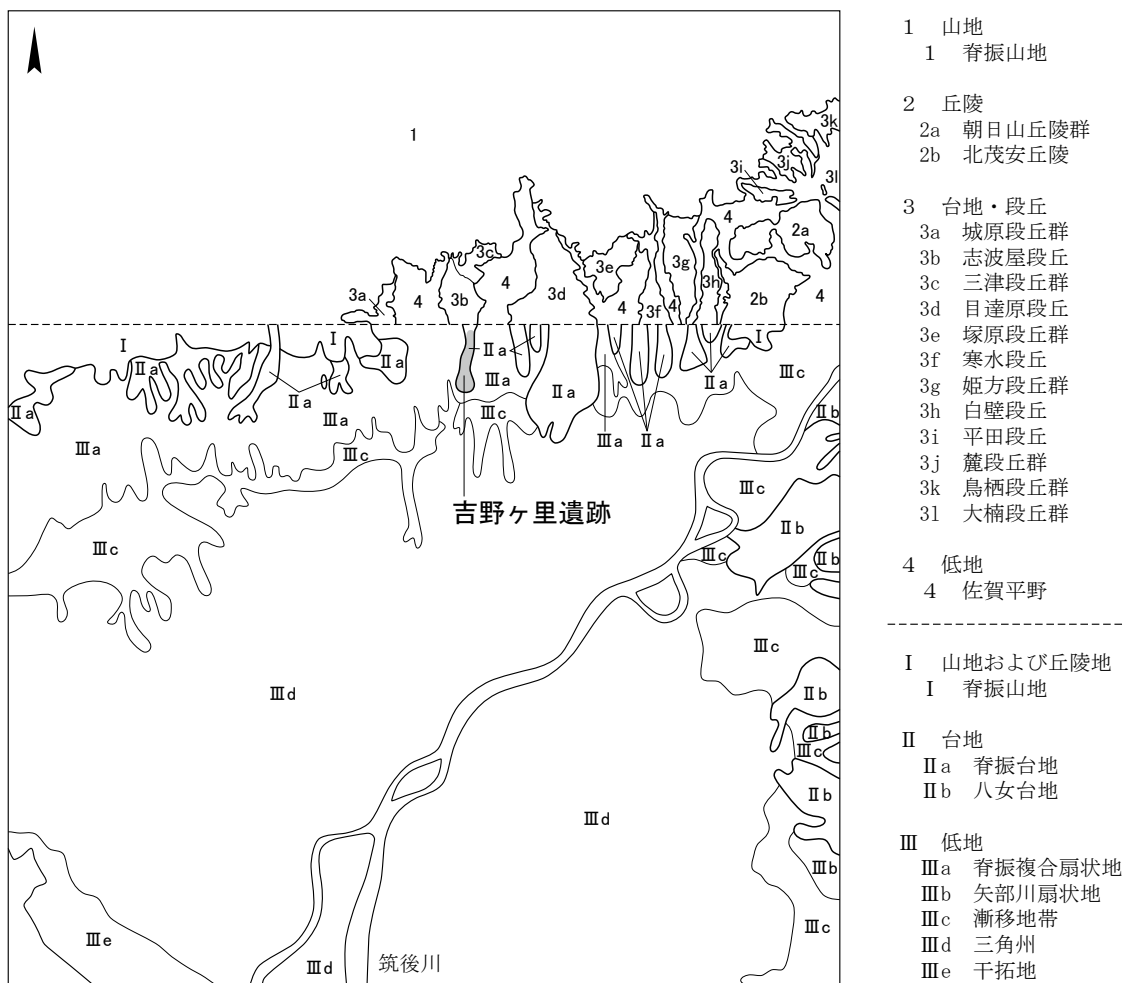


図7 吉野ヶ里遺跡周辺の地形分類

段丘の約1.8km西側を南流している城原川と志波屋・吉野ヶ里段丘の間には、平野が広がっており、貝川や三本松川といった小規模な河川が南流している。この平野部は標高7～16mほどで、有明海の潮汐作用の影響を受けにくいと考えられ、古来より水田経営に適した土地であったことは明らかであろう。

このように、吉野ヶ里遺跡は居住しやすい丘陵、周辺の広々とした平野、豊かな水や温暖な気候などから、古代人の生活に適した土地柄であり、また山も近いことから山の幸、田手川などの水運を利用すれば、海の幸も入手しやすい場所であったことが推測される。さらに有明海を通じた海上の交通路も利用しやすいことも重要であろう。

なお、図3は、経済企画庁総合開発局国土調査課（1965・1966）と佐賀県企画室（1978）が刊行した『土地分類基本調査』（佐賀・脊振山）の「地形」を元に作成した図である。作成主体と年が異なっているため、南北で異なる分類となっており、その境界を破線で示している。

3 歴史的環境

歴史的環境については、神崎市・吉野ヶ里町の遺跡の調査で得られた考古学的な成果を中心に述べ、全般的な歴史的環境は町史などを参照にさせていただきたい。なお、参考文献としての調査報告書は、煩雑さを避けるために本文中には記さず、市町村ごとにこの項の最後にまとめた。

(1) 旧石器・縄文時代

旧石器時代については、断片的な採集資料が多く、また調査例も少ないため、不明な部分が多い。そうした中、神崎市船塚遺跡では二つの文化層を検出し、瀬戸内系の技術・形態的特徴を持つ石器群と在地的なナイフ形石器等が出土しており、注目される。その他に、吉野ヶ里遺跡、吉野ヶ里町山古賀遺跡などからナイフ形石器や角錐状石器、台形状石器が出土している。

縄文時代になると、旧石器時代に比べ調査事例は増加する。遺跡の多くは脊振山系南麓の段丘や丘陵上に立地する。ただし、縄文時代草創期の遺跡はみられない。

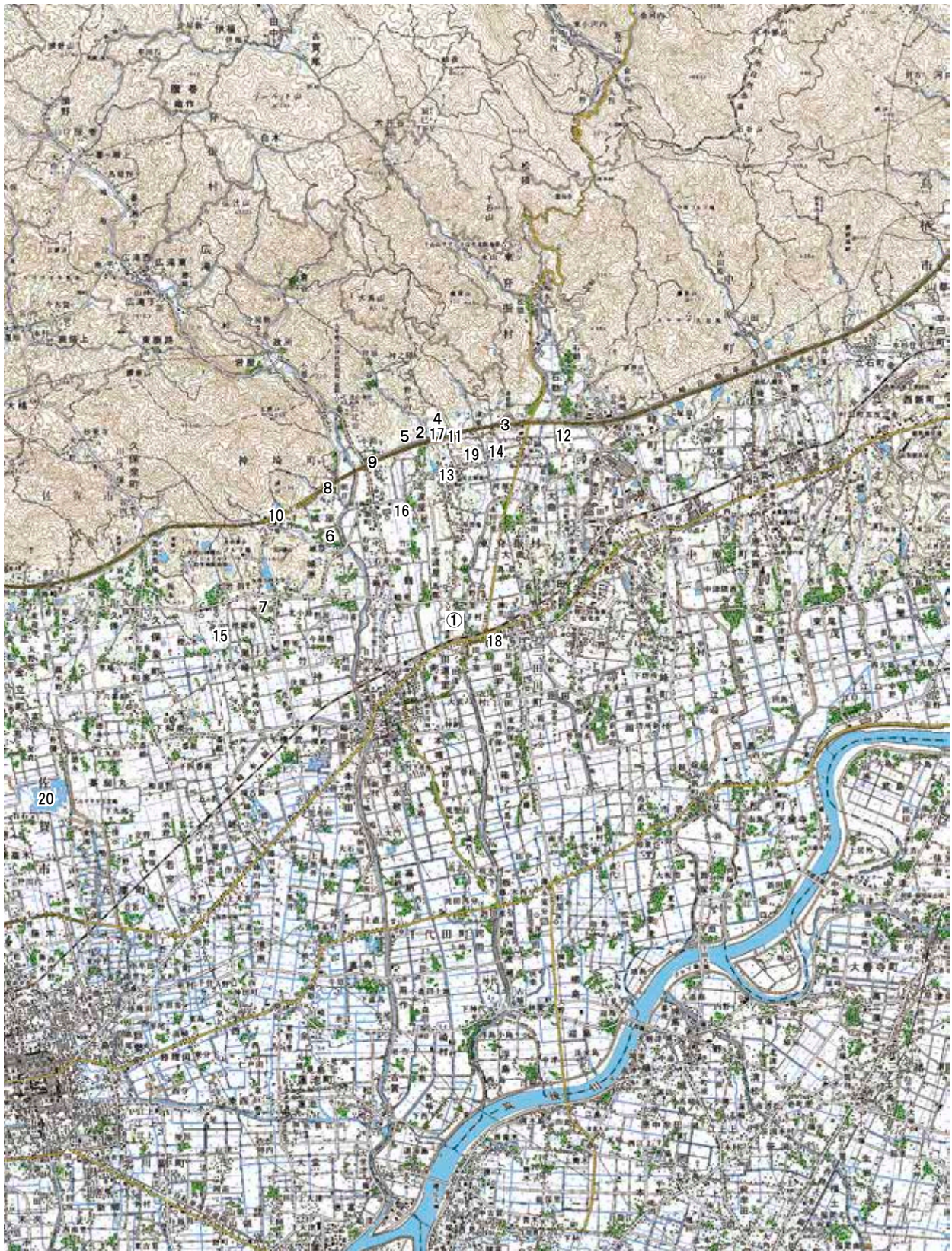
縄文時代早期の遺跡としては、学史上著名な吉野ヶ里町戦場ヶ谷遺跡をはじめ、吉野ヶ里遺跡、神崎市志波屋六本松遺跡・的遺跡・切畑遺跡・猿嶽 A 遺跡・城原一本松遺跡・唐香原遺跡、吉野ヶ里町浦田遺跡・石動四本松遺跡などがある。これらの遺跡では、当該期の土器や石器が採集されており、志波屋六本松遺跡や戦場ヶ谷遺跡、吉野ヶ里町三津永田東遺跡などでは集石遺構も確認されている。また、大規模な湿地性貝塚などが確認された佐賀市東名遺跡の調査成果によって、早期の遺跡が現地表面より深い位置に埋没して存在することが明らかとなり、今後神埼地域でも同様の遺跡が発見される可能性がある。

縄文時代前・中期の遺跡は、早期の遺跡と重複している場合が多く、船塚遺跡・切畑遺跡・猿嶽 A 遺跡・城原一本松遺跡、戦場ヶ谷遺跡・浦田遺跡などがあり、吉野ヶ里遺跡田手一本黒木地区でも、阿高式土器が出土している。ただ、遺構や遺物は全般的に少なく、詳細な様相については不明確な部分が多い。

なお、上記の遺跡は脊振山系南麓部に立地しているが、脊振山地内の河川沿いの平坦地にも点々と小規模な縄文時代の遺跡が確認されている。いずれも未調査のため詳細は不明であるが、同様の立地にある佐賀市富士町などでの調査成果からみて、狩猟などのために一時的に居住した集落の存在が推測される。

縄文時代後期になると、前・中期に比べ遺構や遺物が増加する。戦場ヶ谷遺跡・猿嶽 A 遺跡・城原一本松遺跡などで確認されており、志波屋六本松遺跡では後期前葉～中葉の竪穴建物跡 3 棟、後期後葉の竪穴建物跡 1 棟などが検出されており、この時期の集落の様相を知る上で重要な資料が得られている。また、吉野ヶ里町タヶ里遺跡（現：庄尾分遺跡）でも後期中葉の竪穴住居跡が検出されている。

縄文時代晩期も、後葉を中心として遺跡が確認されている。晩期前葉～中葉では、神崎市迎田遺跡で埋葬 1 基が調査され、切畑遺跡から土器が出土している。晩期後葉（弥生時代早期）では、船塚遺跡で竪穴建物跡 1 棟が検出され、神崎市上志波屋七ノ坪遺跡で溝跡から土器が出土し、吉野ヶ里町寺ヶ里遺跡で土坑 7 基が調査されている。このほか、猿嶽 A 遺跡などで刻目突帯文土器が出土している。これらの遺跡は、いずれも晩期以前の遺跡と同じく脊振山系南麓部に立地するが、この時期には沖積平野部にも遺跡が出現している。吉野ヶ里町田手二本松遺跡は志波屋・吉野ヶ里段丘南東側の標高 8～9 m の平野部に位置し、明確な遺構は検出されなかったが、遺物包含層が確認され、低地部でも開発が行われていたことを示す遺跡である。



1. 吉野ヶ里遺跡 2. 船塚遺跡 3. 山古賀遺跡 4. 戦場ヶ谷遺跡 5. 志波屋六本松遺跡 6. 城原一本松遺跡 7. 唐香原遺跡
 8. 切畑遺跡 9. 的遺跡 10. 猿嶽A遺跡 11. 浦田遺跡 12. 石動四本松遺跡 13. 三津永田遺跡 14. タケ里遺跡 15. 迎田遺跡
 16. 上志波屋七ノ坪遺跡 17. 寺ヶ里遺跡 18. 田手二本松遺跡 19. 三津永田東遺跡 20. 東名遺跡

図8 旧石器・縄文時代の遺跡分布 (1/100,000) 国土地理院の数値地図 25000 (地図画像)『福岡・熊本』を使用

(2) 弥生時代

弥生時代前期

前期については、初頭～前半は遺跡数が少なく、詳細な様相は不明であるが、後半には遺跡が増加し、立地もより低地に拡大している。

前期初頭～前半では、吉野ヶ里遺跡で溝や竪穴建物が出現し、集落が営まれ始める。この他の集落はほとんど確認されていないが、神崎市志波屋六の坪（甲）遺跡で前半と推定されている竪穴建物跡が検出され、神崎市田道ヶ里田二本松遺跡では前期初頭～前半の土器が出土している。墳墓としては、神崎市八子四本黒木遺跡で祭祀土坑の出土土器から前期前半には埋葬が始まると考えられる墓地が確認された。このほか、吉野ヶ里町戦場古墳群 1 区で前期前半～後半の甕棺墓、戦場古墳群 6 区で前期前半とみられる支石墓 1 基が調査されている。

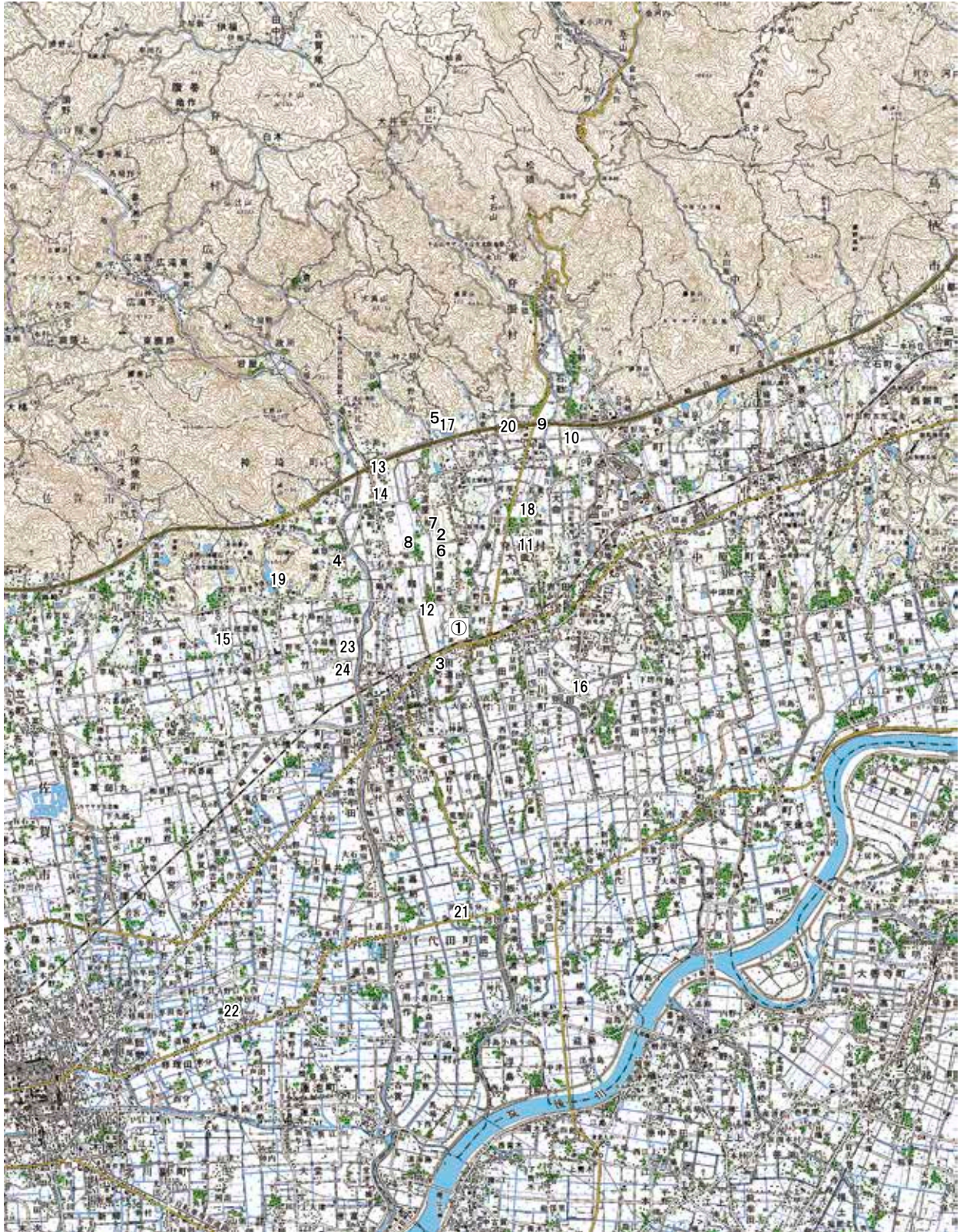
前期後半～末では、吉野ヶ里遺跡南部で大規模な環壕集落が形成される。この他の集落としては、神崎市志波屋三の坪（甲）遺跡・志波屋六の坪（乙）遺跡・志波屋一の坪遺跡、吉野ヶ里町西石動遺跡・石動四本松遺跡・瀬ノ尾遺跡で竪穴建物跡が確認され、神崎市枝町遺跡・的遺跡・的五本黒木遺跡・迎田遺跡、吉野ヶ里遺跡下中杖遺跡・戦場ヶ谷遺跡で溝跡や土坑などが検出されている。吉野ヶ里町松原遺跡では環壕が形成されていた可能性がある。墳墓としては、八子四本黒木遺跡で木棺墓・甕棺墓からなる墓地が継続しており、神崎市志波屋一の坪遺跡・日の尺池古墳群、吉野ヶ里町山古賀遺跡 1 区でも甕棺墓が調査されている。これらの遺跡は、主に段丘上に立地しているが、この時期には有明海北岸低地に遺跡が確実に出現している。神崎市詫田西分遺跡・貴別当神社遺跡などで遺構が確認され、集落が形成されていたことが判明しており、またこのような遺跡には貝塚を伴う場合が多い。このほか、利田柳遺跡では前期末から甕棺墓地が展開し始め、利田黒木遺跡で土器が出土している。

弥生時代中期

中期になると、前期に比べ遺跡の数は飛躍的に増加する。前期の集落が主に立地する段丘上でも遺跡が増加しているが、特に中期前半～後半には神埼地域南部の沖積平野部に立地する遺跡が多く確認されているのが特徴である。墓地では、甕棺墓が主体となる大規模な墓域が形成されており、中期前半を中心に列状に埋葬される場合が多く、主に銅剣を副葬する有力者層が出現していることが認められる。また、青銅器を製作した遺跡が確認されている。

吉野ヶ里遺跡では、前期から引き続き遺跡南部がその中心的な集落となるが、それ以外の地区でも中期初頭～前半の集落が確認されている。遺跡南部の田手二本黒木地区では青銅器を鑄造したことを示す遺構・遺物が確認されている。また、志波屋四の坪地区を代表として、甕棺墓を主体とする墓地が各地区で形成され、中期前半には列状に埋葬される場合が多い。副葬品をもつ墓としては、田手一本黒木地区 I 区で細形銅剣を副葬した中期初頭の甕棺墓が最古例である。中期前半新相には吉野ヶ里丘陵地区 V 区で墳丘墓が築造され、中期後半までに 14 基の甕棺墓が埋葬され、そのうち 8 基には銅剣やガラス製管玉が副葬されている。遺跡周辺では、志波屋六の坪（乙）遺跡で竪穴建物と貯蔵穴からなる集落、枝町遺跡で中期前半～末の甕棺墓地、三津永田遺跡で甕棺墓が調査されている。

中期初頭～前半の集落は、段丘上などの遺跡では竪穴建物と貯蔵穴から構成される例が多い。この時期で主に段丘上に立地する集落としては、神崎市志波屋六の坪（乙）遺跡・切畑遺跡・八子六本黒木遺跡・八子



1. 吉野ヶ里遺跡 2. 志波屋六の坪(甲)遺跡 3. 田道ヶ里田二本松遺跡 4. 八子四本黒木遺跡 5. 戦場古墳群 6. 志波屋三の坪(甲)遺跡
 7. 志波屋六の坪(乙)遺跡 8. 志波屋一の坪遺跡 9. 西石動遺跡 10. 石動四本松遺跡 11. 瀬ノ尾遺跡 12. 枝町遺跡 13. 的遺跡
 14. 的五本黒木遺跡 15. 迎田遺跡 16. 下中杖遺跡 17. 戦場ヶ谷遺跡 18. 松原遺跡 19. 日の尺池古墳群 20. 山古賀遺跡
 21. 詫田西分遺跡 22. 貴別当神社遺跡 23. 利田柳遺跡 24. 利田黒木遺跡

図9 弥生時代前期の遺跡分布 (1/100,000) 国土地理院の数値地図 25000 (地図画像)『福岡・熊本』を使用

一本黒木遺跡・熊谷遺跡、吉野ヶ里町夕ヶ里遺跡・西前田遺跡・下石動遺跡・松原遺跡・瀬ノ尾遺跡・大曲遺跡などで確認されている。これらの遺跡では、これまでの調査成果から環壕が検出された明確な例はみられない。中期初頭～前半の甕棺墓を主体とする墓地は、神崎市志波屋三の坪（甲）遺跡・八子四本黒木遺跡・八子二本黒木遺跡・八子六本黒木遺跡・八子三本黒木遺跡・伏部大石遺跡・熊谷遺跡・西田遺跡、吉野ヶ里町松葉遺跡・西前田遺跡・西石動遺跡・松原遺跡などで多数確認されている。また、詳細な時期は不明であるが、吉野ヶ里町瓢箪塚古墳下層で細形銅剣を副葬した甕棺墓が検出されている。

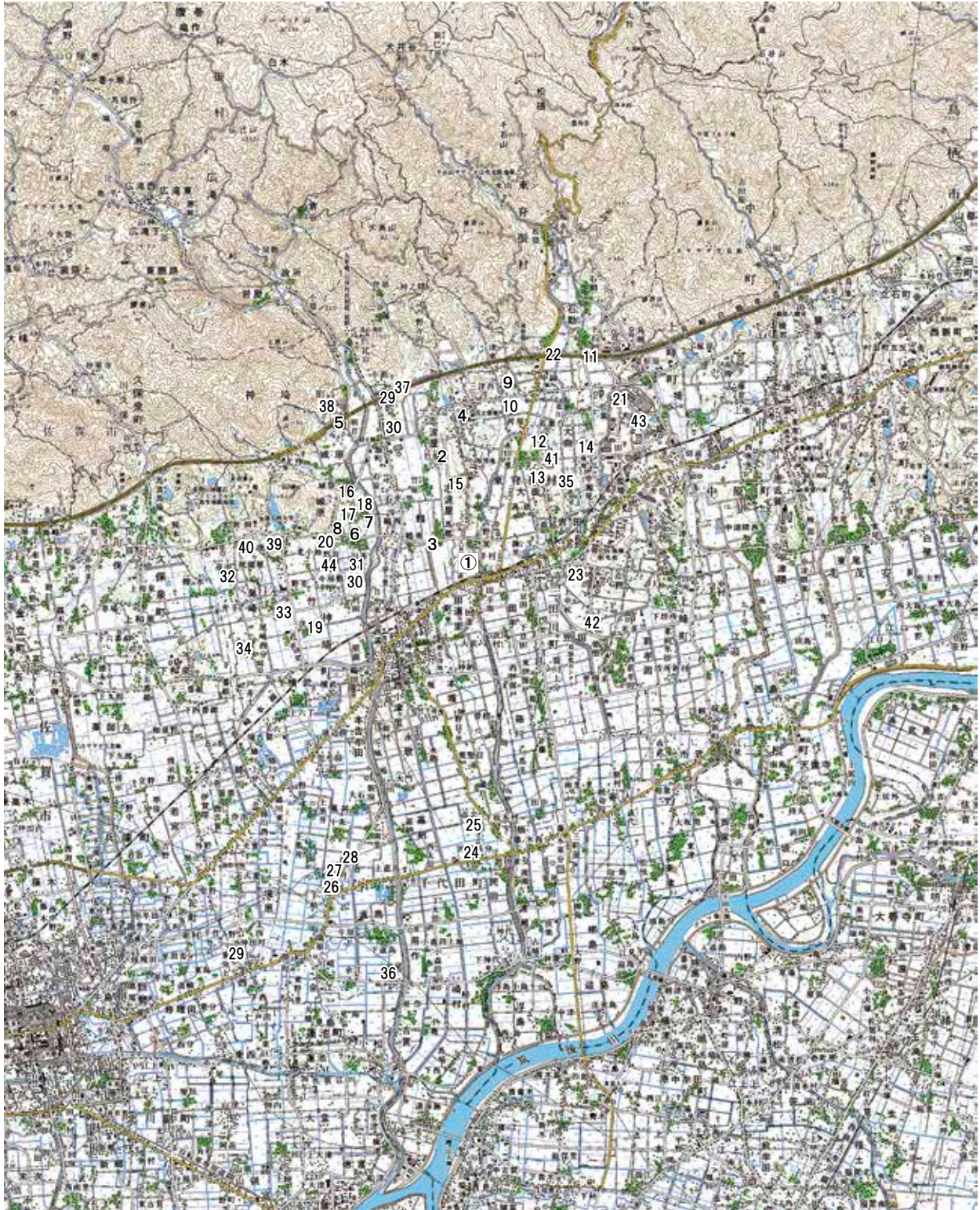
中期初頭には、沖積平野部での遺跡の増加が著しい。これらの遺跡は、段丘上の遺跡とは異なり、竪穴建物が確認されておらず、明確な検出例はほとんどないものの、掘立柱建物が住居として利用されたものと思われる。また、この時期から井戸が検出されるようになり、平野部の集落は掘立柱建物・井戸・貯蔵穴で構成されると考えられ、姉遺跡で確認されているように主に排水が目的と推測される環濠が巡っていた可能性がある。中期初頭～前半の集落として、神崎市詫田西分遺跡・高志神社遺跡・姉遺跡・黒井遺跡・黒井八本松遺跡・貴別当神社遺跡・利田柳遺跡などがある。姉遺跡では、銅矛鑄型と銅剣鑄型が出土し、鑄造遺構などは発見されていないが、青銅器を鑄造していたものと考えられる。このほか、姉遺跡や黒井遺跡などで朝鮮系無文土器やその影響を受けたと推測されている土器が出土している。墳墓も、高志神社遺跡・利田柳遺跡などで甕棺墓地が確認されており、定住していたことを示している。高志神社遺跡では、中期前半新相の甕棺墓で寛骨に銅剣切先が陥入した成年男性に細形銅剣を副葬しており、注目される。

中期後半になると、遺跡の立地がやや変化しはじめ、中期末～後期前半には沖積平野低地部で集落があまり確認されなくなる。集落では貯蔵穴が少なくなり、貯蔵形態は掘立柱建物に交代していくことをうかがわせる。墓地で甕棺墓が主体となることは、中期前半と変わらない。

吉野ヶ里遺跡では、集落が減少する傾向がみられるが、墓地には減少はみられないと考えられる。吉野ヶ里丘陵地区IX区では密集する甕棺墓地が確認され、中期末の甕棺墓に前漢鏡が棺外、イモガイ製貝輪が棺内に副葬されていた。遺跡周辺では、三津永田遺跡で中期後半から本格的に甕棺墓が営まれ始めたようで、後期前半まで副葬品をもつものがみられる。

中期後半～末では、集落としての的遺跡・的五本黒木遺跡・切畑遺跡・八子六本黒木遺跡・八子一本黒木遺跡・川寄吉原遺跡・利田柳遺跡・迎田遺跡・尾崎土生遺跡・尾崎利田遺跡、吉野ヶ里町西前田遺跡・松原遺跡・東外遺跡などがある。このうち、松原遺跡で環壕が形成されていたとみられ、八子一本黒木遺跡・尾崎土生遺跡でも環壕の可能性がある溝跡が確認されている。沖積平野部の遺跡では、詫田西分遺跡・高志神社遺跡・姉遺跡・黒井遺跡・黒井八本松遺跡・柴尾遺跡・貴別当神社遺跡・利田柳遺跡など柴尾遺跡を除き、中期前半から集落が継続しているが、中期末になると詫田西分遺跡・黒井遺跡・黒井八本松遺跡・柴尾遺跡・貴別当神社遺跡などと集落が少なくなり、これらの遺跡でも遺構数は減少している。

墓地は変わらず多く認められ、志波屋六本松乙遺跡・朝日北遺跡・八子四本黒木遺跡・八子二本黒木遺跡・八子三本黒木遺跡・熊谷遺跡・西田遺跡・唐香原遺跡・塚原遺跡、吉野ヶ里町松原遺跡・瀬ノ尾遺跡・松の内遺跡・下中杖遺跡などで甕棺墓を主体とする墓地が確認されている。吉野ヶ里町と上峰町にまたがる二塚山遺跡では、中期後半に本格的に甕棺墓が展開し始め、後期前半を中心に豊富な副葬品が出土しているが、立岩式期の甕棺墓にも前漢鏡が副葬されている。また、志波屋六本松乙遺跡では中期後半の甕棺墓に鉄剣が副葬されていた。沖積平野部では墓地がほとんど確認されておらず、利田柳遺跡・野田遺跡で認められる程度である。



1. 吉野ヶ里遺跡 2. 志波屋六の坪(乙)遺跡 3. 枝町遺跡 4. 三津永田遺跡 5. 切畑遺跡 6. 八子六本黒木遺跡 7. 八子一本黒木遺跡
 8. 熊谷遺跡 9. タケ里遺跡 10. 西前田遺跡 11. 下石動遺跡 12. 松原遺跡 13. 瀬ノ尾遺跡 14. 大曲遺跡 15. 志波屋三の坪(甲)遺跡
 16. 八子四本黒木遺跡 17. 八子二本黒木遺跡 18. 八子三本黒木遺跡 19. 伏部大石遺跡 20. 西田遺跡 21. 松葉遺跡 22. 西石動遺跡
 23. 瓢箪塚古墳 24. 詫田西分遺跡 25. 高志神社遺跡 26. 姉遺跡 27. 黒井遺跡 28. 黒井八本松遺跡 29. 貴別当神社遺跡 28. 利田柳遺跡
 29. 的遺跡 30. 的五本黒木遺跡 31. 川寄吉原遺跡 32. 迎田遺跡 33. 尾崎土生遺跡 34. 尾崎利田遺跡 35. 東外遺跡 36. 柴尾遺跡
 37. 志波屋六本松乙遺跡 38. 朝日北遺跡 39. 唐香原遺跡 40. 塚原遺跡 41. 松の内遺跡 42. 下中杖遺跡 43. 二塚山遺跡 44. 野田遺跡

図10 弥生時代中期の遺跡分布 (1/100,000) 国土地理院の数値地図 25000 (地図画像) 『福岡・熊本』を使用

弥生時代後期

後期になると、後期前半の遺跡は多くないが、後期後半～終末期の集落が多数確認され、大規模な集落も認められるようになり、この地域の弥生時代集落の最盛期となる。集落は基本的に、竪穴建物と掘立柱建物で構成されるものが段丘上を中心に、掘立柱建物と井戸で構成されるものが沖積平野部に立地している。また、特徴的な環壕が掘削されている遺跡がみられる。墳墓は、後期前半には甕棺墓や土坑墓からなる墓地が確認されるが、それ以降は単発的に検出される場合がほとんどである。

吉野ヶ里遺跡では、後期前半に外環壕が掘削され始め、再び集落が増加・拡大している。墓地は、中期末から継続して甕棺墓や土坑墓などが確認されている墓域が多い。また、吉野ヶ里地区V区の外環壕跡から青銅器鋳型が出土しており、巴形銅器などを生産していたものと推測される。周辺では、志波屋六の坪（乙）遺跡で集落が形成され始めたと思われる。

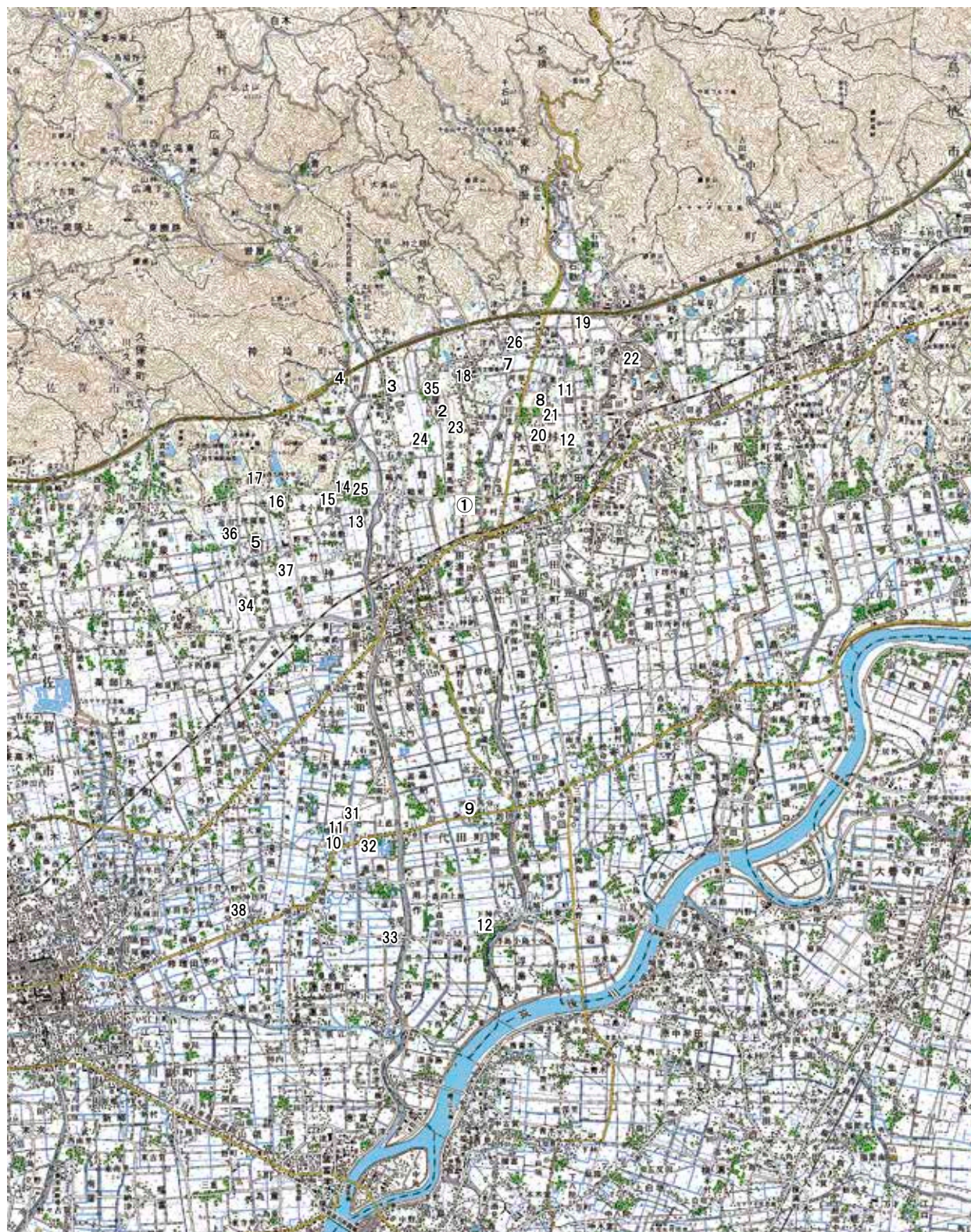
後期前半の遺跡として、低位段丘から複合扇状地に立地する集落である的々五本黒木遺跡・切畑遺跡・祇園原遺跡・尾崎土生遺跡、西前田遺跡などで竪穴建物跡や掘立柱建物跡などが確認されている。中位段丘上の松原遺跡では集落が展開していたようである。沖積平野部では、詫田西分遺跡・姉遺跡・黒井遺跡・崎村遺跡・川寄吉原遺跡などで集落が調査されている。ただ、この時期の集落は全体的に数が少なく、詳細は不明な点が多い。墓地については、熊谷遺跡・西田遺跡・唐香原遺跡・横山遺跡、三津永田遺跡・石動四本松遺跡・瀬ノ尾遺跡・松の内遺跡・二塚山遺跡で甕棺墓や土坑墓からなる墓域が確認されている。このうち、二塚山遺跡で舶載鏡などの豊富な副葬品を出土した墓地、三津永田遺跡で舶載鏡や素環頭大刀が副葬された甕棺墓などが調査され、三津永田遺跡から出土した甕棺は甕棺編年において後期前半の標識となっている。また、石動四本松遺跡では破碎した舶載鏡、横山遺跡では鉄剣が甕棺墓の棺外に副葬されていた。このほか、吉野ヶ里町目達原から埋納されたとみられる中広形銅矛4本が出土している。

後期後半になると、前半に比べて集落が増加している。吉野ヶ里遺跡では、約40ha以上を取り囲むと考えられる外環壕が完成し、その内部をさらに環壕で区画する南内郭が成立している。また、外環壕西側には高床倉庫群が形成されている。このほか、志波屋四の坪地区でも竪穴建物と掘立柱建物で構成される集落が確認されている。墓地は、後期後半以降ほとんど認められなくなる。吉野ヶ里遺跡周辺では、志波屋六の坪（乙）遺跡・志波屋六の坪（甲）遺跡・志波屋一の坪遺跡でこの時期の集落が確認されている。

後期後半の遺跡として、八子六本黒木遺跡・祇園原遺跡、吉野ヶ里町夕ヶ里遺跡・西前田遺跡・松原遺跡・瀬ノ尾遺跡・亀作遺跡・東外遺跡などで、主に段丘上に立地する集落が確認されている。沖積平野部では、詫田西分遺跡・姉遺跡・黒井遺跡・黒井八本松遺跡・直鳥四本松遺跡・柴尾遺跡などで集落が調査されている。墓地はこの時期以降、集団墓地を形成する例はほとんどなくなり、尾崎利田遺跡でみられるように数基の甕棺墓などが確認されるのみとなる。

終末期も後期後半と同様に遺跡が多数確認され、多重の環壕が巡る集落がみられるようになる。吉野ヶ里遺跡では、2重環壕で区画された北内郭が形成され、南内郭は掘り直される。北内郭内には、総柱構造で大規模の掘立柱建物跡が検出され、吉野ヶ里遺跡の最盛期であることが明らかとなっている。また、内郭の環壕には外側に突出する部分があり、その内側に掘立柱建物跡が検出されている。周辺では、志波屋六の坪（乙）遺跡・志波屋一の坪遺跡で集落が継続し、志波屋二本松（乙）遺跡でも竪穴建物跡が調査されている。

終末期の遺跡として、八子六本黒木遺跡・迎田遺跡・祇園原遺跡・尾崎土生遺跡、夕ヶ里遺跡・西前田遺跡・松原遺跡・瀬ノ尾遺跡・亀作遺跡などで集落が認められる。このうち、松原遺跡では多重の環壕の中心に四



1. 吉野ヶ里遺跡 2. 志波屋六の坪(乙)遺跡 3. 的々本黒木遺跡 4. 切畑遺跡 5. 祇園原遺跡 6. 尾崎土生遺跡 7. 西前田遺跡
 8. 松原遺跡 9. 詫田西分遺跡 10. 姉遺跡 11. 黒井遺跡 12. 崎村遺跡 13. 川寄吉原遺跡 14. 熊谷遺跡 15. 西田遺跡 16. 唐香原遺跡
 17. 横山遺跡 18. 三津永田遺跡 19. 石動四本松遺跡 20. 瀬ノ尾遺跡 21. 松の内遺跡 22. 二塚山遺跡 23. 志波屋六の坪(甲)遺跡
 24. 志波屋一の坪遺跡 25. 八子六本黒木遺跡 26. タヶ里遺跡 29. 亀作遺跡 30. 東外遺跡 31. 黒井八本松遺跡 32. 直鳥四本松遺跡
 33. 柴尾遺跡 34. 尾崎利田遺跡 35. 志波屋二本松(乙)遺跡 36. 迎田遺跡 37. 尾崎土生遺跡 38. 貴別当神社遺跡

図 11 弥生時代後期の遺跡分布 (1/100,000) 国土地理院の数値地図 25000 (地図画像)『福岡・熊本』を使用

隅にわずかに突出をもつ小規模な方形環壕が二つ並列していることが明らかとなっている。このほか、八子六本黒木遺跡・迎田遺跡では吉野ヶ里遺跡でみられた環壕突出部が検出されている。沖積平野部では、黒井八本松遺跡・直鳥四本松遺跡・柴尾遺跡・貴別当神社遺跡で集落が確認されている。墓地としては、石動四本松遺跡で列状に埋葬された石棺墓群が調査されている。また、詳細な時期や出土状況は不明であるが、横田遺跡（現：松原遺跡）から副葬されたとみられる舶載鏡・素環頭鉄刀が出土している。

（3）古墳時代

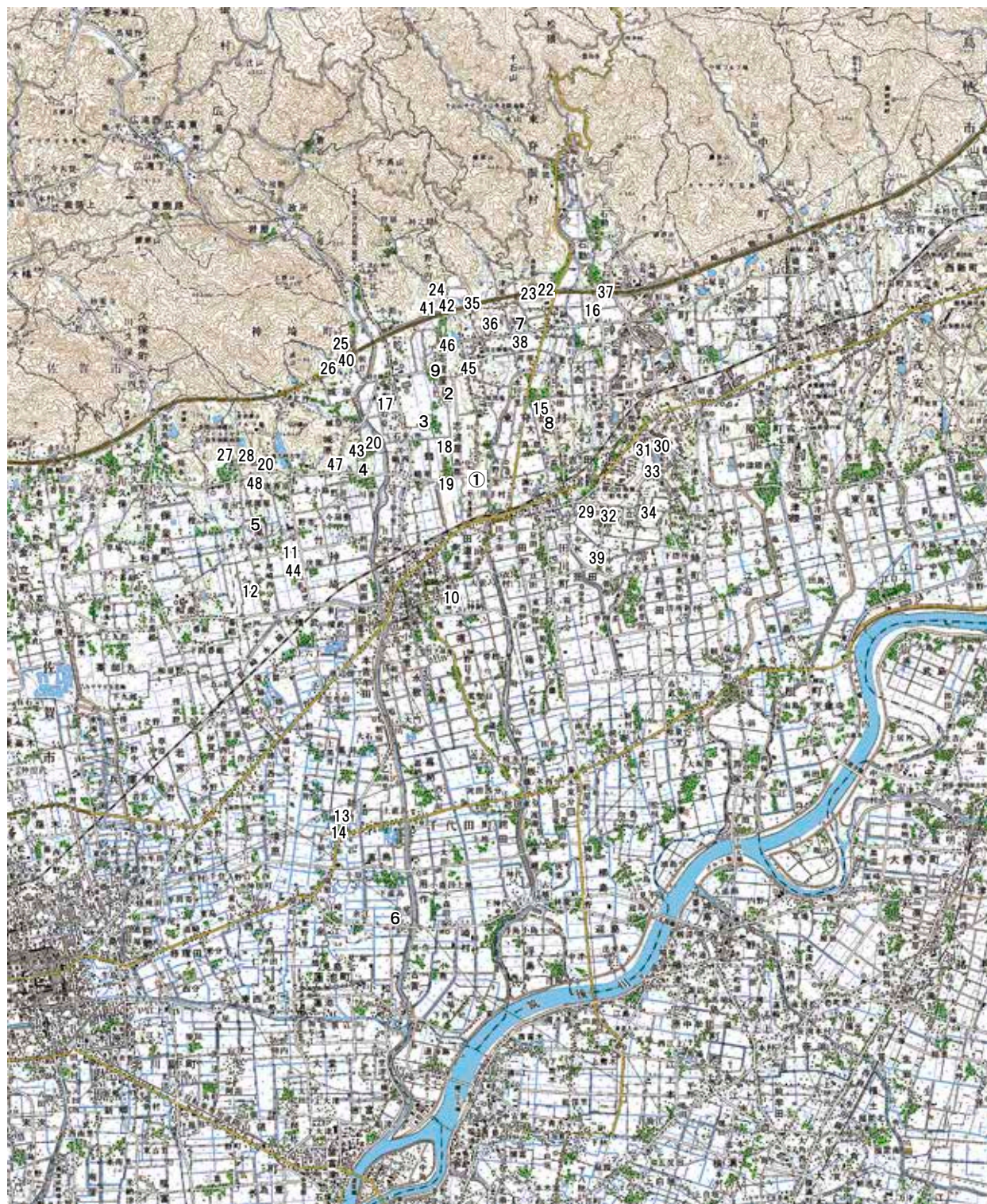
古墳時代前期では、弥生時代終末期から継続して古墳時代初頭まで存続する集落として吉野ヶ里遺跡、志波屋六の坪（乙）遺跡・志波屋一の坪遺跡・八子六本黒木遺跡・祇園原遺跡・柴尾遺跡、夕ヶ里遺跡・瀬ノ尾遺跡があり、このほかに神崎市志波屋二本松（乙）遺跡・本堀朝日遺跡・尾崎土生遺跡・尾崎利田遺跡・黒井遺跡・姉遺跡、吉野ヶ里町松の森遺跡・石動四本松遺跡などがある。神崎市右原祇園町遺跡では居館跡と考えられる前期初頭の方形区画溝が検出され、詳細は不明であるが、中園遺跡で前期の竪穴建物跡が多数確認されている。この時期の墳墓としては、吉野ヶ里遺跡で前方後方墳4基や方形周溝墓、枝町遺跡・八子三本黒木遺跡・横山遺跡で方形周溝墓、突出部を持つ不整円墳である吉野ヶ里町西一本杉 ST008 古墳、山古賀遺跡で石棺墓や土坑墓からなる墓地、志波屋六本松古墳群・朝日北遺跡・朝日遺跡で箱式石棺墓や土坑墓を内部主体とする低墳丘の古墳群などが確認されている。吉野ヶ里遺跡の前方後方墳は、北から吉野ヶ里丘陵地区 ST0942（全長約 20 m）・ST0941（推定全長 26 m）・ST2200（全長 30 m）、田手二本黒木地区 ST0568（全長 40 m）と段丘上に展開しており、ST0568 は九州で最大規模の前方後方墳である。

このように初頭を中心とした集落・墳墓が確認されているが、継続性に乏しいものが多い。前～中期にかけては、志波屋二本松（乙）遺跡・岩田芦ノ元遺跡・寺山古墳群で集落、墳墓として全長 24 m の前方後円墳である朝日 ST006 古墳などがあるが、前期後半～中期の様相は不明な点が多い。

その中で吉野ヶ里町と上峰町にまたがる目達原段丘上には、7 基の前方後円墳と 1 基の円墳からなる目達原古墳群が展開している。このうち瓢箪塚古墳がもっとも古いものと推定されているが、内容が不明であるため、正確な年代は不明である。その後、上のびゅう塚古墳（全長 49 m の前方後円墳）→目達原大塚古墳（全長 55 m の前方後円墳）→塚山古墳（全長 48 m の前方後円墳）→古稲荷塚古墳（径 35 m の円墳）→稲荷塚古墳（全長 50 m の前方後円墳）という 5 世紀前半～6 世紀前半の首長墓系譜が認められる。

古墳時代後期になると、中期とは異なる様相がみられる。集落として、吉野ヶ里遺跡・浦田遺跡・三津永田東遺跡・夕ヶ里遺跡・下石動遺跡・石動四本松遺跡・西前田遺跡・瀬ノ尾遺跡・下中杖遺跡・切畑遺跡・志波屋六本松遺跡・船塚遺跡・志波屋六の坪（乙）遺跡・右原祇園町遺跡・八子二本黒木遺跡・尾崎土生遺跡・花手遺跡などがあり、段丘上を中心に数多くの集落が展開していることが判明している。これに対応するように、脊振山系南麓部には後期の群集墳が密集している。

また、首長墓が中期にはみられなかった神埼地域で認められるようになる。石動四本松遺跡 4 区 ST217 前方後円墳は、墳丘は全て削平されているものの、周溝が確認され、全長約 50 m と推定されている。円筒埴輪・朝顔形埴輪・形象埴輪（人物・馬・鳥）などが出土し、5 世紀末～6 世紀初頭の築造と考えられている。志波屋段丘上では、下三津西古墳→伊勢塚古墳という 6 世紀後半代の首長墓系譜が認められる。下三津西古墳は全長 53 m の前方後円墳であるが、横穴式石室はほとんどの石材が抜き取られており、詳細は不明である。伊勢塚古墳は全長 78 m の前方後円墳で、同時期の佐賀平野では突出した規模を誇り、石室も県内



- 1. 吉野ヶ里遺跡 2. 志波屋六の坪(乙)遺跡 3. 志波屋一の坪遺跡 4. 八子六本黒木遺跡 5. 祇園原遺跡 6. 柴尾遺跡 7. タケ里遺跡
- 8. 瀬ノ尾遺跡 9. 志波屋二本松遺跡(乙)遺跡 10. 本掘朝日遺跡 11. 尾崎土生遺跡 12. 尾崎利田遺跡 13. 黒井遺跡 14. 姉遺跡
- 15. 松の森遺跡 16. 石動四本松遺跡 17. 右原祇園町遺跡 18. 中園遺跡 19. 枝町遺跡 20. 八子三本黒木遺跡 21. 横山遺跡
- 22. 西一本杉遺跡 23. 山古賀遺跡 24. 志波屋六本松古墳群 25. 朝日北遺跡 26. 朝日遺跡 27. 岩田芦ノ元遺跡 28. 寺山古墳群
- 29. 瓢箪塚古墳 30. 上のびゅう塚古墳 31. 目達原大塚古墳 32. 塚山古墳 33. 古稻荷塚古墳 34. 稲荷塚古墳 35. 浦田遺跡
- 36. 三津永田東遺跡 37. 下石動遺跡 38. 西前田遺跡 39. 下中杖遺跡 40. 切畑遺跡 41. 志波屋六本松遺跡 42. 船塚遺跡
- 43. 八子二本黒木遺跡 44. 花手遺跡 45. 下三津西古墳 46. 伊勢塚古墳 47. 二子山古墳 48. 岩田丸山古墳

図 12 古墳時代の遺跡分布 (1/100,000) 国土地理院の数値地図 25000 (地図画像)『福岡・熊本』を使用

最大級の巨室・巨石墳である。玄室奥壁には赤色顔料で円文が描かれていたとされる。このほか首長墓として、神崎市二子山古墳（全長 18 m の前方後円墳）・岩田丸山古墳（全長 28 m の前方後円墳）などがある。

（4）古代

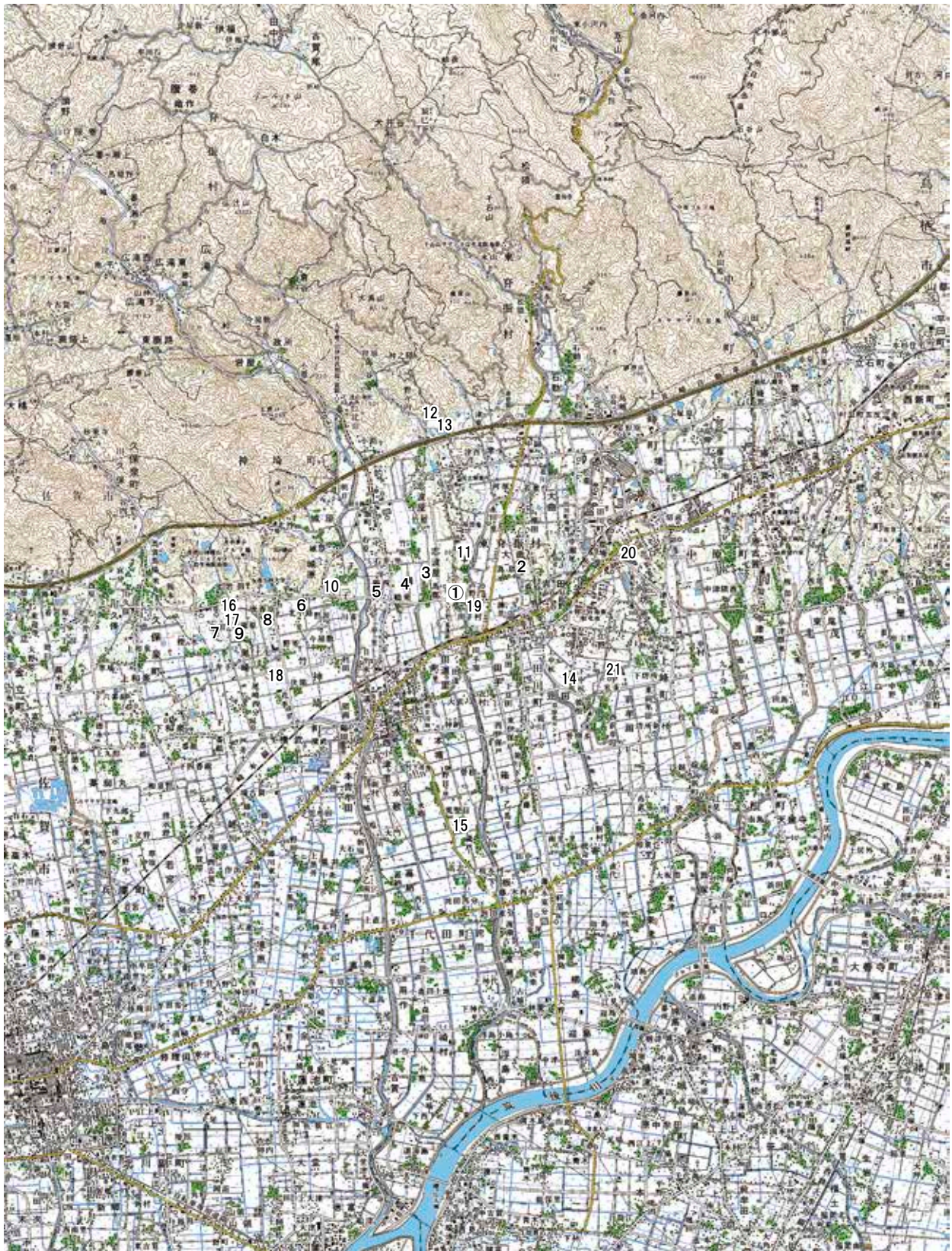
律令期になると、官道や官衙的な建物群、寺院など律令体制に密接に関わる遺跡が数多く確認されている。肥前国における古代官道については、空中写真を利用して道路痕跡を認めてゆく歴史地理学的方法により、佐賀市大和町からみやき町に至る直線約 17km が木下良氏によって復元されていた。発掘調査においては、吉野ヶ里遺跡志波屋四の坪・三の坪（乙）地区で丘陵の切通しとなった部分から西側の低地にかけて、県内で初めて道路跡が確認された。吉野ヶ里町鳥ノ隈遺跡でも切通しとなっている部分で道路跡が調査されている。このほか、神崎市中園遺跡・鶴前田遺跡・鶴籠遺跡・野島遺跡・迎田遺跡で道路跡やその痕跡が確認されている。また、発掘調査では明確な道路状痕跡などは認められなかったが、祇園原遺跡・唐香原遺跡には切通しがあり、官道の痕跡と考えられている。このように、歴史地理学的方法によって復元された直線道路は、奈良時代の官道であることが発掘調査によって確認されている。

この官道の周辺には、官衙的な建物群が多数確認されている。吉野ヶ里遺跡では、掘立柱建物跡 200 棟以上、井戸跡 50 基以上などが確認され、「日下部鳥甘」「□五月十日稲」「大嶋一斗二升」などと判別できる木簡 9 点や円面硯、墨書土器、ヘラ書き土器などが出土している。中園遺跡を始めとする馬郡・竹原遺跡群では、掘立柱建物跡、柵列跡、井戸跡、溝跡などが多数検出され、帯金具（鉸具）や「神人」と記された墨書土器、「厨鉢」「神埼厨」と書かれたヘラ書き土器などが出土している。また、上峰町坊所一本谷遺跡でも、官衙的な建物群が確認されており、注目される。

寺院跡としては、吉野ヶ里町辛上廃寺跡、上峰町塔の塚廃寺跡がある。辛上廃寺跡からは鴻臚館系の瓦が出土し、本格的な塔心礎も付近に存在している。開墾により削平されたと考えられていたが、吉野ヶ里遺跡大曲一の坪地区の確認調査によって伽藍配置が明らかとなった。南北約 110 m、東西約 80 m の築地に囲まれた寺域の内部に、門・金堂・僧坊と考えられる掘立柱建物跡や、塔基壇跡などが確認され、本格的な寺院であったことが判明した。塔の塚廃寺は南北 36 尺、東西 36 尺のおおよそ方形の塔跡土壇が残り、礎石も原位置を保っていたらしいが、飛行場建設のために消滅した。百済系単弁軒丸瓦が採集されている。周辺の状況から 1 堂塔のみの寺院の可能性が想定されている。

なお、第 1 章でも述べたが、佐賀県内の古代寺院として佐賀市肥前国分寺跡・肥前国分尼寺跡・大願寺跡、小城市寺浦廃寺についてふれておく（図 2）。肥前国分寺跡は、確認調査で確認された築地跡や内外の溝跡、西門基壇跡などによって約 218 m × 約 218 m（方二町）にほぼ確定された。寺域内は中央に金堂、その北側に講堂、南東に塔という伽藍配置で、塔の基壇は大規模であり、七重塔に推定されている。創建時の古瓦としては、鴻臚館系軒丸瓦・平瓦、鬼瓦、複弁蓮華文軒丸瓦、均正唐草文軒平瓦がある。一方、肥前国分尼寺跡は国分寺より西に約三町の場所に大昌尼寺跡伝承地に推定されているが、発掘調査が行われていないため、詳細は分かっていない。推定地周辺からは大宰府系鬼瓦や布目瓦が採集されている。

大願寺跡は大願寺集落内の五社明神境内を中心に広く礎石が分布しており、その数はおよそ 50 個を数える。境内内には建物基壇が残存し、条里制の遺構と遺物の分布状況から約 218 m × 約 218 m（方二町）と肥前国分寺と同規模だと推定されている。伽藍配置は明らかでないが、五社明神地区に柱座の造り出しをもつ礎石が多く、基壇が存在することから、この地区に中心的な建物である金堂又は講堂が、その東方約



1. 吉野ヶ里遺跡 2. 鳥ノ隈遺跡 3. 中園遺跡 4. 鶴前田遺跡 5. 鶴籠遺跡 6. 野島遺跡 7. 迎田遺跡 8. 唐香原遺跡
 9. 祇園原遺跡 10. 熊谷遺跡 11. 辛上廃寺跡 12. 戦場古墳群 13. 戦場ヶ谷遺跡 14. 下中杖遺跡 15. 荒堅目遺跡 16. 塚原遺跡
 17. 小林遺跡 18. 尾崎土生遺跡 19. 田手二本杉遺跡 20. 坊所一本谷遺跡 21. 塔の塚廃寺跡

図13 古代の遺跡分布 (1/100,000)

国土地理院の数値地図25000(地図画像)『福岡・熊本』を使用

180mに東門に関係すると思われる2孔を穿った礎石1個が残存する。百濟系単弁軒丸瓦や三重弧文軒平瓦、鴻臚館系丸瓦、老司系軒平瓦が採集されており、寺浦廃寺跡や基山町基肆城跡と同範の瓦があることから、同時期における関係性が読み取れる。また、千葉県成田市で発見された宝亀五年（774年）銘梵鐘に記された「佐賀郡椅寺」に比定される可能性が高い。

寺浦廃寺跡は、発掘調査によって寺域が東西約63.3m×南北約71.8mの規模になることが判明している。回廊跡や中門、塔跡土壇が確認され、回廊内中央に金堂の存在が推定される。調査の結果、回廊内中央に金堂を配置した後、回廊を廃絶し金堂の西側に塔を造営する法隆寺系の配置になるという伽藍配置の変遷が判明している。創建時の古瓦には唐草文縁単弁八葉軒丸瓦や重弧文軒平瓦、鴻臚館系軒丸瓦、扁行唐草文軒平瓦がある。なお、寺浦廃寺より北東に約400mの山の斜面に寺浦瓦窯跡があり、窯跡で出土する瓦と寺浦廃寺で出土した古瓦が同じような組成であることから、寺院の瓦をここで焼いていたことが分かっている。

神崎市・吉野ヶ里町は、肥前国神埼郡の範囲に含まれる。『肥前風土記』神埼郡条には「郷玖所、里廿六、驛壹所、烽壹所、寺壹所僧寺」とあり、「烽」は神崎市日の隈山、「寺」は辛上廃寺と推定されている。また、風土記には三根郡が神埼郡から分かれて成立したことが記されており、もともとの神埼郡が上郡の規模であったことがうかがえる。これまでの調査の状況から、神埼郡衙については馬郡・竹原遺跡群が有力であり、七田忠昭氏は推定竹原里14・15・22・23坪をその候補地として具体的にあげている。また、吉野ヶ里遺跡で確認された建物群の一部は駅家に関係する可能性がある。以上のように、吉野ヶ里遺跡周辺は奈良時代において神埼郡の中心的な地域であったことが明らかにされつつある。

平安時代になると、吉野ヶ里遺跡などの調査結果から、直線道路は少なくとも「官道」としての役割は終わっており、主要な交通路は奈良時代の官道から2里南に路線を替えているようである。この交通路に隣接する吉野ヶ里町下中杖遺跡では、平安時代前期を中心として中世に至る掘立柱建物跡・井戸跡が多数確認されている。平安時代の主な出土遺物として、越州窯系青磁や刑窯系白磁、木製馬鞍、新羅製青銅製箸などがあり、その内容から後述する神崎荘の中心的な集落であった可能性がある。神崎市荒堅目遺跡では溝跡・柵列跡などが確認され、溝跡から木簡が出土している。このほか、主に掘立柱建物から構成される集落として、神崎市熊谷遺跡・塚原遺跡・小林遺跡・尾崎土生遺跡などがあり、吉野ヶ里町田手二本杉遺跡でも溝跡などが確認されている。これらの遺跡からはやはり越州窯系青磁、長沙窯系水注などが出土している。また、坊所一本谷遺跡では竪穴建物を中心とする平安時代前期の集落が確認されている。

『類聚国史』によれば、承和3（836）年に神埼郡の空閑地690町が勅旨田となり、『御堂関白記』には「神埼御庄」の名称が初めてみられ、11世紀初頭には皇室領荘園、神崎荘が成立していたことが知られる。『御堂関白記』や『百鍊抄』には中国宋との対外交渉をうかがわせる記述があり、このような文献記録と多くの遺跡から輸入陶磁器が出土することとは無関係ではないであろう。なお、神埼郡域のほとんどは神崎荘に含まれていると考えられるが、ほかに三津荘、太宰府安楽寺領としての石動荘が所在していた。

（5）中世

中世前期の遺跡として、荒堅目遺跡・本堀朝日遺跡・熊谷遺跡・尾崎土生遺跡・尾崎利田遺跡、下中杖遺跡、佐賀市本村遺跡などが確認されている。このうち、本村遺跡では溝で区画された集落が検出され、名主など荘村内有力者層の屋敷地と推定されている。荒堅目遺跡では、井戸跡から銅製帯金具が出土している。これらの遺跡からは輸入陶磁器が数多く出土しており、対外交渉が盛んであったことをうかがわせる。『長秋記』

には平忠盛が神崎荘での対宋貿易を独占しようとしたことが記述されており、有明海を通じたルートも対外交渉の一つの窓口であったことを示している。神崎郡域は、大部分が引き続き皇室領、院の荘園であり、鎌倉幕府成立後も地頭が置かれず、院が一円支配していた。しかし、承久の変（1221年）後に三浦泰村が地頭に任じられ、幕府の支配力が及ぶようになったと考えられる。宝治合戦（1249年）で三浦泰村が滅ぶと、以後地頭は置かれていないものの、幕府の影響力は残されていたようである。

元寇（文永の役：1274年・弘安の役：1281年）は、神崎荘にも様々な変化をもたらすことになった。恩賞地として弘安8（1285）年河野通有に小崎郷（神崎市尾崎）が与えられたのを契機に、肥前の御家人を中心とした400人あまりに神崎荘内の地頭職が配分されている（『櫛田神社文書』）。

また、異国降伏祈願のため、吉野ヶ里遺跡の南東側に西大寺の末寺である東妙寺が弘安年間（1278～1287年）に建立され、それ以前（正嘉年間か？）に建立されたと伝えられる妙法寺が田手川を挟んで西側にあった。その様子は「東妙寺并妙法寺境内絵図」に描かれており、当時の寺院の規模・伽藍配置などを具体的に伝える貴重な史料となっている。この二つの寺社には、神崎荘が小規模に恩賞地として分配されたこともあって、多くの土地が寄進・売却されており、『東妙寺文書』などによれば、その勢力が盛んであったことが知られる。建武2（1335）年の「東妙・妙法両寺寺領坪付注文」によれば、両寺の寺領は、田地91ヶ所（49町9反）、畠地13ヶ所（1町7反4丈）、屋敷10ヶ所、荒地6ヶ所となっている。吉野ヶ里遺跡田手一本黒木地区では、妙法寺の寺域を区画すると推定される溝跡が検出され、ベトナム産白磁鉢などが出土している。東妙寺・妙法寺の北側には、やはり勅願祈禱寺として建立されたとされる石塔院が所在しており、両寺との関連が深い。寺内には五輪塔や板碑などが残されている。

このほか、脊振山では山岳信仰が盛んで、「脊振千坊」と俗称される多くの寺・坊が並び、上宮を東門寺、中宮を靈仙寺、下宮を積翠寺（のち修学院）と総称していたと考えられている。このうち、靈仙寺跡では坊跡・経塚・墓地などが調査されている。

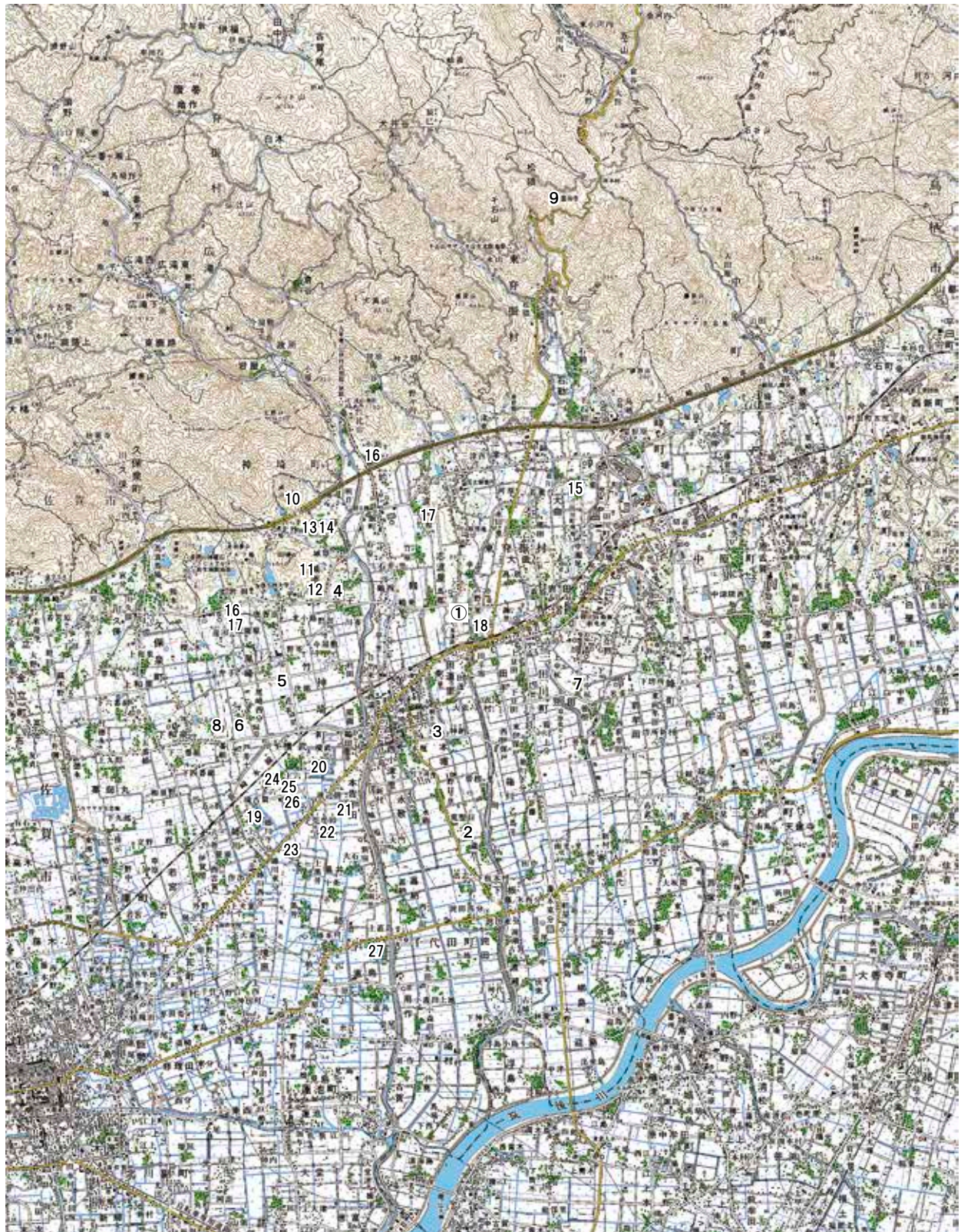
中世後期の遺跡として、山麓部に佐賀県の代表的山城の一つである神崎市勢福寺城跡をはじめとして松崎城跡・横大路城跡などの山城が多数所在している。勢福寺城跡の南麓一帯では城原三本谷北遺跡・城原二本谷西遺跡で溝によって区画された町割りの存在が確認され、城下町の状況が明らかにされつつある。

段丘上では、大曲遺跡において溝で区画された集落が確認され、屋敷地と耕地との関係を知ることができるものと推測されている。また、的小淵遺跡・志波屋六の坪（乙）遺跡・杉籠遺跡においても溝で囲まれた屋敷地が確認されている。

沖積平野部においては、佐賀平野東部で特徴的にみられるクリークにより囲まれた「環濠集落」の構造をもつ城館跡が数多くみられる。神崎市姉川城跡・横武城跡・本告城跡・莞牟田遺跡・野田城跡・下六丁遺跡・横武四本黒木遺跡・柳郷城跡・直鳥城跡などで調査が行われており、その内容が明らかになってきている。

神崎郡域は南北朝期になると、南朝側の菊池氏、九州探題、足利直冬の三つ巴の勢力争いの場になり、南北朝統一後も肥前国人層に担がれる少弐氏と中国地方の大内氏の支援を受ける九州探題渋川氏の争いを基軸として混乱が続いた。このような状況の中で、東妙寺や妙法寺などの寺社勢力は衰退していく。勢福寺城は少弐氏最後の居城として知られているが、少弐氏が拠点とした時期と15世紀末～16世紀前葉に盛期があるという城下域の発掘成果が合致することが指摘されている。

室町時代になると、地域勢力（国人・在地領主）が台頭してくるが、吉野ヶ里遺跡周辺の有力国人として江上氏があげられる。江上武種は少弐氏の重臣として活躍し、永禄2（1559）年に少弐冬尚の敗死により



1. 吉野ヶ里遺跡 2. 荒堅目遺跡 3. 本堀朝日遺跡 4. 熊谷遺跡 5. 尾崎土生遺跡 6. 尾崎利田遺跡 7. 下中杖遺跡 8. 本村遺跡
 9. 霊仙寺跡 10. 勢福寺城跡 11. 松崎城跡 12. 横大路城跡 13. 城原三本谷北遺跡 14. 城原二本谷西遺跡 15. 大曲遺跡 16. 的小淵遺跡
 17. 志波屋六の坪(乙)遺跡 18. 杉籠遺跡 19. 姉川城跡 20. 横武城跡 21. 本告城跡 22. 莞牟田遺跡 23. 野田城跡 24. 下六丁遺跡
 25. 横武四本黒木遺跡 26. 柳郷城跡 27. 直鳥城跡

図 14 中世の遺跡分布 (1/100,000)

国土地理院の数値地図 25000 (地図画像)『福岡・熊本』を使用

事実上少弐氏が滅亡した後、勢福寺城の城主となった。元亀元（1570）年に江上武種は、大友宗麟から神埼郡内 800 町余の所領と神埼郡の郡職を与えられている（『武雄鍋島家文書』）。しかし、同年の今山合戦の勝利によって大友勢を撤退させた龍造寺隆信は、元亀 2（1571）年に武種を降伏させ、隆信の次男家種が武種の養子に入り、江上家家督を継ぐこととなった。武種は「日吉城」に隠居したと伝えられ、吉野ヶ里遺跡田手二本黒木地区には武種夫妻の墓所がある。現存する五輪塔は、地・水・火輪ともに 16 世紀後半の様式のもので、戦国期の領主級の墓塔として貴重である。

江上家種は勢福寺城を拠点に「城原衆」を率い、天正 12（1584）年に龍造寺隆信が沖田畷合戦で敗死した後も一門の重鎮であったが、天正 17（1589）年に鍋島直茂の佐賀移転と交替して、その旧城である蓮池（現：佐賀市）に入っている。家種は文禄 2（1593）年 2 月に朝鮮出兵先で病没するが、その家督は大幅に縮小されており、この時点で江上氏の神埼地域における統治権は消滅したと考えられている。その後、鍋島藩政の開始に伴い、神埼地区ほぼ全域が佐賀本藩領に編入された。

第2章 注

- 1) 国土地理院の HP の地図閲覧サービスから世界測地系で北緯 33° 19′ 37″、東経 130° 23′ 10″の値を得て、Web 版 TKY2JGD Ver.1.3.79 パラメータ Ver.2.1.1 で日本測地系に変換した。
- 2) 以下、佐賀平野という場合は狭義の範囲を指す。

第2章 参考文献

- 有明海研究グループ（1965）「有明・不知火海域の第四系」『地団研専報』第 11 号
- 小田富士雄（1995）「肥前の奈良時代寺院跡」『風土記の考古学 5 肥前風土記の巻』同成社
- 鏡山猛・松垣元吉（1938）「肥前國分寺」『國分寺の研究』考古学研究会
- 金岡丈夫・坪井清足・金岡恕（1961）「佐賀県三津永田遺跡」『日本農耕文化の生成』
- 上峰町教育委員会（1994）『佐賀平野の阿蘇 4 火砕流と埋没林』上峰町文化財調査報告書第 11 集
- 蒲原宏行（1992）「佐賀県」『前方後円墳集成』九州編
- 神埼町史編さん委員会（1972）『神埼町史』神埼町役場
- 木下之治（1967）「考古学〈弥生時代〉—神埼郡東春振村横田遺跡」『新郷土』20—1
- 木下良（1976）「空中写真に認められる想定駅路」『びぞん』64
- 経済企画庁総合開発局国土調査課（1965・1966）『土地分類基本調査』佐賀
- 佐賀県企画室（1978）『土地分類基本調査』春振山
- 佐賀県教育委員会（1997）『佐賀県の地質鉱物』佐賀県文化財調査報告書第 134 集
- 産業技術総合研究所地質調査総合センター（2010）『佐賀地域の地質』
- 七田忠昭（1976）「文様のある銅矛について」『九州考古学』第 52 号
- 七田忠昭（1987）「三津永田」『探訪弥生の遺跡（西日本編）』
- 七田忠昭（1988）「肥前神埼郡における駅路と周辺の官衙的建物群の調査」『条里制研究』4
- 七田忠志（1934）「佐賀県戦場ヶ谷出土弥生式有紋土器について」『史前学雑誌』6 卷 2 号
- 七田忠志（1934）「その後の佐賀県戦場ヶ谷遺跡と吉野ヶ里遺跡について」『史前学雑誌』6 卷 4 号
- 七田忠志（1935）「肥前風土記神埼郡の條に於ける僧寺に関する一考察」『上代文化』13
- 七田忠志（1937）「肥前晴気庵寺址と九州地方に於ける古瓦の一様式に就いて」『考古学』8-4 東京考古学会
- 七田忠志（1953）「東春振村三津の石蓋甕棺と内行花紋明光鏡」『佐賀県文化財発掘調査報告書』第 2 集
- 坪井清足・金岡恕（1954）「肥前永田遺跡弥生式甕棺伴出の鏡と刀」『史林』37 卷 2 号
- 徳富則久（1994）「平坦低地における弥生～古墳時代集落の立地と動向（佐賀平野の集落 I）」『佐賀考古』第 1 号、佐賀考古談話会
- 鳥栖市教育委員会（2005）『鳥栖市誌 第 1 巻 自然地理編』鳥栖市
- 東春振村史編さん委員会（1982）『東春振村史』東春振村
- 松尾禎作（1936）「東春振村辛上庵寺址の調査」佐賀県史蹟名勝天然記念物調査報告第 5 輯

位置と環境

- 松尾禎作（1938）「肥前國分寺及尼寺」佐賀県史蹟名勝天然記念物調査報告第6輯
松尾禎作（1938）「寺浦廢寺址の調査」佐賀県史蹟名勝天然記念物調査報告第6輯
松尾禎作（1940）「塔の塚廢寺址」佐賀県史蹟名勝天然記念物調査報告第7輯
松尾禎作（1940）「大願寺廢寺址」佐賀県史蹟名勝天然記念物調査報告第7輯
松尾禎作（1949）「塔の塚廢寺について」佐賀県史蹟名勝天然記念物調査報告第9輯
松尾禎作（1950）「目達原古墳群調査報告」佐賀県史蹟名勝天然記念物調査報告第9輯
三田川町史編さん委員会（1980）『三田川町史』三田川町
森貞次郎（1968）「弥生時代における細形銅劍の流入について」『日本民族と南方文化』
吉野ヶ里町誌編纂委員会（2008）『吉野ヶ里町誌』

報告書 佐賀県

- 佐賀県教育委員会（1977）『四本黒木遺跡発掘調査報告書』佐賀県文化財調査報告書第38集
佐賀県教育委員会（1976）『寺浦廢寺跡』佐賀県文化財調査報告書第34集
佐賀県教育委員会（1979）『二塚山』佐賀県文化財調査報告書第46集
佐賀県教育委員会（1980）『下中杖遺跡』佐賀県文化財調査報告書第54集
佐賀県教育委員会（1980）『尾崎利田遺跡』佐賀県文化財調査報告書第55集
佐賀県教育委員会（1981）『川寄吉原遺跡』佐賀県文化財調査報告書第61集
佐賀県教育委員会（1983）『西原遺跡』佐賀県文化財調査報告書第66集
佐賀県教育委員会（1983）『佐賀県農業基盤整備事業に係る文化財調査報告書1』佐賀県文化財調査報告書第69集
佐賀県教育委員会（1983）『松の森遺跡』佐賀県文化財調査報告書第70集
佐賀県教育委員会（1985）『筑後川下流用水事業に係る文化財調査報告書1』佐賀県文化財調査報告書第80集
佐賀県教育委員会（1987）『下石動遺跡』佐賀県文化財調査報告書第86集
佐賀県教育委員会（1989）『寺浦瓦窯跡』『老松山遺跡』佐賀県文化財調査報告書第92集
佐賀県教育委員会（1989）『筑後川下流用水事業に係る文化財調査報告書2』佐賀県文化財調査報告書第93集
佐賀県教育委員会（1990）『西石動遺跡』佐賀県文化財調査報告書第97集
佐賀県教育委員会（1991）『本村遺跡』佐賀県文化財調査報告書第102集
佐賀県教育委員会（1991）『志波屋六本松乙遺跡』佐賀県文化財調査報告書第103集
佐賀県教育委員会（1992）『朝日北遺跡』佐賀県文化財調査報告書第110集
佐賀県教育委員会（1993）『切畑遺跡』佐賀県文化財調査報告書第116集
佐賀県教育委員会（1994）『筑後川下流用水事業に係る文化財調査報告書4』佐賀県文化財調査報告書第123集
佐賀県教育委員会（1998）『筑後川下流用水事業に係る文化財調査報告書5』佐賀県文化財調査報告書第136集
佐賀県教育委員会（1999）『戦場古墳群』佐賀県文化財調査報告書第140集
佐賀県教育委員会（2002）『佐賀県内遺跡確認調査報告書20』佐賀県文化財調査報告書第151集
佐賀県教育委員会（2013）『佐賀県の中近世城館—第2集 各説編1（三養基・神埼・佐賀地区）—』佐賀県文化財調査報告書第201集
佐賀県教育委員会（1995）『古代官道・西海道肥前路』

報告書 神埼町

- 神埼町教育委員会（1969）『帯隈山神籠石 天童山東部調査概報』
神埼町教育委員会（1969）『天神尾古墳群調査概報』
神埼町教育委員会（1979）『山崎古墳』神埼町文化財調査報告書第4集
神埼町教育委員会（1980）『利田柳遺跡Ⅲ区』
神埼町教育委員会（1980）『四本黒木遺跡』神埼町文化財調査報告書第6集
神埼町教育委員会（1981）『馬郡遺跡』神埼町文化財調査報告書第7集
神埼町教育委員会（1983）『志波屋六本松遺跡』神埼町文化財調査報告書第9集
神埼町教育委員会（1984）『船塚遺跡』神埼町文化財調査報告書第10集
神埼町教育委員会（1985）『的五本黒木遺跡』神埼町文化財調査報告書第11集
神埼町教育委員会（1985）『荒堅目遺跡』神埼町文化財調査報告書第12集
神埼町教育委員会（1986）『本告牟田遺跡・的小淵遺跡』神埼町文化財調査報告書第13集
神埼町教育委員会（1987）『的小淵遺跡12区・中園遺跡』神埼町文化財調査報告書第14集
神埼町教育委員会（1987）『横山遺跡』神埼町文化財調査報告書第15集
神埼町教育委員会（1990）『塚原一の角遺跡』神埼町文化財調査報告書第21集

- 神埼町教育委員会 (1990) 『花浦古墳群』 神埼町文化財調査報告書第 22 集
- 神埼町教育委員会 (1990) 『吉野ヶ里遺跡』 神埼町文化財調査報告書第 23 集
- 神埼町教育委員会 (1990) 『船塚遺跡Ⅱ』 神埼町文化財調査報告書第 24 集
- 神埼町教育委員会 (1990) 『姉川城跡』 神埼町文化財調査報告書第 25 集
- 神埼町教育委員会 (1990) 『馬郡・竹原遺跡群』 神埼町文化財調査報告書第 26 集
- 神埼町教育委員会 (1991) 『迎田遺跡Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ区』 神埼町文化財調査報告書第 27 集
- 神埼町教育委員会 (1991) 『井手遺跡・迎田遺跡』 神埼町文化財調査報告書第 28 集
- 神埼町教育委員会 (1991) 『本堀朝日遺跡Ⅲ区』 神埼町文化財調査報告書第 29 集
- 神埼町教育委員会 (1992) 『本堀朝日遺跡 4・5 区』 神埼町文化財調査報告書第 30 集
- 神埼町教育委員会 (1992) 『中園遺跡Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ区』 神埼町文化財調査報告書第 32 集
- 神埼町教育委員会 (1993) 『の五本黒木遺跡Ⅳ区』 神埼町文化財調査報告書第 33 集
- 神埼町教育委員会 (1993) 『横武城跡 (XⅡ区)』 神埼町文化財調査報告書第 34 集
- 神埼町教育委員会 (1993) 『城原二本谷西遺跡・城原三本谷北遺跡Ⅲ区・城原三本谷南遺跡』 神埼町文化財調査報告書第 35 集
- 神埼町教育委員会 (1993) 『城原三本谷北遺跡・城原三本谷南遺跡』 神埼町文化財調査報告書第 36 集
- 神埼町教育委員会 (1993) 『森の木遺跡』 神埼町文化財調査報告書第 37 集
- 神埼町教育委員会 (1994) 『城原二本谷西遺跡Ⅰ・Ⅱ区・城原三本谷北遺跡Ⅲ区・城原三本谷南遺跡Ⅰ区』 神埼町文化財調査報告書第 38 集
- 神埼町教育委員会 (1994) 『城原三本谷北遺跡・城原三本谷南遺跡』 神埼町文化財調査報告書第 39 集
- 神埼町教育委員会 (1994) 『本堀朝日遺跡Ⅸ区』 神埼町文化財調査報告書第 40 集
- 神埼町教育委員会 (1995) 『花手遺跡』 神埼町文化財調査報告書第 41 集
- 神埼町教育委員会 (1995) 『本堀朝日遺跡 7・8 区』 神埼町文化財調査報告書第 42 集
- 神埼町教育委員会 (1995) 『塚原遺跡・小林遺跡 他』 神埼町文化財調査報告書第 46 集
- 神埼町教育委員会 (1995) 『志波屋六本松古墳群』 神埼町文化財調査報告書第 47 集
- 神埼町教育委員会 (1996) 『城原一本松遺跡』 神埼町文化財調査報告書第 48 集
- 神埼町教育委員会 (1996) 『志波屋一ノ坪遺跡Ⅰ・Ⅱ区 姉川十三本松遺跡Ⅱ区 岩田芦ノ元遺跡Ⅱ区』 神埼町文化財調査報告書第 49 集
- 神埼町教育委員会 (1996) 『姉川城跡』 神埼町文化財調査報告書第 50 集
- 神埼町教育委員会 (1996) 『熊谷遺跡』 神埼町文化財調査報告書第 51 集
- 神埼町教育委員会 (1996) 『右原祇園町遺跡』 神埼町文化財調査報告書第 52 集
- 神埼町教育委員会 (1996) 『上志波屋七ノ坪遺跡』 神埼町文化財調査報告書第 53 集
- 神埼町教育委員会 (1996) 『田道ヶ里田二本松遺跡』 神埼町文化財調査報告書第 54 集
- 神埼町教育委員会 (1996) 『尾崎利田遺跡』 神埼町文化財調査報告書第 55 集
- 神埼町教育委員会 (1996) 『城原三本谷南遺跡』 神埼町文化財調査報告書第 56 集
- 神埼町教育委員会 (1997) 『横武城跡』 神埼町文化財調査報告書第 57 集
- 神埼町教育委員会 (1997) 『尾崎土生遺跡Ⅷ・Ⅸ・Ⅹ区』 神埼町文化財調査報告書第 58 集
- 神埼町教育委員会 (1997) 『早稲隈山 天神尾古墳群 寺山古墳群』 神埼町文化財調査報告書第 59 集
- 神埼町教育委員会 (1997) 『志波屋二本松 (乙) 遺跡』 神埼町文化財調査報告書第 60 集
- 神埼町教育委員会 (1998) 『の小淵遺跡』 神埼町文化財調査報告書第 61 集
- 神埼町教育委員会 (1998) 『本告牟田遺跡 O・Ⅰ区』 神埼町文化財調査報告書第 62 集
- 神埼町教育委員会 (1998) 『姉川城跡』 神埼町文化財調査報告書第 63 集
- 神埼町教育委員会 (1998) 『利田柳遺跡』 神埼町文化財調査報告書第 64 集
- 神埼町教育委員会 (1999) 『尾崎土生遺跡』 神埼町文化財調査報告書第 65 集
- 神埼町教育委員会 (2000) 『西田遺跡』 神埼町文化財調査報告書第 66 集
- 神埼町教育委員会 (2000) 『船塚遺跡 縄文・弥生・古墳時代編』 神埼町文化財調査報告書第 67 集
- 神埼町教育委員会 (2000) 『荒堅目遺跡Ⅱ区』 神埼町文化財調査報告書第 68 集
- 神埼町教育委員会 (2001) 『唐香原遺跡Ⅱ区』 神埼町文化財調査報告書第 69 集
- 神埼町教育委員会 (2001) 『馬郡遺跡Ⅲ区』 神埼町文化財調査報告書第 70 集
- 神埼町教育委員会 (2001) 『利田柳遺跡』 神埼町文化財調査報告書第 71 集
- 神埼町教育委員会 (2001) 『城原一本松遺跡Ⅱ区』 神埼町文化財調査報告書第 72 集
- 神埼町教育委員会 (2002) 『馬郡遺跡』 神埼町文化財調査報告書第 73 集
- 神埼町教育委員会 (2002) 『猿嶽古墳群』 神埼町文化財調査報告書第 74 集
- 神埼町教育委員会 (2002) 『花浦古墳群』 神埼町文化財調査報告書第 75 集
- 神埼町教育委員会 (2002) 『八子三本黒木遺跡Ⅱ区』 神埼町文化財調査報告書第 76 集

位置と環境

- 神埼町教育委員会（2003）『八子三本黒木遺跡Ⅰ区』神埼町文化財調査報告書第77集
神埼町教育委員会（2003）『尾崎土生遺跡16区』神埼町文化財調査報告書第78集
神埼町教育委員会（2003）『尾崎土生遺跡』神埼町文化財調査報告書第79集
神埼町教育委員会（2003）『唐香原遺跡Ⅲ区』神埼町文化財調査報告書第80集
神埼町教育委員会（2003）『小淵遺跡13区』神埼町文化財調査報告書第81集
神埼町教育委員会（2004）『八子一本黒木遺跡Ⅰ・Ⅱ区』神埼町文化財調査報告書第82集
神埼町教育委員会（2004）『日の尺池古墳群』神埼町文化財調査報告書第83集
神埼町教育委員会（2005）『八子六本黒木遺跡』神埼町文化財調査報告書第84集
神埼町教育委員会（2005）『的遺跡』神埼町文化財調査報告書第85集
神埼町教育委員会（2006）『八子二本黒木遺跡』神埼町文化財調査報告書第86集
神埼町教育委員会（2006）『八子六本黒木遺跡14区』神埼町文化財調査報告書第87集
神埼町教育委員会（2006）『八子一本黒木遺跡Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ区』神埼町文化財調査報告書第88集
神埼町教育委員会（2006）『八子四本黒木遺跡Ⅲ』神埼町文化財調査報告書第89集

報告書 千代田町

- 千代田町教育委員会（1981）『崎村遺跡』千代田町文化財調査報告書第1集
千代田町教育委員会（1983）『詫田西分貝塚』千代田町文化財調査報告書第2集
千代田町教育委員会（1985）『姉遺跡Ⅰ』千代田町文化財調査報告書第3集
千代田町教育委員会（1986）『黒井八本松遺跡』千代田町文化財調査報告書第5集
千代田町教育委員会（1987）『黒井遺跡』千代田町文化財調査報告書第6集
千代田町教育委員会（1988）『柴尾遺跡Ⅰ 川崎遺跡』千代田町文化財調査報告書第7集
千代田町教育委員会（1988）『柴尾遺跡Ⅱ』千代田町文化財調査報告書第8集
千代田町教育委員会（1989）『藤ノ木西分遺跡Ⅰ 直鳥四本松遺跡』千代田町文化財調査報告書第9集
千代田町教育委員会（1990）『下西八本松遺跡Ⅰ』千代田町文化財調査報告書第11集
千代田町教育委員会（1991）『貴別当神社遺跡Ⅰ』千代田町文化財調査報告書第13集
千代田町教育委員会（1991）『貴別当神社遺跡Ⅱ』千代田町文化財調査報告書第14集
千代田町教育委員会（1992）『貴別当神社遺跡Ⅲ』千代田町文化財調査報告書第15集
千代田町教育委員会（1992）『貴別当神社遺跡Ⅳ』千代田町文化財調査報告書第16集
千代田町教育委員会（1993）『貴別当神社遺跡Ⅴ』千代田町文化財調査報告書第17集
千代田町教育委員会（1994）『柳島遺跡』千代田町文化財調査報告書第18集
千代田町教育委員会（1995）『本村五本柳遺跡』千代田町文化財調査報告書第19集
千代田町教育委員会（1996）『託田西分遺跡Ⅱ区の調査』千代田町文化財調査報告書第20集
千代田町教育委員会（1999）『直鳥城跡』千代田町文化財調査報告書第22集
千代田町教育委員会（1999）『詫田西分遺跡Ⅲ区の調査』千代田町文化財調査報告書第23集
千代田町教育委員会（1999）『詫田西分遺跡Ⅳ区の調査』千代田町文化財調査報告書第24集
千代田町教育委員会（1999）『詫田西分遺跡Ⅵ区の調査』千代田町文化財調査報告書第25集
千代田町教育委員会（2000）『高志神社遺跡』千代田町文化財調査報告書第27集
千代田町教育委員会（2000）『姉遺跡（Ⅷ区の調査）』千代田町文化財調査報告書第28集

報告書 神崎市

- 神崎市教育委員会（2007）『姉川城跡』神崎市埋蔵文化財調査報告書第1集
神崎市教育委員会（2008）『八子六本黒木遺跡18区』神崎市埋蔵文化財調査報告書第4集
神崎市教育委員会（2009）『八子六本黒木遺跡』神崎市埋蔵文化財調査報告書第8集
神崎市教育委員会（2009）『熊谷遺跡 八子六本黒木遺跡』神崎市埋蔵文化財調査報告書第9集
神崎市教育委員会（2009）『八子一本黒木遺跡 八子六本黒木遺跡』神崎市埋蔵文化財調査報告書第10集
神崎市教育委員会（2010）『西田遺跡』神崎市埋蔵文化財調査報告書第11集
神崎市教育委員会（2010）『熊谷遺跡7・8・9区 西田遺跡4区』神崎市埋蔵文化財調査報告書第13集
神崎市教育委員会（2011）『野田遺跡 利田柳遺跡 利田黒木遺跡』神崎市埋蔵文化財調査報告書第15集
神崎市教育委員会（2011）『野田遺跡 利田柳遺跡』神崎市埋蔵文化財調査報告書第16集
神崎市教育委員会（2013）『伏部大石遺跡』神崎市埋蔵文化財調査報告書第20集

報告書 三田川町

- 三田川町教育委員会（1986）『下中杖遺跡（J区・H区の調査）』三田川町文化財調査報告書第1集
 三田川町教育委員会（1989）『田手一本杉遺跡・田手二本杉遺跡』三田川町文化財調査報告書第2集
 三田川町教育委員会（1990）『田手二本黒木遺跡』三田川町文化財調査報告書第3集
 三田川町教育委員会（1998）『下中杖遺跡』三田川町文化財調査報告書第4集
 三田川町教育委員会（2000）『吉野ヶ里遺跡』三田川町文化財調査報告書第5集

報告書 東春振村

- 東春振村教育委員会（1977）『松原遺跡』東春振村文化財調査報告書第1集
 東春振村教育委員会（1978）『春振山霊仙寺遺跡』東春振村文化財調査報告書第2集
 東春振村教育委員会（1979）『霊仙寺跡発掘調査概報』東春振村文化財調査報告書第3集
 東春振村教育委員会（1980）『霊仙寺跡』東春振村文化財調査報告書第4集
 東春振村教育委員会（1981）『西前田遺跡』東春振村文化財調査報告書第5集
 東春振村教育委員会（1982）『西前田B遺跡』東春振村文化財調査報告書第6集
 東春振村教育委員会（1983）『東外遺跡』東春振村文化財調査報告書第7集
 東春振村教育委員会（1984）『大曲遺跡群Ⅰ』東春振村文化財調査報告書第8集
 東春振村教育委員会（1985）『大曲遺跡群Ⅱ』東春振村文化財調査報告書第9集
 東春振村教育委員会（1989）『亀作A遺跡』東春振村文化財調査報告書第15集
 東春振村教育委員会（1990）『やしろ山遺跡』東春振村文化財調査報告書第18集
 東春振村教育委員会（1995）『石動四本松遺跡』東春振村文化財調査報告書第19集
 東春振村教育委員会（1997）『松原遺跡7区』東春振村文化財調査報告書第20集
 東春振村教育委員会（1997）『平成6・7年度東春振村文化財調査報告書』東春振村文化財調査報告書第21集
 東春振村教育委員会（1998）『松原遺跡10区』東春振村文化財調査報告書第22集
 東春振村教育委員会（2000）『松原遺跡8区』東春振村文化財調査報告書第23集
 東春振村教育委員会（2001）『瀬ノ尾遺跡』東春振村文化財調査報告書第24集
 東春振村教育委員会（2003）『松原遺跡4・5・6区』東春振村文化財調査報告書第25集
 東春振村教育委員会（2004）『西石動古墳群第3地区』東春振村文化財調査報告書第26集
 東春振村教育委員会（2005）『石動二本松遺跡第5地区』東春振村文化財調査報告書第27集
 東春振村教育委員会（2005）『石動四本松遺跡第4地区』東春振村文化財調査報告書第28集

報告書 吉野ヶ里町

- 吉野ヶ里町教育委員会（2006）『松本遺跡第4地区』吉野ヶ里町文化財調査報告書第1集
 吉野ヶ里町教育委員会（2006）『石動四本松遺跡第5地区』吉野ヶ里町文化財調査報告書第2集
 吉野ヶ里町教育委員会（2006）『石動西一本杉遺跡第4地区』吉野ヶ里町文化財調査報告書第3集
 吉野ヶ里町教育委員会（2006）『大曲A遺跡第3地区』吉野ヶ里町文化財調査報告書第4集
 吉野ヶ里町教育委員会（2007）『町内遺跡確認調査報告書』吉野ヶ里町文化財調査報告書第5集
 吉野ヶ里町教育委員会（2008）『町内遺跡確認調査報告書1』吉野ヶ里町文化財調査報告書第6集
 吉野ヶ里町教育委員会（2010）『松原遺跡14区』吉野ヶ里町文化財調査報告書第7集

報告書 その他の市町

- 小城町教育委員会（1989）『寺浦廃寺』小城町文化財調査報告書第7集
 小城町教育委員会（1991）『寺浦廃寺』小城町文化財調査報告書第8集
 佐賀市教育委員会（2004・2009）『東名遺跡群Ⅰ』佐賀市文化財調査報告書第150集
 佐賀市教育委員会（2009）『東名遺跡群Ⅱ』佐賀市埋蔵文化財調査報告書第40集
 佐賀市教育委員会（2014）『東名遺跡群Ⅲ』佐賀市埋蔵文化財調査報告書第85集
 佐賀市教育委員会（2016）『東名遺跡群Ⅳ』佐賀市埋蔵文化財調査報告書第100集
 大和町教育委員会（1976）『肥前国分寺跡』大和町文化財調査報告書第1集
 大和町教育委員会（1989）『肥前国分寺跡』大和町文化財調査報告書第8集
 大和町教育委員会（1990）『肥前国分寺跡—第4次発掘調査—』大和町文化財調査報告書第11集

第3章 辛上廃寺跡の調査成果

1 調査の概要

辛上廃寺跡が所在する吉野ヶ里遺跡大曲一の坪地区は、佐賀県神埼郡吉野ヶ里町大字大曲字一の坪に位置している。辛上廃寺跡の確認調査は、第1章で述べたように、311・342・348・349・352・353・366調査区を設定して実施した。このうち、311・342調査区は調査年度が異なったため、区分したものの、実際には一つの調査区として取り扱っている。周辺の地形は、西側の中位段丘面から東側に南流する田手川に向かっての傾斜地であるが、狭い低位段丘面がみられる。調査区の現況は、水田であった。

第1・2章で詳細は述べているが、この地区では古くから瓦が採集され、基壇とみられる高まり、塔心礎とみられる礎石があったことから、『肥前風土記』に記された「寺壹所僧寺」にあたる古代寺院の場所と推定されてきた（七田 1935・松尾 1936）。

発掘調査の結果、古代の遺構として塔基壇跡1基、掘立柱建物跡7棟、溝跡15条、土坑8基などを確認し、須恵器・土師器・瓦などが出土した。このうち、掘立柱建物跡には寺院の金堂、門と考えられる建物があり、溝跡には寺域を区画する築地塀に関連すると考えられるものや、区画を意図するものなどが認められ、古代寺院の伽藍配置をある程度知ることができる。

古代以外の遺構としては、弥生時代の銅鐸埋納坑・竪穴住居跡・掘立柱建物跡・甕棺墓、古墳時代の竪穴住居跡、中世の掘立柱建物跡・溝跡などを確認した。このうち、弥生時代については、すでに報告している（『207集』・『222集』）。なお、確認調査であり、遺構の掘り下げは必要最小限にしたため、性格や時期が不明な遺構が多い。

調査区検出面の標高は13.0～15.2mであり、当時の地表面から0.5～0.8mほど表土などを除去したことになる。ただ、近代以降の開墾などによって基壇が削平されているなど、地形変化が著しいこともあるが、寺院創建にあたっての土地造成がどのようなものであったかについて、調査では明確になっていない。ただ、366調査区南部のトレンチ内では、古代の検出面から0.5m下で小穴等を確認しているため、創建時に大規模な造成が行われたことが推測される。

古代の遺構について調査区ごとに概略を述べると、7箇所の調査区の中央に位置する311・342調査区で古代の主要な遺構を確認した。調査区北側から、金堂と考えられる東西棟の掘立柱建物跡、塔基壇跡、門跡と考えられる東西棟の掘立柱建物跡、築地塀に関連すると推定される東西方向の溝跡が認められる。東西方向の溝跡の西部では、北側に屈曲している状況を検出しており、寺域南西隅が推定できる。

311・342調査区の東側に設定した348調査区では、寺域東側を区画するとみられる南北方向の溝跡などを確認した。溝跡は、金堂と推定される掘立柱建物跡の東側にあたる部分で途切れており、寺域への出入口と考えられる。また、311・342調査区と348調査区の間を設定した352調査区では、明確な古代の遺構は確認していない。

311・342調査区の南側に設定した349調査区では、寺域に向かう道路側溝の可能性のある溝跡などを確認した。

311・342調査区の西側に設定した353調査区では、寺域西側を区画するとみられる南北方向の溝跡な



図 15 大曲一の坪地区 調査区的位置 (1/2,500)

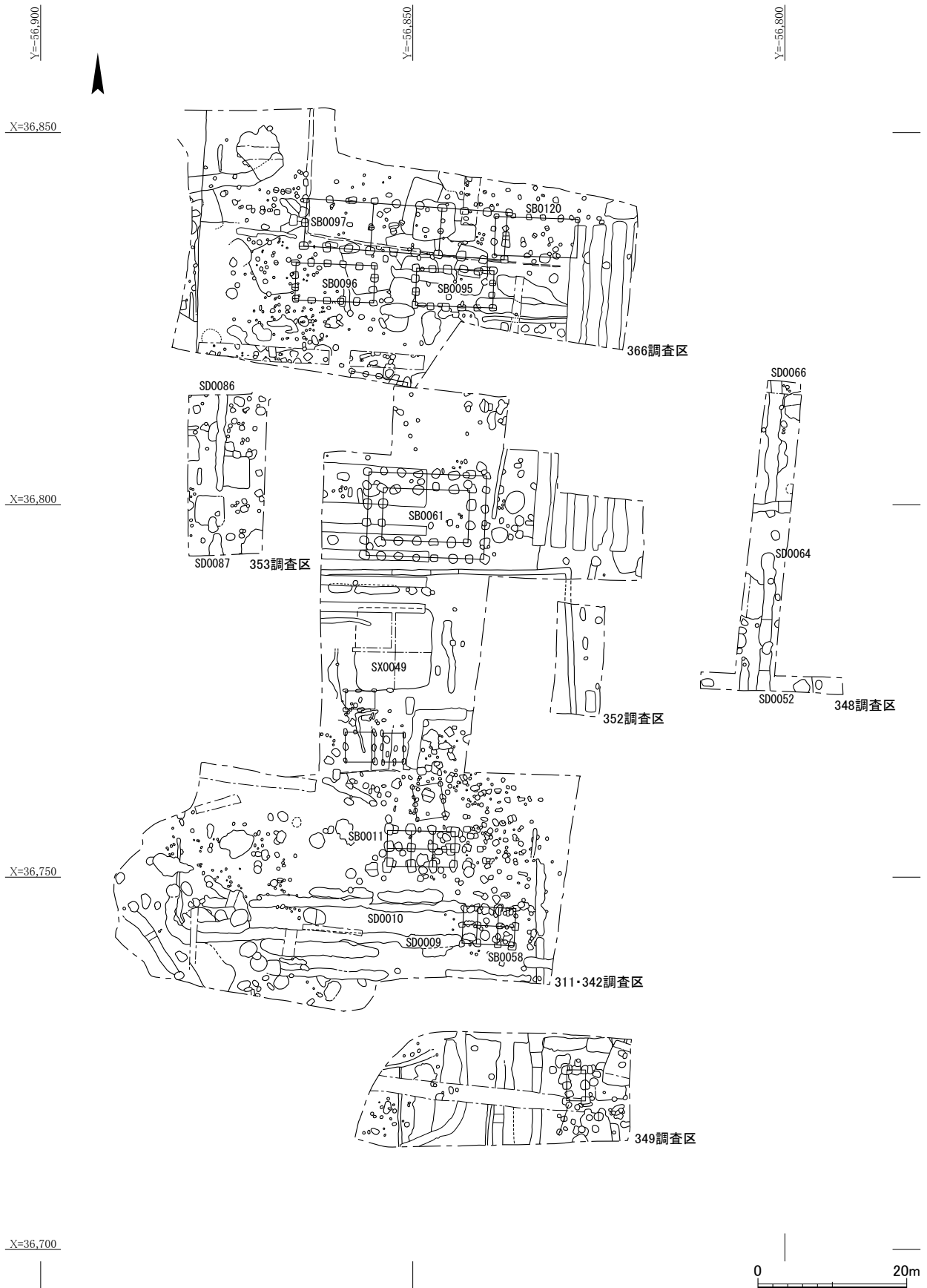


図16 遺構の分布 (1/750)

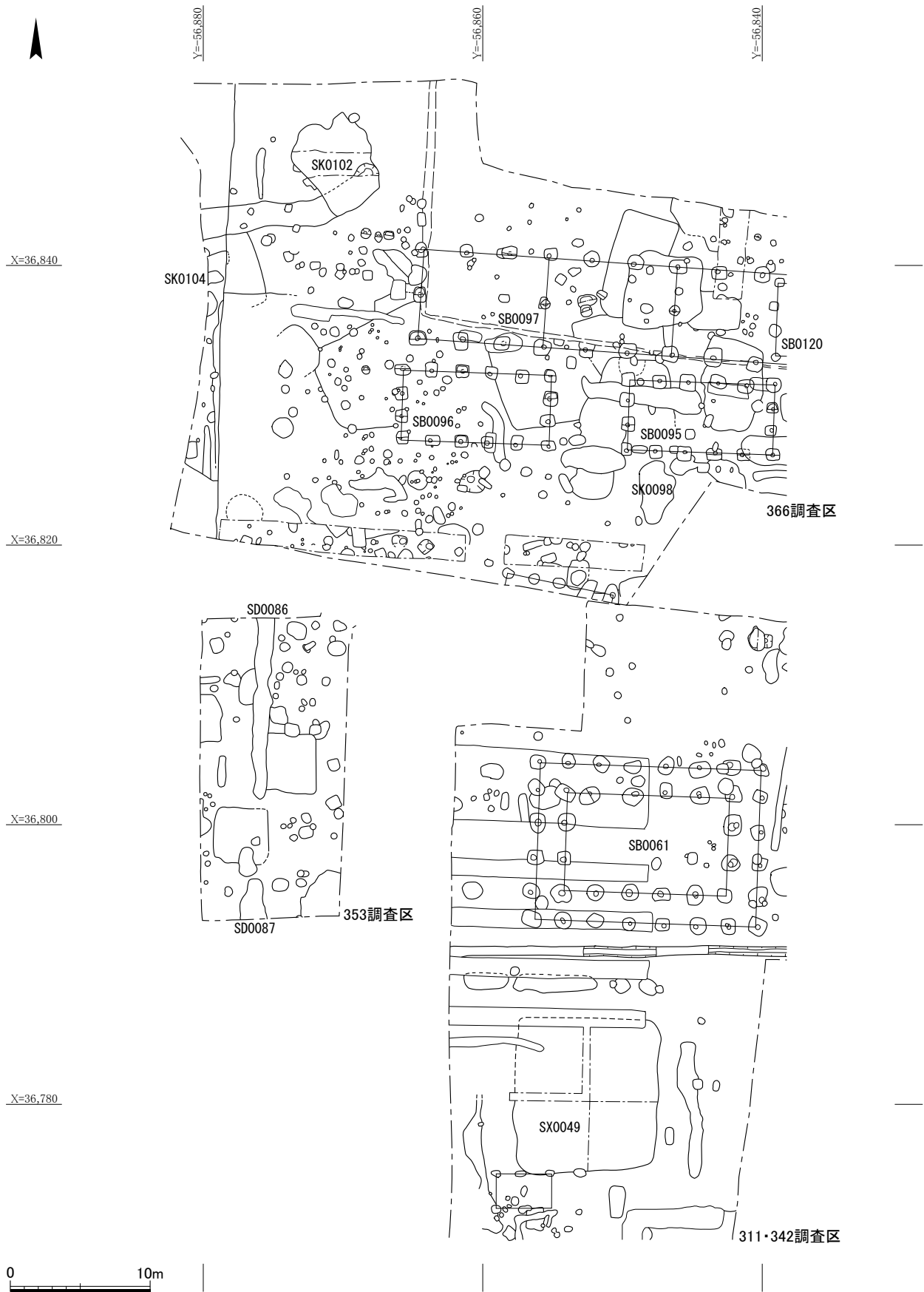


図 17 遺構の分布詳細 1 (1/400)

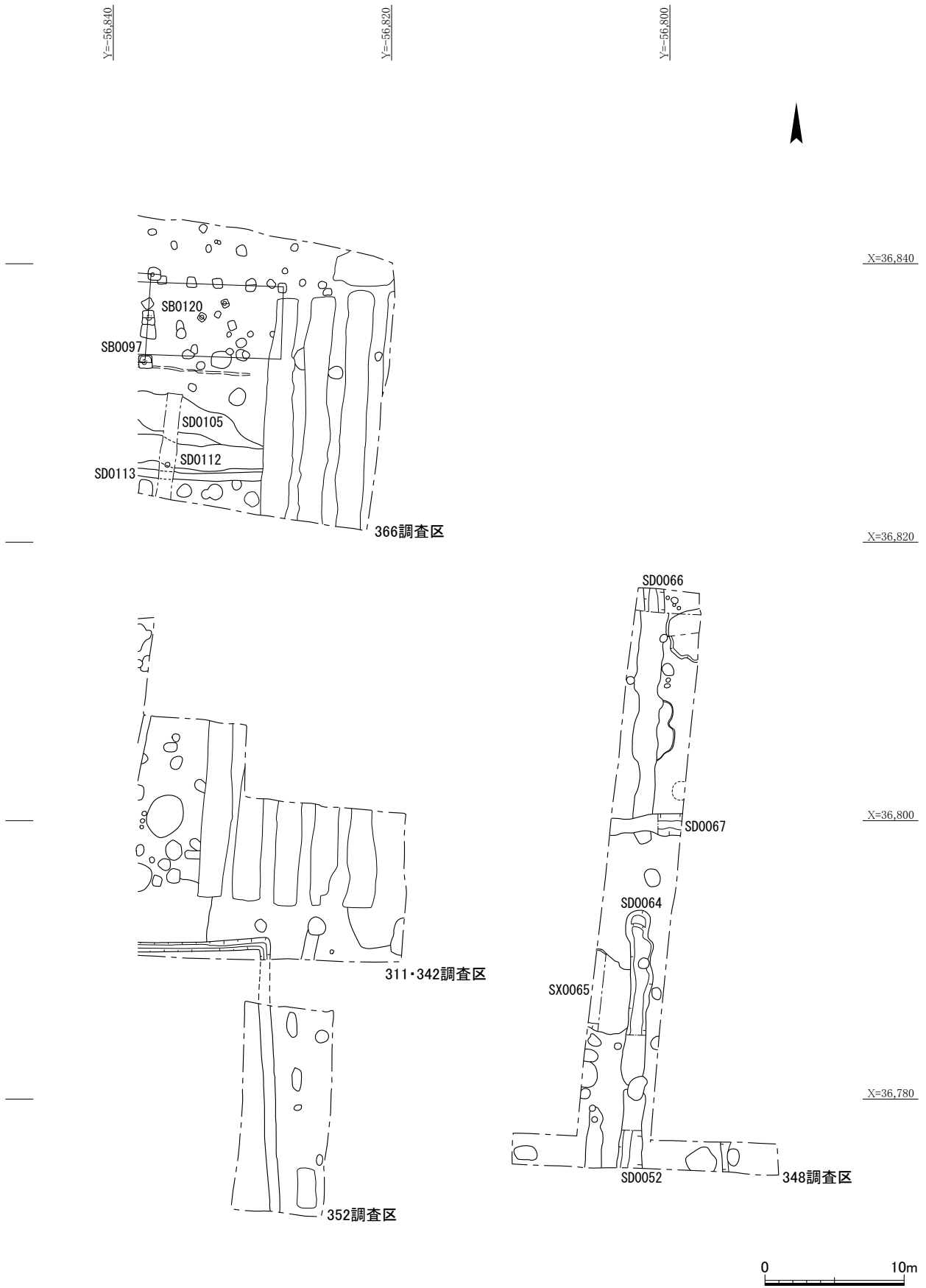


図18 遺構の分布詳細2 (1/400)



図 19 遺構の分布詳細 3 (1/400)

Y=-56,860

Y=-56,840

Y=-56,820

X=36,780

X=36,760

X=36,740

X=36,720

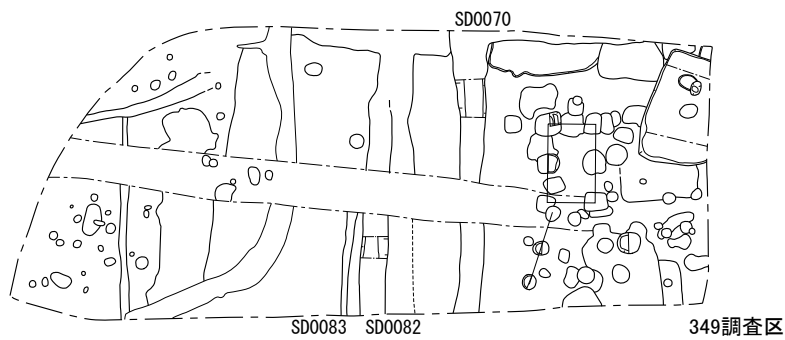
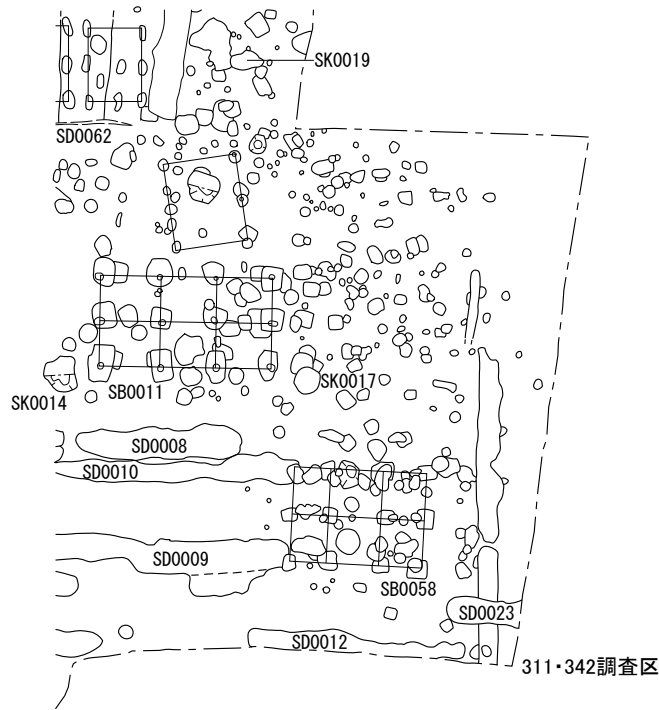


図20 遺構の分布詳細4 (1/400)

どを確認し、348 調査区と同様に、金堂と推定される掘立柱建物跡の西側にあたる部分で溝跡が途切れており、寺域への出入口と考えられる。なお、遺構検出までにとどめ、遺構などの掘り下げは行っていない。

311・342 調査区の北側に設定した 366 調査区では、僧坊の可能性のある東西棟の掘立柱建物跡のほか、溝跡、土坑などを確認した。なお、寺域北側を区画する溝跡などは確認していない。

面的な確認調査を行った 7 箇所の調査区の周辺については、北・東側は 1 段低くなっており、ほぼ遺構が認められない区域と判断している。西側はトレンチによる確認調査で遺構が確認されているが、古代寺院に関する遺構はみられなかった。南側については、No. 44・55 トレンチ (図 5) で官道から辛上廃寺に向かつてのびる溝跡 1 条を確認し、寺に向かう参道側溝の可能性はある (『152 集』)。

なお、中位段丘上に設定した 364・365 調査区では、弥生時代中期とみられる平面円形の竪穴建物跡を確認したが (『207 集』)、古代の遺構等は検出されていない。

2 遺構と遺構に伴う遺物

ここでは、古代と判断した遺構と、その遺構に伴う遺物のうち、遺構の時期を示すと考えられる須恵器・土師器などを報告する。瓦については、項を改め一括して報告する。

(1) 塔基壇跡

これまでの調査で確認した基壇跡は、SX0049 塔基壇跡の 1 基のみである。

SX0049 塔基壇跡は、311・342 調査区の中央やや北寄りに位置する。北辺の大部分が攪乱により明確ではなく、西辺北半部が正確に検出できていないが、平面形は東西 10.2 m、南北は約 11 m と推定される隅丸方形になるものと考えられ、主軸はほぼ正方位で、検出面から深さ 0.1～0.5 m 掘り込まれている。埋土は、検出面で非常に硬くしまっていることが確認でき、上層は灰色砂、下層は砂が大量に混じった黒褐色粘質土を基本とする。実測図だけでは明確な互層状の土層は認めにくいだが、掘方の平面形や土が硬くしまっていることから、塔基壇の掘込地業と判断した。掘方の南東部のみ平面的に掘り下げたが、東壁には側壁際から幅 0.17～0.19 m、掘方底面から高さ 0.2 m のテラス状の高まりが認められる。また、底面には小土坑や浅い掘り込みがみられるが、掘込地業に関連するものかどうかは不明である。なお、これまでの概報において基壇跡周囲に雨落溝とみられる溝跡があるとしているが (『152 集』・『172 集』)、不定形な平面形であり、掘込地業のみ残存するという状況からみて、その可能性は低いものと判断する。出土遺物には弥生土器・土師器・須恵器等があるが、主体は 6～7 世紀代のものである。また、遺構に伴うかどうかは不明であるが、瓦小片も出土している。

SX0049 出土遺物

1～4 は、SX0049 に伴うものと判断した。1・2 は須恵器蓋で、かえりを有し、天井部が高くなる形状と考えられる。内外面に回転ナデを行う。3 は須恵器横瓶で、外面にはカキメ、内面に回転ナデを行う。4 は土師器甕で、頸部から口縁部にかけて肥厚する。外面は縦方向ハケメ、内面はケズリ、内外面の口縁部はヨコナデを行う。

5～10 は検出面などから出土したため、SX0049 に伴うものかは不明である。5～7 は須恵器蓋である。

SX0049

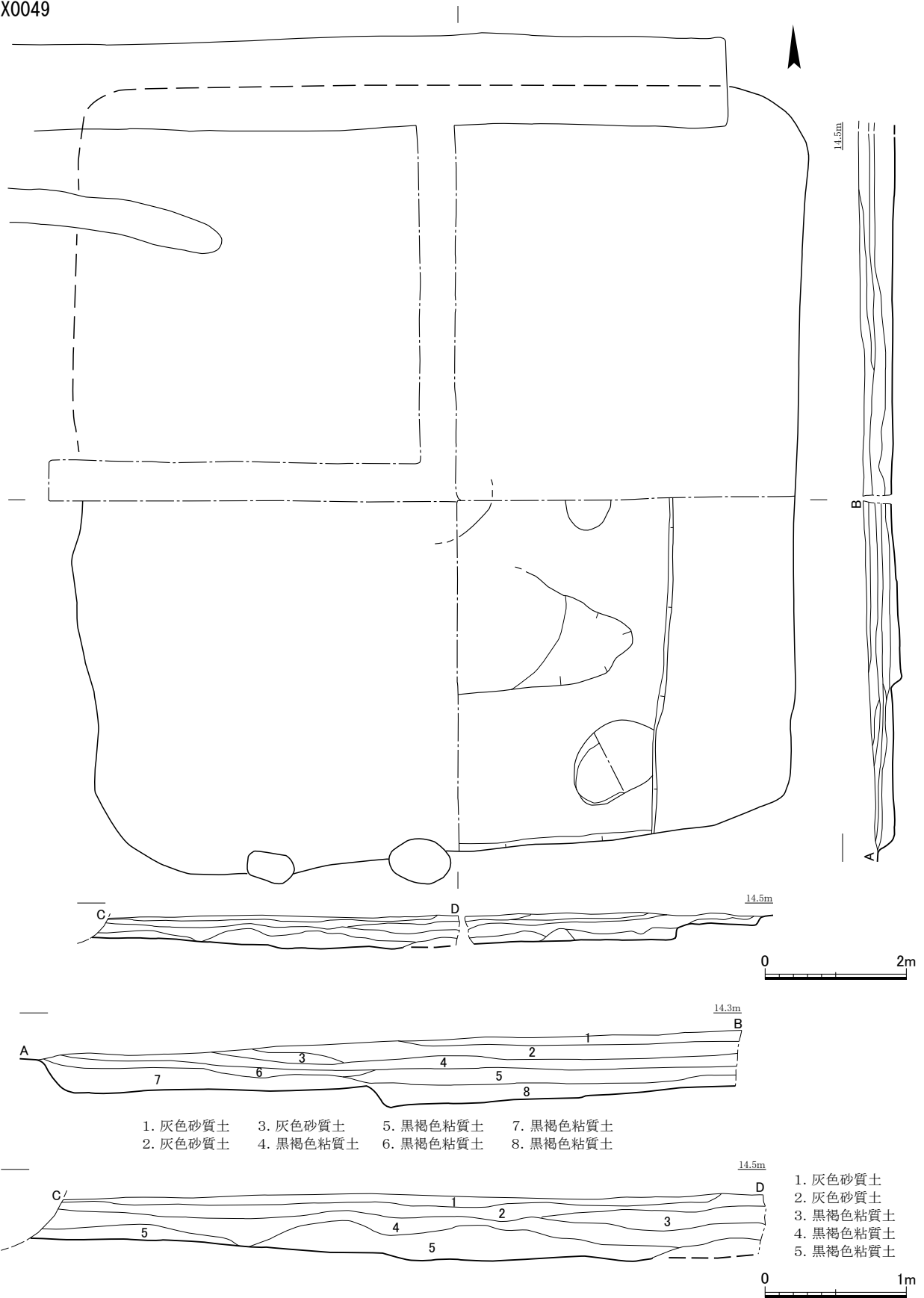


图 21 SX0049 (1/80) · 土層 (1/40)

SX0049

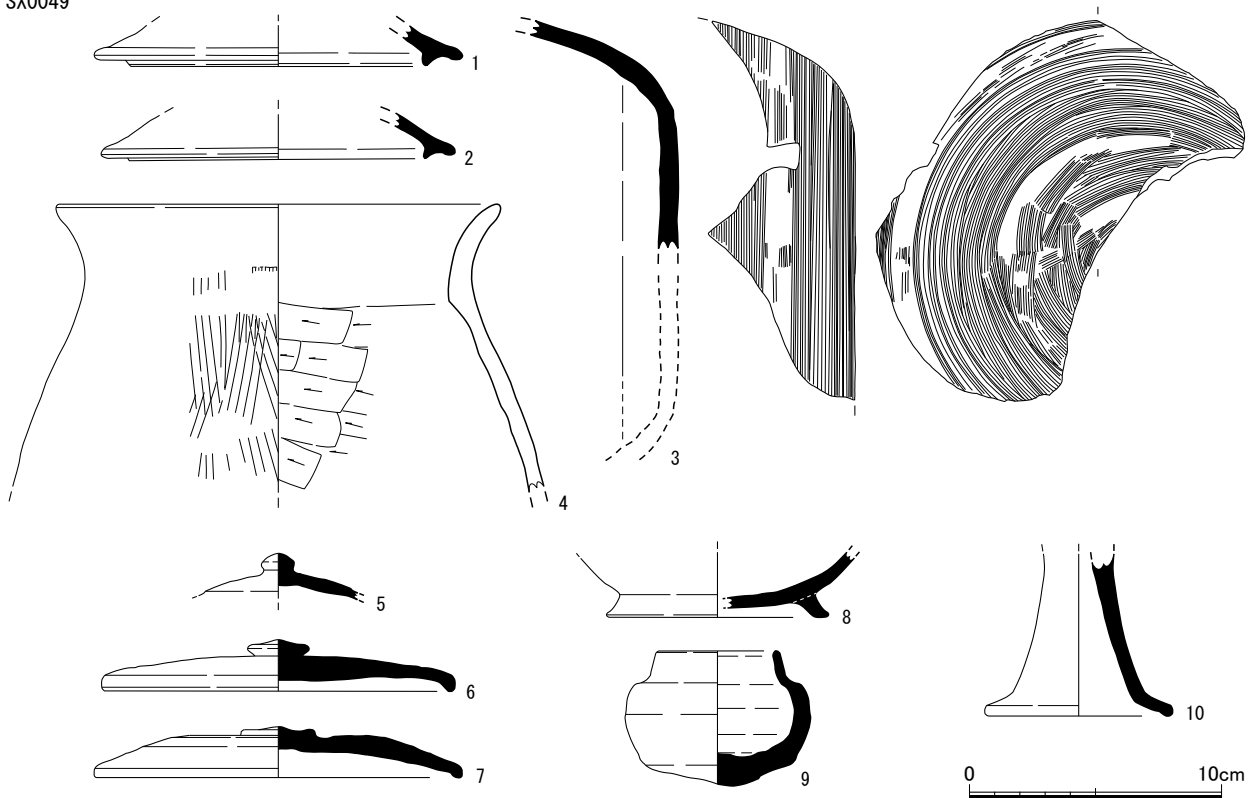


図 22 SX0049 出土遺物 (1/3)

5は高さのある宝珠つまみをもち、形状から壺の蓋の可能性が考えられる。外面は回転ナデ、内面はナデ調整を行う。6はかえりをもたない蓋で、天井部が低く水平に近く開いた形状をしている。口縁端部は下方に突出し、丸く肥厚する。外面天井部は回転ヘラケズリ後回転ナデ調整、内面はナデ調整を行う。7もかえりをもたない蓋で、天井部が低く、口縁端部がやや下方に突出し、丸く肥厚する。つまみ部は低く、中央がやや膨らむ。外面天井部は回転ヘラケズリ後回転ナデ調整、つまみ部と口縁部は回転ナデ調整、内面はナデ調整を行う。8は須恵器高台付坏で、高台が高く外側に張り出したような形状となり、接地部分が面をなす。外面底部回転ヘラ切り離し後ナデ調整、内面はナデ調整を行う。9は須恵器小型壺で、口縁部は短く垂直に立ち上がり、底部に向かって厚くなる。内外面に回転ナデ、ナデ調整を行う。10は須恵器高坏脚部で、裾部から屈曲して広がる。内外面に回転ナデ調整を行う。

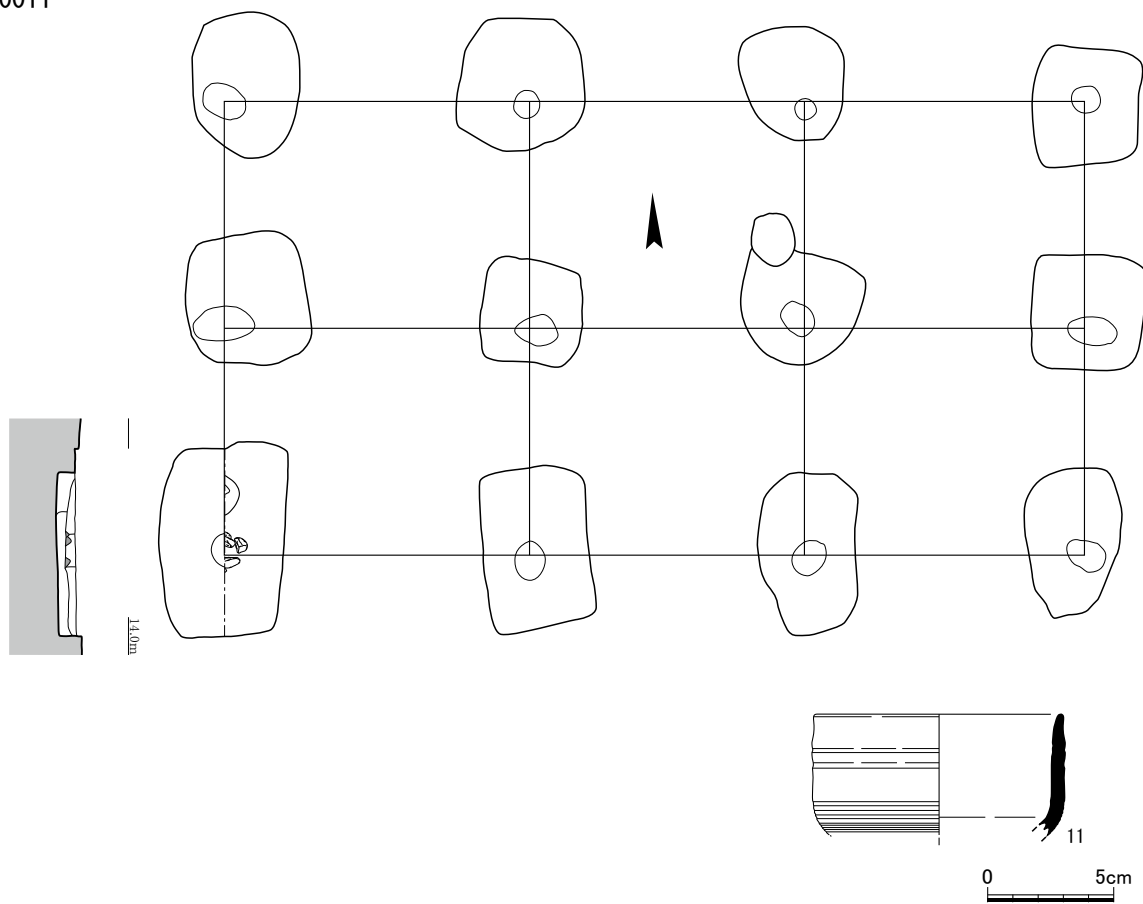
(2) 掘立柱建物跡

古代の掘立柱建物跡は7棟確認した。なお、礎石建物はこれまでの調査では検出していない。

SB011 掘立柱建物跡

311・342 調査区南部に位置する。建物の構造は、梁行2間(4.8 m)、桁行3間(9.1 m)の総柱建物である。梁行柱間は2.4 m、桁行柱間は2.9～3.2 mで、主軸方位がN88°Wの東西棟である。南側の柱穴は南北にのびる長方形を呈し、その他は円形や隅丸方形となっている。半裁した南西隅柱穴では根石と思われるものを確認した。柱の抜き取り痕はみられなかった。

SB0011



SB0058

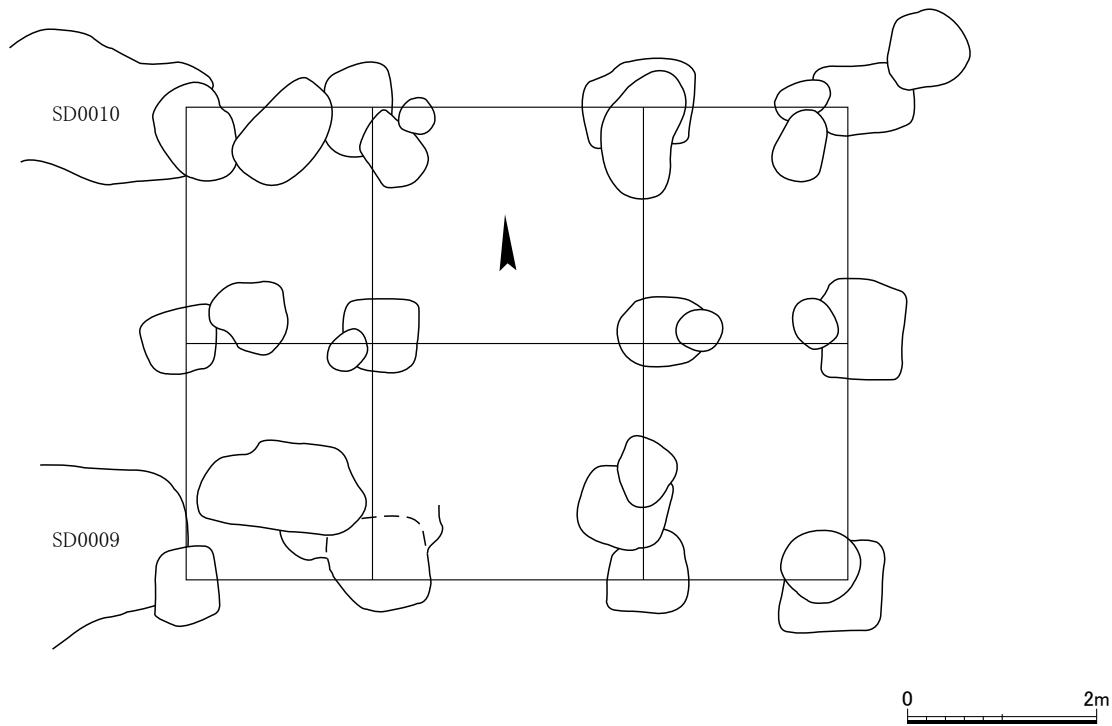


图 23 SB0011 (1/80) · 出土遺物 (1/3)、SB0058 (1/80)

SB011 出土遺物

弥生土器・土師器・須恵器・平瓦等があるが、出土遺物の下限を示すものとして須恵器高坏を図示した。

11 は高坏坏部で、体部から口縁部にかけて垂直に立ち上がり、口縁端部はわずかに外反する。内外面に回転ナデ、外面下半部にカキメを行う。

SB0058 掘立柱建物跡

311・342 調査区の南東部に位置する。いくつかの柱穴では抜き取り痕を検出した。建物の構造は梁行2間(5.0 m)、桁行3間(7.0 m)の総柱建物である。梁行柱間は2.4～2.6 m、桁行柱間は2.0～3.0 mで、主軸方位がN87°Wの東西棟である。桁行中央の柱間が広がっていることや、SB0058西側に位置する築地塀に関連すると考えられる2条の溝跡(SD0009・0010)との関係から門の可能性が高い。柱穴の掘り下げを行っていないため、遺構に伴う遺物は取り上げていない。

SB0061 掘立柱建物跡

311・342 調査区の北部に位置する。建物の構造は梁行3間(7.0 m)、桁行5間(11.6 m)の身舎の4面に出1間の廂が付き、総間数は梁行5間(11.2 m)、桁行7間(15.8 m)となる。梁行柱間は2.2～2.6 m、桁行柱間は1.6～3.2 mで、主軸方位はN88°Wの東西棟である。柱掘方は円形や隅丸方形を基調とし、柱の抜き取り痕はみられなかった。

出土遺物には、弥生土器・土師器・須恵器・平瓦片等があり、小片のため図示していないが、7世紀代の須恵器が出土遺物の下限を示す。

SB0095 掘立柱建物跡

366 調査区の南東部、SB0096の東側に位置する。建物の構造は梁行3間(5.0 m)、桁行5間(10.4 m)、梁行柱間は1.6～1.9 m、桁行柱間は1.9～2.2 mで、主軸方位がN88°Wの東西棟である。柱穴は正方形や隅丸方形を基調とし、柱の抜き取り痕はみられなかった。SB0096と同規模・同構造の建物であり、主軸方向が同じである。

SB0095 出土遺物

弥生土器・土師器・須恵器等があるが、出土遺物の下限を示すものとして須恵器坏を図示した。

12 は須恵器高台付坏で、高台が外側に張り出したような形状となり、接地部分が面をなす。外面底部に3本のヘラ記号を施す。

SB0096 掘立柱建物跡

366 調査区の南西部、SB0095の西側に位置する。建物の構造は梁行3間(5.0 m)、桁行5間(10.6 m)、梁行柱間は1.6～1.8 m、桁行柱間は2.0～2.3 mで、主軸方位がN88°Wの東西棟である。柱穴は正方形や隅丸方形を基調とし、柱の抜き取り痕はみられなかった。SD0112溝跡と重複するが、南東隅の柱穴は検出できているのに対し、その西側の柱穴ではSD0112が新しいように表現されているため、新旧関係は明確ではない。

SB0061

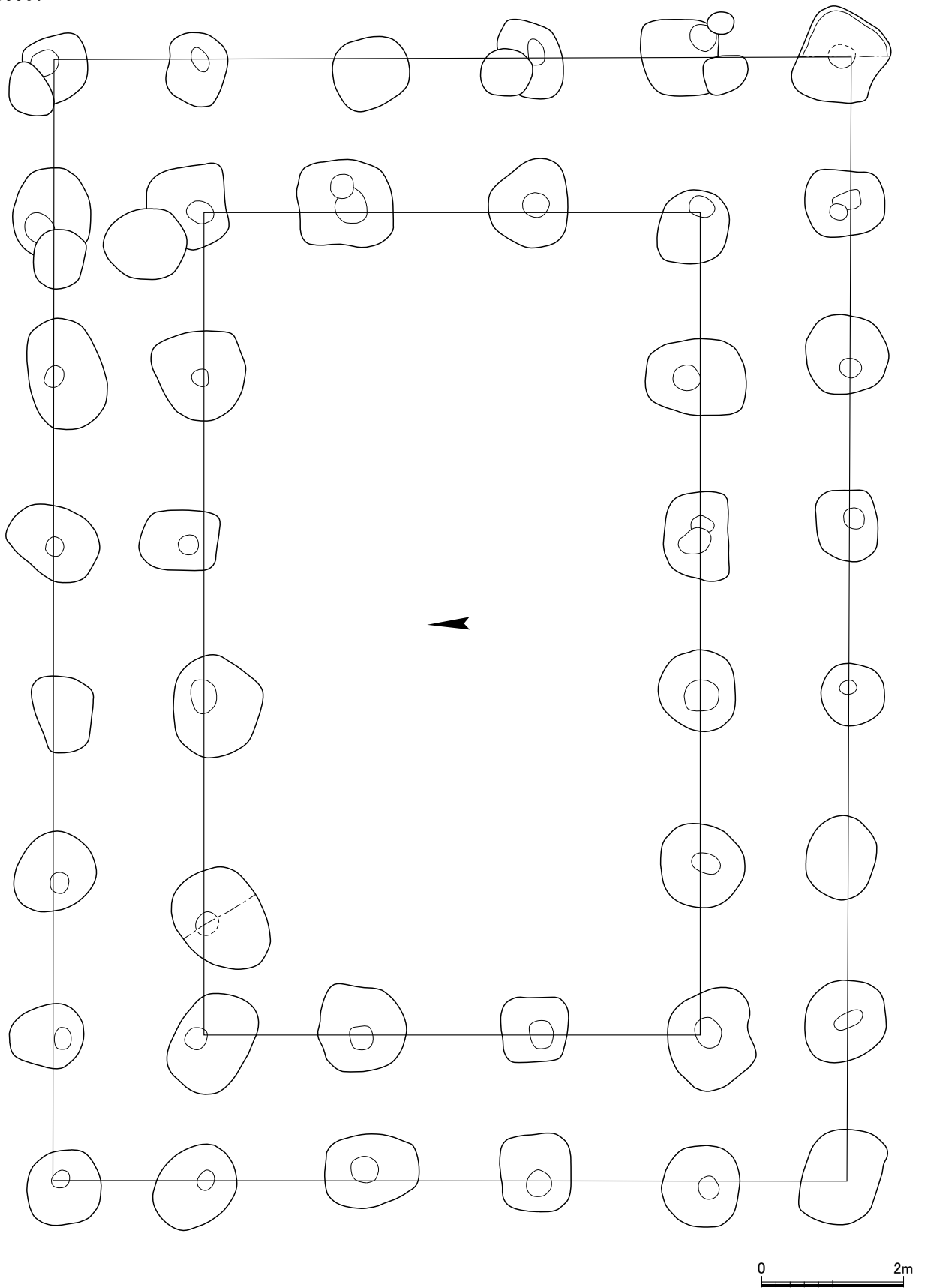


图 24 SB0061 (1/80)

SB0095

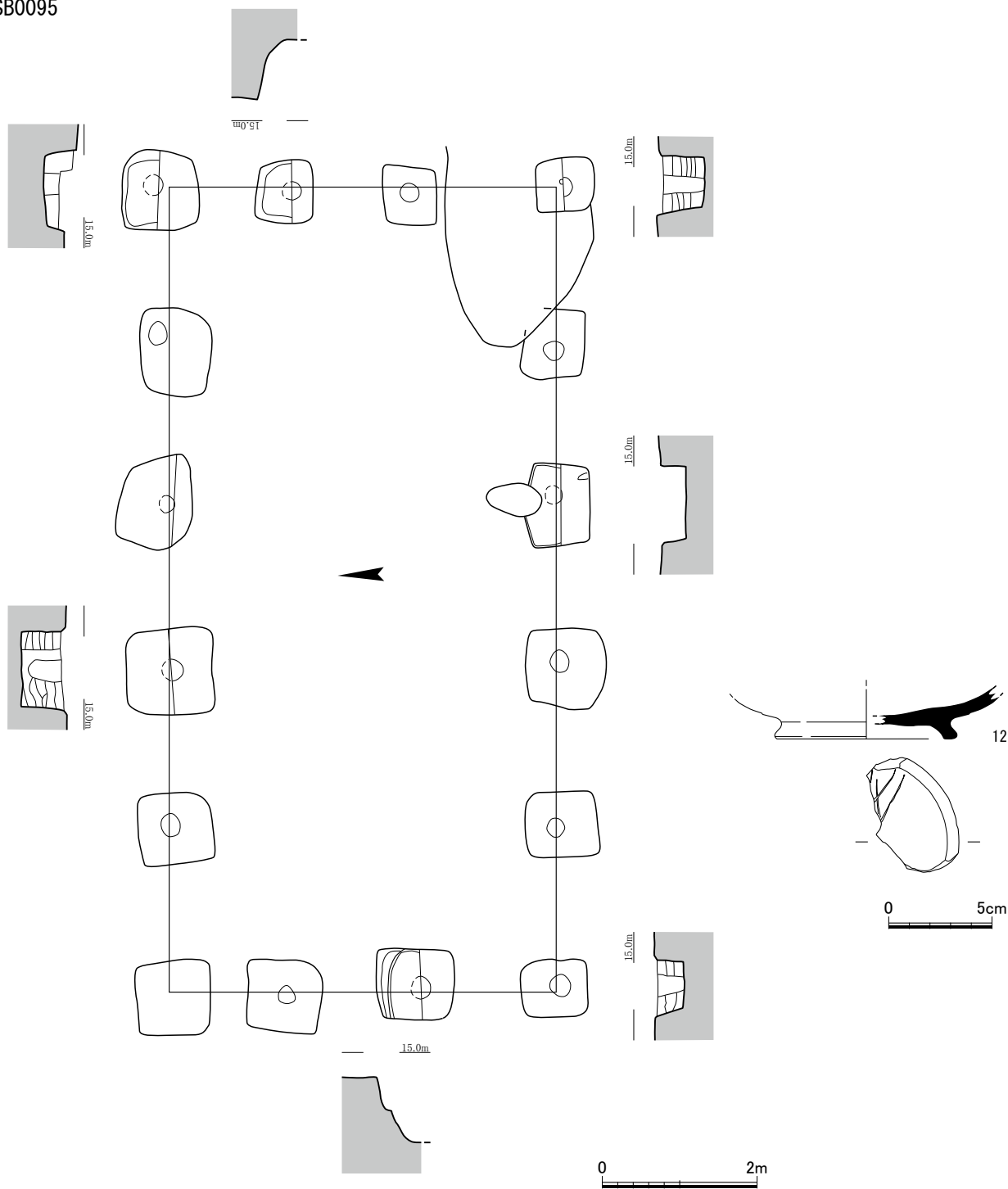


図 25 SB0095 (1/80)・出土遺物 (1/3)

SB0096 出土遺物

弥生土器・土師器・須恵器等があるが、出土遺物の下限を示すものとして須恵器蓋・甕、土師器鉢を图示した。

13 は須恵器蓋で、丸みを帯びた形状である。外面天井部は回転ヘラケズリ、口縁部は回転ナデ、内面は回転ナデ、ナデ調整を行う。14 は須恵器甕で、口縁端部に稜をもち、肩が張る広口の短頸の甕としたが、

SB0096

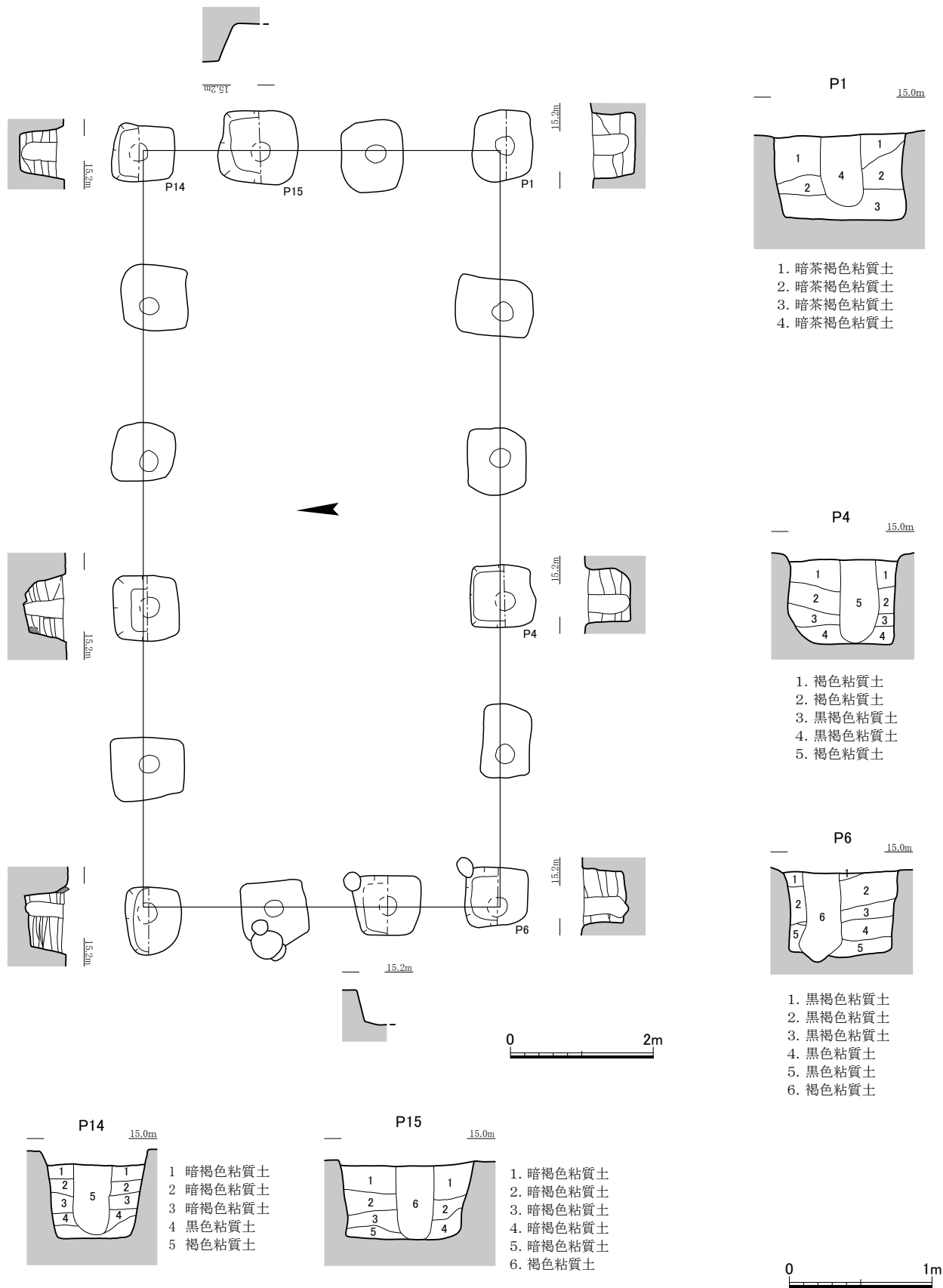


图26 SB0096 (1/80) · 土層 (1/40)

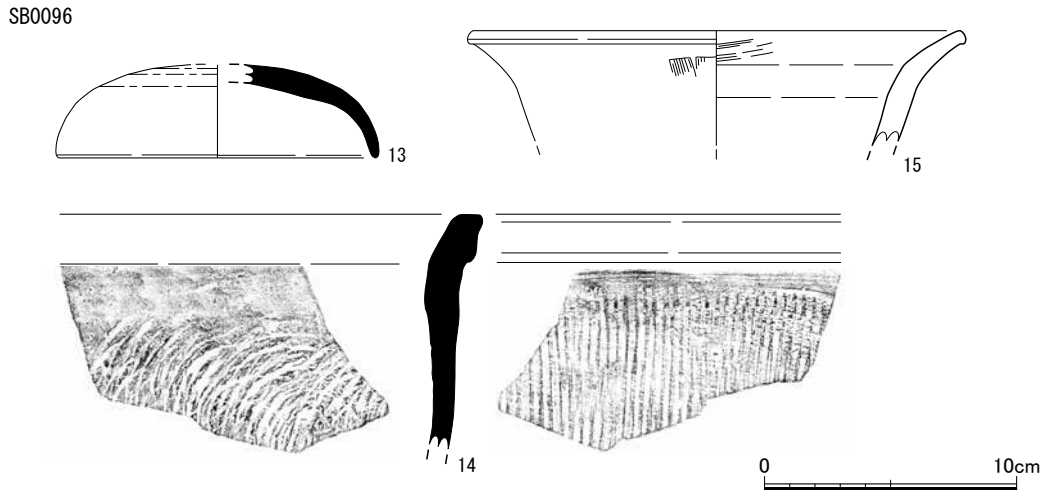


図 27 SB0096 出土遺物 (1/3)

鉢の可能性もある。外面に平行タタキ、内面は同心円当て具痕が認められる。15 は土師器鉢で、口縁部が外反しながら大きく開き、端部が下方へやや尖る。外面は縦方向ハケメ、内面口縁部には横方向ハケメ、下半部はナデ調整を行う。

SB0097 掘立柱建物跡

366 調査区の北部、SB0095・0096 の北側に位置する。建物南側に比べ、北側は攪乱により削平が著しく、遺存状態が悪い。建物の構造は梁行 2 間 (6.4 m)、桁行 9 間 (26.8 m)、梁行柱間は 3.0 ~ 3.4 m、桁行柱間は 2.8 ~ 3.5 m で、主軸方位が N85° W の東西棟である。柱穴は正方形や隅丸方形を基調とし、柱の抜き取り痕はみられなかった。桁行柱穴 4 基ごとに間仕切りの柱穴が 1 基ずつ計 2 基配置されている。柱穴の切合関係から SB0120 より古い。SB0095・0096 とは軒先が近く、主軸も合わないため、別時期と考えられる。

SB0097 出土遺物

弥生土器・土師器・須恵器・平瓦等があるが、出土遺物の下限を示すものとして須恵器蓋、土師器坏を図示した。

16 はかえりをもたない須恵器蓋で、口縁端部が下方に突出し尖る。外面天井部は回転ヘラケズリ、口縁部には回転ナデ、内面は回転ナデ、ナデ調整を行う。17・18 は土師器坏である。17 は体部が直線的に伸びる器形で、内外面に回転ナデを行う。18 は体部がやや内湾気味に開く器形で、口縁~体部を約 1/3 欠損するが、柱穴出土遺物としては残存状況が良い。外面底部にはヘラ切り離し後ナデ、回転ナデ、内面は回転ナデ、ナデ調整を行う。また、図示していないが、口縁部と底部内面の一部に煤が付着しているため、灯明皿として使用されたものと考えられる。

SB0120 掘立柱建物跡

366 調査区の北東部に位置する。当初は柵列と考えていたが、図上での検討により掘立柱建物と判断しているが、南側の柱穴列は明確ではなく、東側の柱穴列は攪乱部分にある。柱掘方は隅丸方形や楕円形を基調としている。建物の構造は梁行 3 間 (5.2 m)、桁行 5 間 (11.1 m)、梁行柱間は 1.7 ~ 1.8 m、桁行柱間は 2.2 ~ 2.4 m で、主軸方位が N88° W の東西棟である。柱穴の切合関係から SB0097 より古い。掘立柱

SB0097

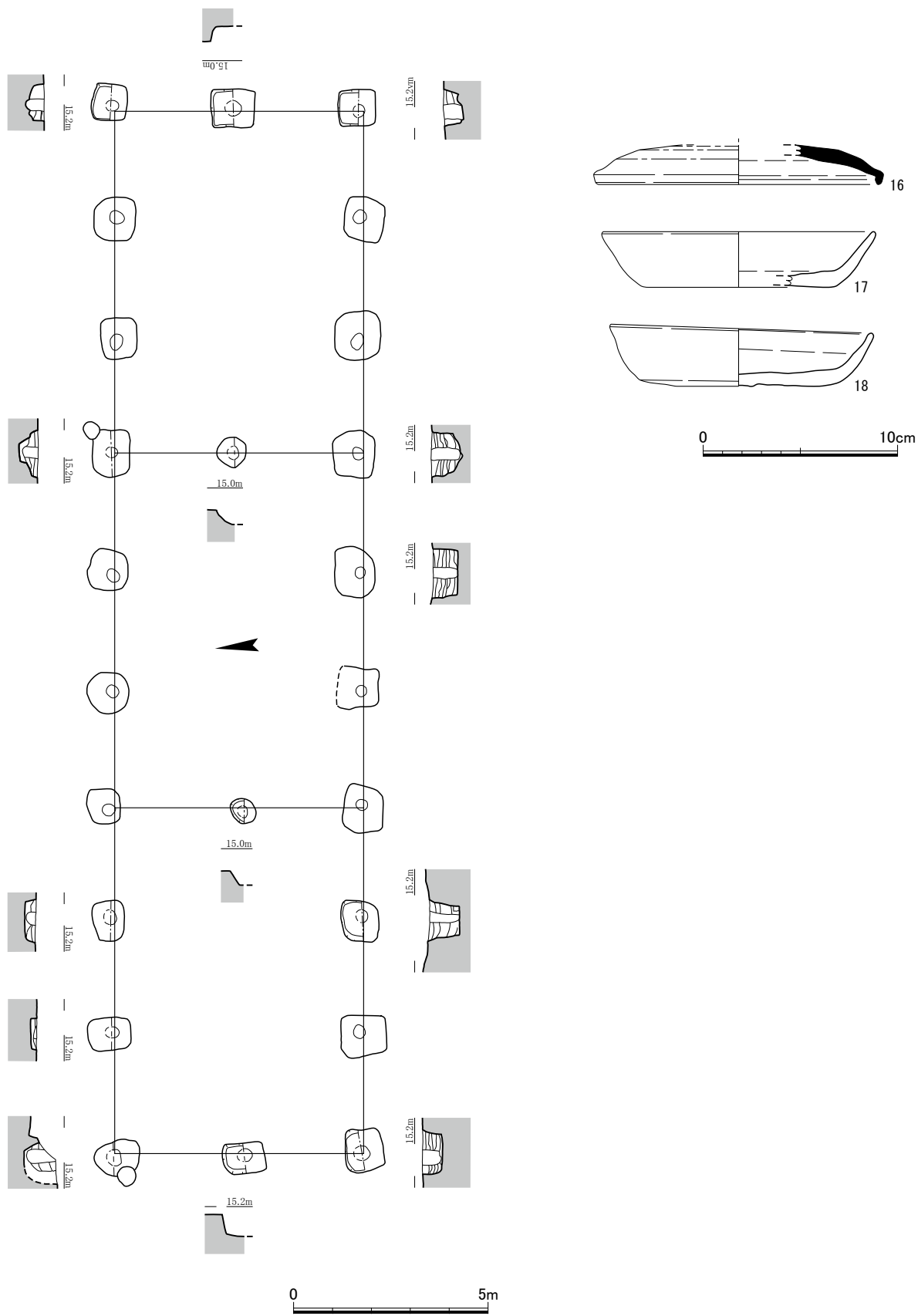


图 28 SB0097 (1/150) · 出土遺物 (1/3)

SB0120

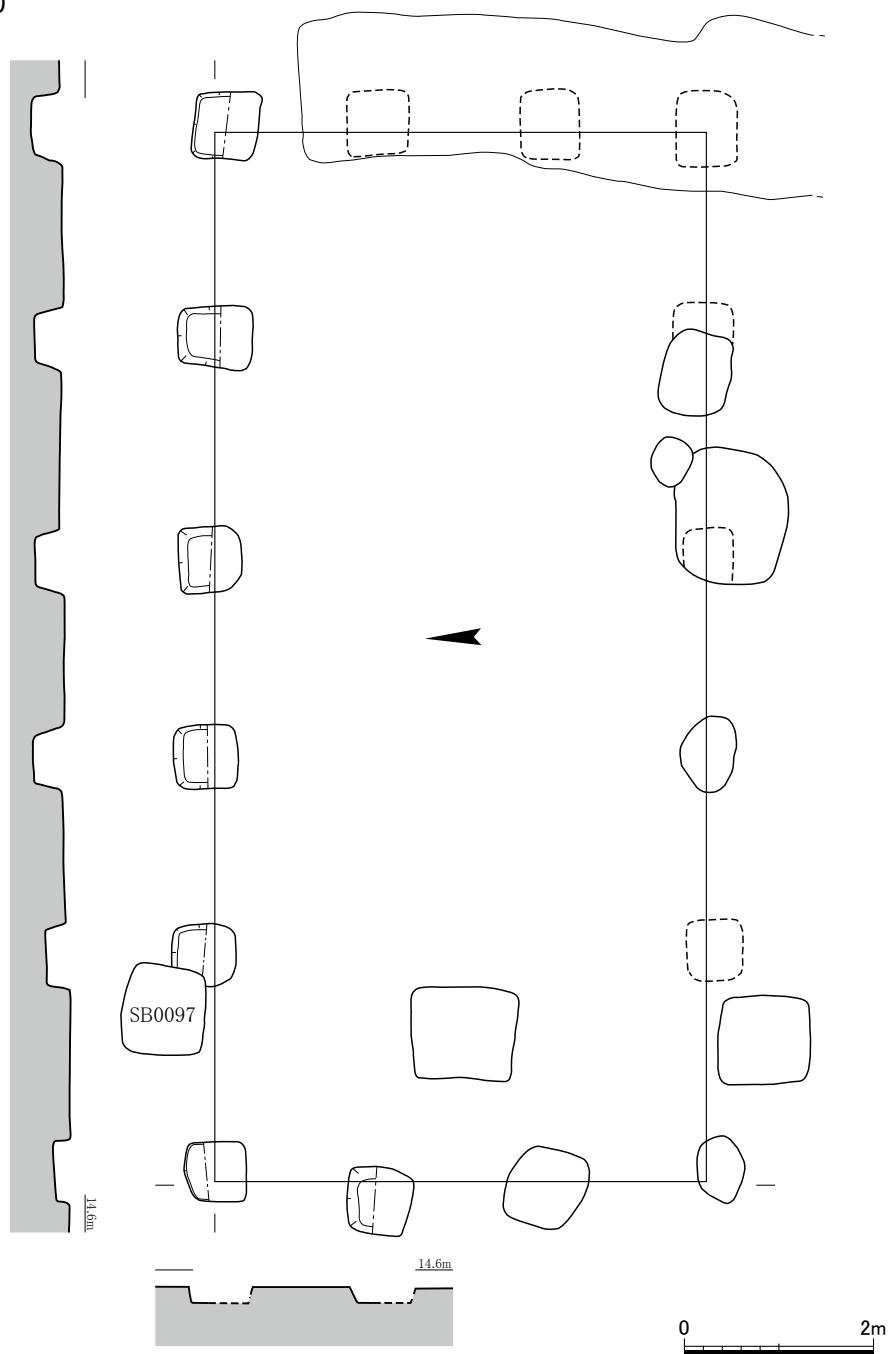


図 29 SB0120 (1/80)

建物とした場合、SB0095・0096と同じ構造で、規模も類似しており、主軸方位も同じであるため、柵列とした場合もSB0095・0096と関連があるものと推測される。

(3) 溝跡

古代の溝跡として15条報告するが、他にも古代の可能性のある溝跡がみられる。寺域の区画に関連するものが多いが、溝跡として遺構番号が付されているののも、溝かどうか明確でないものもある。部分的な掘り下げや遺構検出のみにとどめているため、正確な時期は明らかではない。

SD0003 溝跡

311・342 調査区の南端中央部に位置する東西方向の溝で、約 16 m 検出した。SD0009 と重複し、土層図がなく確実ではないが、SD0003 が古いと判断している（『172 集』）。SD0003 南側に約 1.6 m 離れて平行に位置する SD0005 溝跡や、西側に位置する SD0012・0023 溝跡と関連がある可能性がある。

SD0003 出土遺物

19～21 は須恵器高台付坏である。19 は高台が低く短いもので、体部は直線的に開く器形となる。内外面に回転ナデ、ナデ調整を行う。20 は高台が低く、底が内側に向かって低くなっている。内外面に回転ナデ、ナデ調整を行う。また、内面に墨痕が認められる。21 は高台が低く、体部が垂直気味に立ち上がる器形となる。内外面に回転ナデ、ナデ調整を行う。

SD0007 溝跡

311・342 調査区の南部中央、SD0010 北側に接するように位置する。東西方向の溝で、約 8.5 m 検出した。西側に位置する SD0008 と一連の溝である可能性がある。瓦が多量に出土した。

SD0007 出土遺物

22 は須恵器皿で、体部がやや外反しながら短く開く。内外面に回転ナデを行う。

SD0009 溝跡

311・342 調査区の南部に位置する。東西方向の溝で、東西に約 39 m 検出し、さらに西端で北に向かって 90° 屈曲しており、屈曲部分から約 5 m 検出したが、北側への更なる延長は確認されていない。2 箇所土層では、掘り直しは認められない。SD0009 北側に約 1.6 m 離れて平行に位置する SD0010 とは、位置的な関係と 2 条の溝東端が SB0058 柱穴とともに重複していることから、一連の溝跡であると考えられ、SD0009・0010 の間には築地堀があった可能性がある。

SD0009 出土遺物

23 は須恵器高台付坏で、高台が低く、体部と底部の境に稜をもたない。底面はヘラ切り離し後未調整、内面はナデ調整を行う。24 は須恵器の小型短頸壺で、口縁部が短く垂直に立ち上がる。25 は須恵器高坏脚部で、坏部を欠く。裾部が大きく開き、端部が三角形状に尖った器形となる。内外面に回転ナデを行う。

26 は土師器坏で、底部は肥厚しており、体部との境目あたりから器壁が薄くなる。内外面ともに摩耗のため不明である。

SD0010 溝跡

311・342 調査区の南部に位置する東西方向の溝で、約 29 m 検出した。西側の溝状の部分も連続するものとみると、約 35 m となる。前述のように、SD0009 と関連する一連の溝と考えられる。

SD0010 出土遺物

27 は須恵器高台付坏で、断面台形の高台をもち、接地部分が面をなす。体部と底部の境に強い稜をもつ。内外面に回転ナデを行う。28 は須恵器甕で、口縁部片で端部と胴部を欠く。形状から大甕と推定される。内外面にナデ調整、内面頸部より下半部に同心円当て具痕が認められる。

29 は土師器坏で、体部が直線的に開く器形となる。内外面にナデ調整を行う。

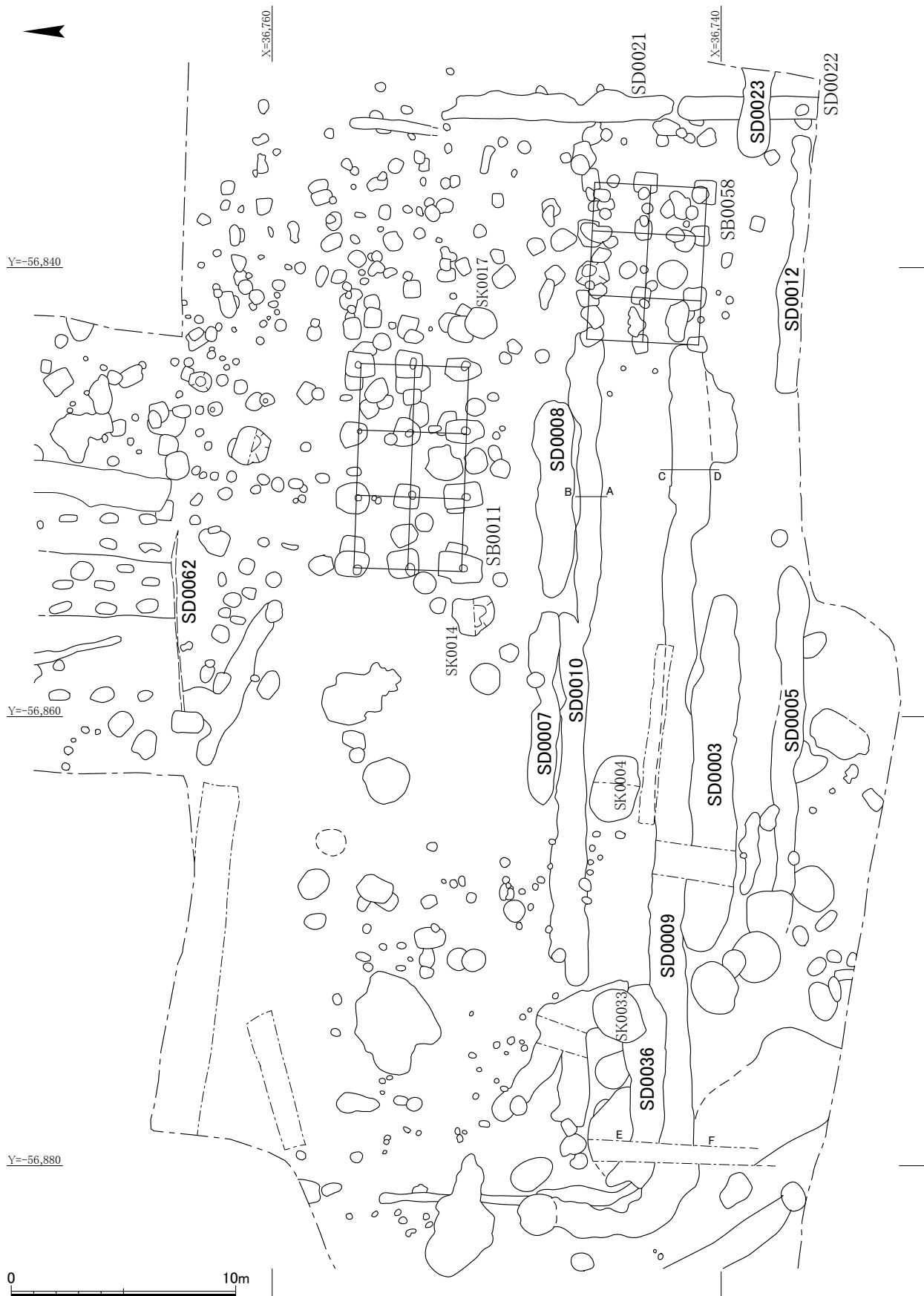


図30 311・342調査区南部 溝跡の分布 (1/250)

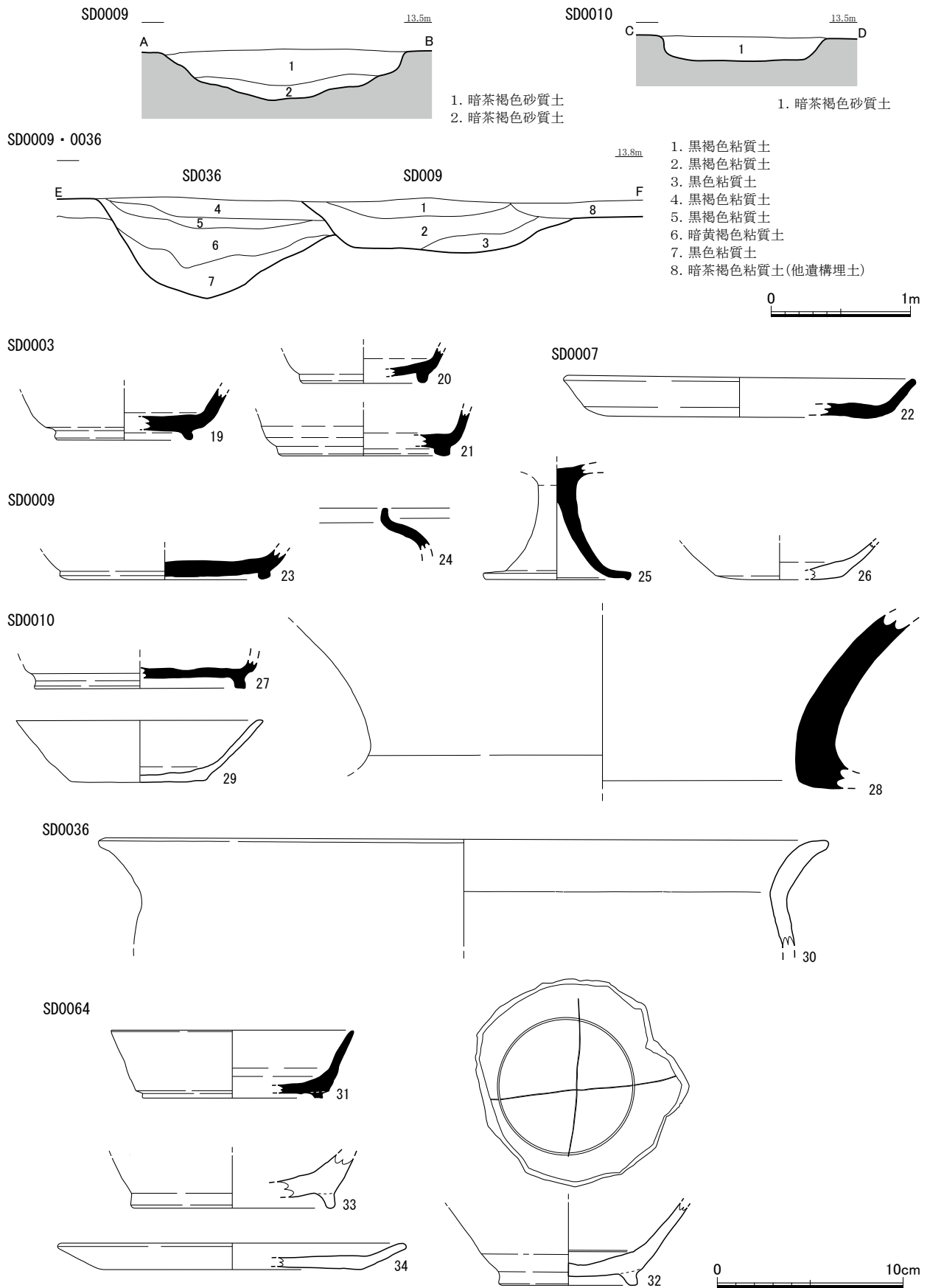


图 31 SD0009・0010・0036 土層 (1/40)、溝跡出土遺物 1 (1/3)

SD0036 溝跡

311・342 調査区の南東部、SD0009 と沿うように位置する。東西方向の溝で、約 9 m 検出した。土層からみて、SD0009 より古い。

SD0036 出土遺物

30 は土師器甕で、体部から頸部にかけて屈曲し、口縁部は肥厚する。外面は摩耗のため不明である。内面は頸部より下半部にケズリを行う。

SD0062 溝跡

311・342 調査区の中央南寄り、SX0049 の南側に位置する。南北方向の溝で、約 5.4 m 検出した。南側の段落ちで途切れることから、浅い溝と判断される。検出面から瓦が多量に出土した。

SD0064 溝跡

348 調査区の南部に位置する南北方向の溝で、約 13 m 検出した。南側に隣接する SD0052 溝跡と同一の溝と判断される。また、主軸方位が同じであることから、北側の SD0066 と一連の溝と考えられる。

SD0064 出土遺物

31 は須恵器高台付坏で、高台は低く、断面が台形状で、体部がやや外反しながら開く器形となる。内外面に回転ナデ、ナデ調整を行う。

32・33 は土師器碗である。32 は高台部が外側に張り出し、接地部分が面をなす。体部は直線的に開く器形となる。内外面に回転ナデ、ナデ調整を行い、外面下半部に回転ヘラケズリが認められる。また、内面に十字に 2 本のヘラ記号が認められる。33 は底部と体部の境に高台をもつ。内外面に回転ナデ、ナデ調整を行う。34 は土師器皿で、体部がわずかに外反しながら短く開く。内外面に回転ナデ、ナデ調整を行う。

SD0066 溝跡

348 調査区の北部に位置する南北方向の溝で、約 18 m 検出した。前述のように、SD0052・0064 と一連の溝と考えられ、SD0064 との間は約 4.8 m 離れている。SD0067 より古い。

SD0066 出土遺物

35～40 は須恵器蓋である。35 は歪みがあるが、器高は低く、天井部が水平に近く開く。口縁端部は丸く肥厚する。外面天井部はヘラ切り離し後ナデ、つまみ部と口縁部は回転ナデ調整、内面はナデ調整を行う。36 は器高が高く、やや丸みを帯びた形状となる。内外面に回転ナデ、ナデ調整を行う。37～39 は天井部が低く水平近くに開き、端部は下方に突出し、丸く肥厚する。37 のつまみ部は中央が窪む。外面天井部は回転ヘラケズリ、つまみ部と口縁部は回転ナデ調整、内面はナデ調整を行う。40 は器高が高く、やや丸みを帯びた形状となる。外面天井部は回転ヘラケズリ、つまみ部と口縁部は回転ナデ調整、内面はナデ調整を行う。

41・42 は須恵器坏である。41 は体部が外反しながら開く器形となる。外面底部はヘラ切り離し後未調整、口縁部は回転ナデ調整、内面は回転ナデ調整を行う。42 は体部が直線的に開く形状になる。内外面に回転ナデ、ナデ調整を行う。43・44 は須恵器高台付坏である。43 は高台が低く、断面は台形状で、体部が外反しながら開く器形となる。外面底部はヘラ切り離し後ナデ、回転ナデ、内面は回転ナデを行う。44

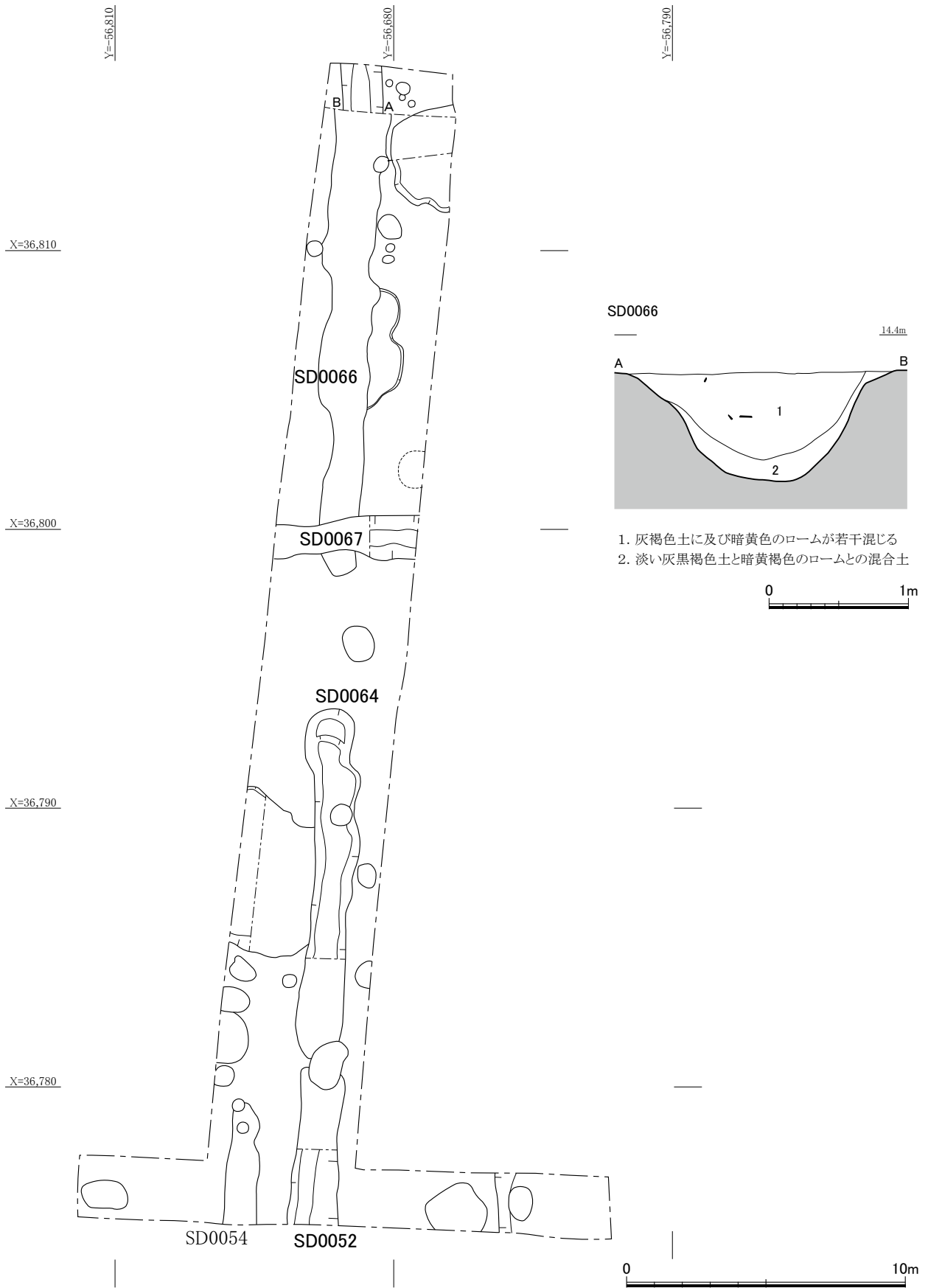


図32 348調査区 溝跡の分布 (1/200)・SD0066土層 (1/40)

は高台が低く、断面は台形状で接地部分は面をなす。内外面に回転ナデ、ナデ調整を行う。45は須恵器皿で、全体的に歪みが生じているが、高台は低く、断面が台形状で接地部分は面をなす。体部が外反しながら開く。外面は回転ヘラケズリ、回転ナデ、内面は回転ナデ、ナデ調整を行う。

46は須恵器甕で、口縁部は直線的に開き、端部は強い回転ナデにより突帯のような稜をなす。外面は格子タタキ、内面は同心円当て具痕が認められる。47～49は鉄鉢形の須恵器鉢である。47・48はやや尖った底をもち、体部は丸みを帯びて開いていく。外面胴部最大径より下半部は回転ヘラケズリ、内面は回転ナデ後縦方向ナデ、口縁部の内外面には回転ナデを行う。49は底部、体部に丸みを帯びて開いていく器形である。外面の上半部は回転ナデ、下半部に回転ヘラケズリ、内面は回転ナデ、ナデ調整を行う。

50は土師器椀で、低い高台がわずかに付き、体部が直線的に開く。外面の口縁部は回転ナデ、体部下半部には回転ヘラケズリ、底部はヘラ切り離し後未調整、内面は回転ナデを行う。

SD0067 溝跡

348 調査区の中央やや北寄りに位置する東西方向の溝で、約5m検出した。SD0066より新しい。

SD0067 出土遺物

51～53は須恵器蓋である。51は器高が高く、やや丸みを帯びた形状となる。口縁端部は下方に突出し、丸く肥厚する。外面天井部一部は回転ヘラケズリ、つまみ部と口縁部は回転ナデ調整、内面はナデ調整を行う。52は器高が低く、天井部が歪みにより中央に向かって窪んでいる。口縁端部は下方に突出する。外面天井部は回転ヘラケズリ、つまみ部と口縁部は回転ナデ調整、内面はナデ調整を行う。53は器高が高く、口縁端部は外側に張り出すように突出する。外面天井部は回転ヘラケズリ、つまみ部と口縁部は回転ナデ調整、内面はナデ調整を行う。54は須恵器高台付坏で、高台は低く、断面が台形状で、体部が内湾しながら開く。内外面に回転ナデ、ナデ調整を行う。

55は土師器蓋で、天井部より直線的に開く器形となる。内外面ともに摩耗のため不明である。56・57は土師器坏である。56は体部が直線的に開く器形と考えられる。内外面に回転ナデ、ナデ調整を行う。57は体部がやや外反しながら開く。外面底部はヘラ切り離し後ナデ、内外面に回転ナデを行う。

SD0070 溝跡

349 調査区の中央部に位置する南北方向の溝である。311・342 調査区のSD0022 溝跡と同一溝として報告したが（『172集』）、北端で東に屈曲しているため、明確には判断できない。西側に平行するSD0082又はSD0083と関連する道路側溝の可能性もあるが、やはり屈曲しているため、確実ではない。

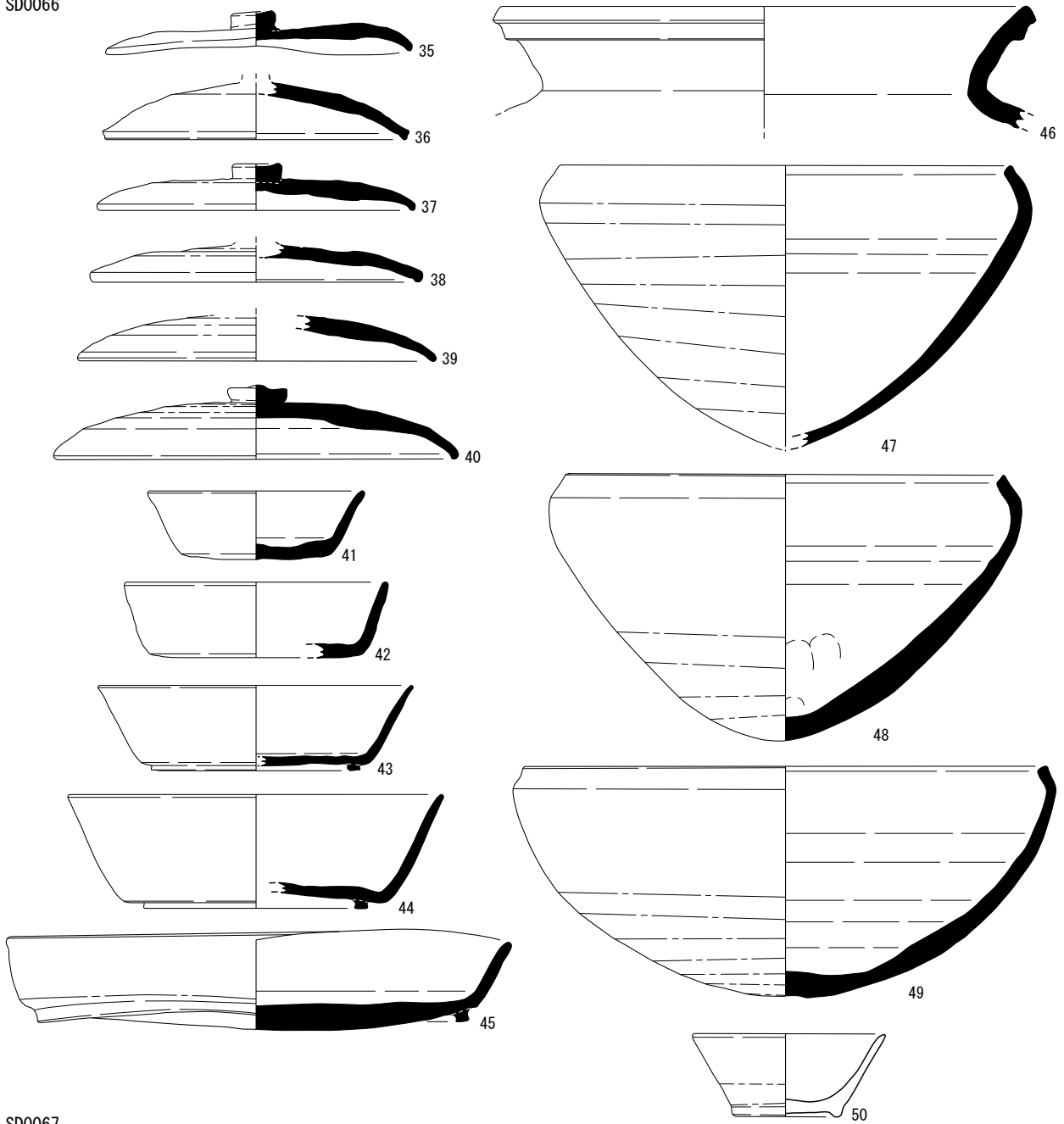
SD0082 溝跡

349 調査区の中央部に位置する。南北方向の溝として遺構番号を付しているが、北側で明確に検出できなかったことやトレンチでの土層観察から、検出面の土色の違いと判断している（『172集』）。

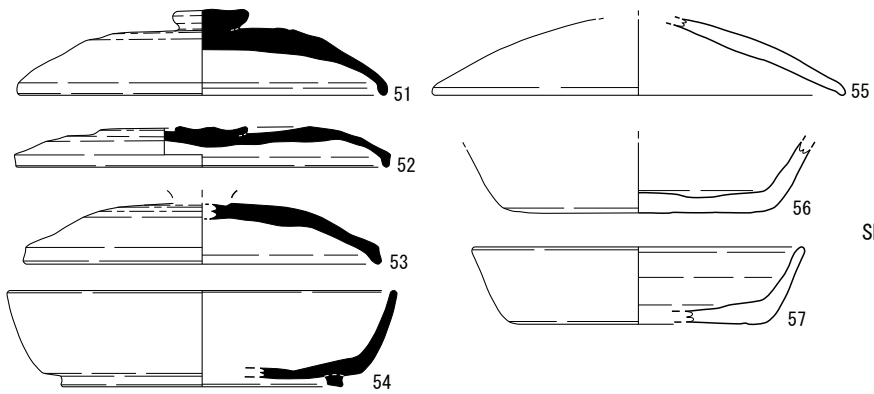
SD0082 出土遺物

58は土師器高台付坏で、高台は低く、底部と体部の境に明瞭な稜をもつ。内外面ともに摩耗のため、器面調整は不明である。

SD0066



SD0067



SD0082

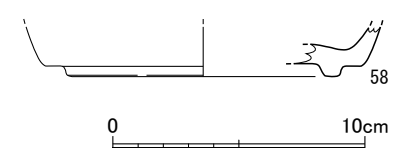


图33 溝跡出土遺物2 (1/3)

SD0086 溝跡

353 調査区の北部に位置する南北方向の溝で、約 13 m 検出した。南側に約 5.7 m 離れて位置する SD0087 と一連の溝と考えられる。遺構検出のみにとどめている。

SD0087 溝跡

353 調査区の南端部に位置する南北方向の溝とみられ、約 3 m 検出した。前述のように、南側に位置する SD0086 と一連の溝であったと考えられる。遺構検出のみにとどめている。

SD0105 溝跡

366 調査区の南東部に位置する。溝跡として遺構番号を付しているが、平面は不定形であり、溝と断定はできず、SD0112 溝跡との新旧関係も明らかではない。検出面から土師器坏が多量に出土した。

SD0105 出土遺物

59・60 は須恵器高台付坏である。59 は高台が高く、外側に張り出したような形状となり、体部は内湾しながら開く器形となる。外面に回転ナデ、ナデ調整を行う。60 は高台が高く、外側に張り出し、接地部分は面をなす。内外面に回転ナデ、ナデ調整を行う。

61～86 は土師器坏である。61・62 は底部付近の破片である。63～66・74・76・77 は体部が内湾気味に開く。64・65 は底部と体部の境に明確な稜をもたない。67～70・72・73・78～85 は体部が直線的に開く。71・75・86 は体部が直線的に開き、端部付近で外反しながら開く器形となる。61・64～69・72～78 はいずれも外面底部はヘラ切り離し後未調整、回転ナデ、内面は回転ナデ、ナデ調整を行う。62 は内外面にナデ調整を行う。63・71・79・81 は内外面にナデ調整、外面底部にはヘラ切り離し後未調整を行う。70 は内外面に回転ナデ、ナデ調整を行う。80 は内外面に回転ナデ、ナデ調整、体部の下半部にヘラケズリを行う。83 は内外面に回転ナデ、ナデ調整を行う。62・64・65・67～70・78・81～85 には、煤が付着しており、灯明皿とみられる。

87～91 は土師器碗である。87～90 は底部付近の破片である。高台を持ち、外側に開き接地部分は面をなす。87 は内外面にナデ調整、外面底部にヘラ切り離し後未調整を行う。88 は外面ナデ調整、底部に 4 本のヘラ記号を施す。内面は摩耗のため不明である。89 は内外面にナデ調整と内面上半部にミガキを施す。90 は内外面にナデ調整を行う。91 は外面底部にヘラ切り離し後ナデ調整、回転ナデ、内面にも回転ナデを行う。

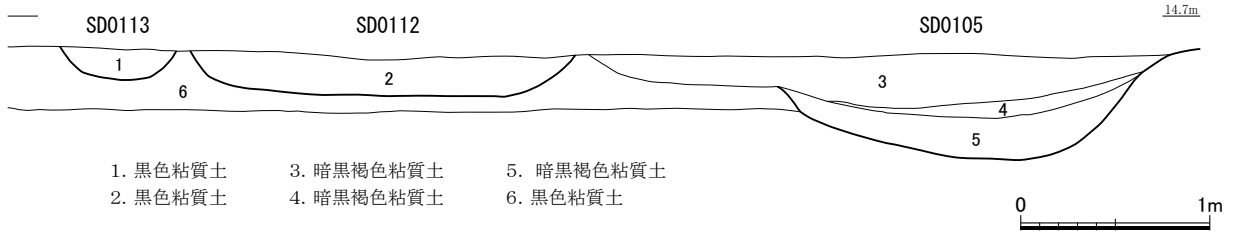
SD0113 溝跡

366 調査区の南東部に位置する東西方向の溝で、約 11 m 検出した。

SD0113 出土遺物

92～94 は土師器坏である。92・93 は底部と体部の境に明確な稜を持たず、開いていく器形となる。内外面にナデ調整、外面底部にヘラ切り離し後未調整を行う。94 は体部が内湾しながら開く器形だと考えられる。外面はナデ調整を行い、内面は摩耗のため不明である。

95 は土師器碗で、高台が高く、外側に張り出し、底部と体部の境に稜を持たずに開く。内外面ナデ調整、外面底部はヘラ切り離し後未調整である。



SD0105

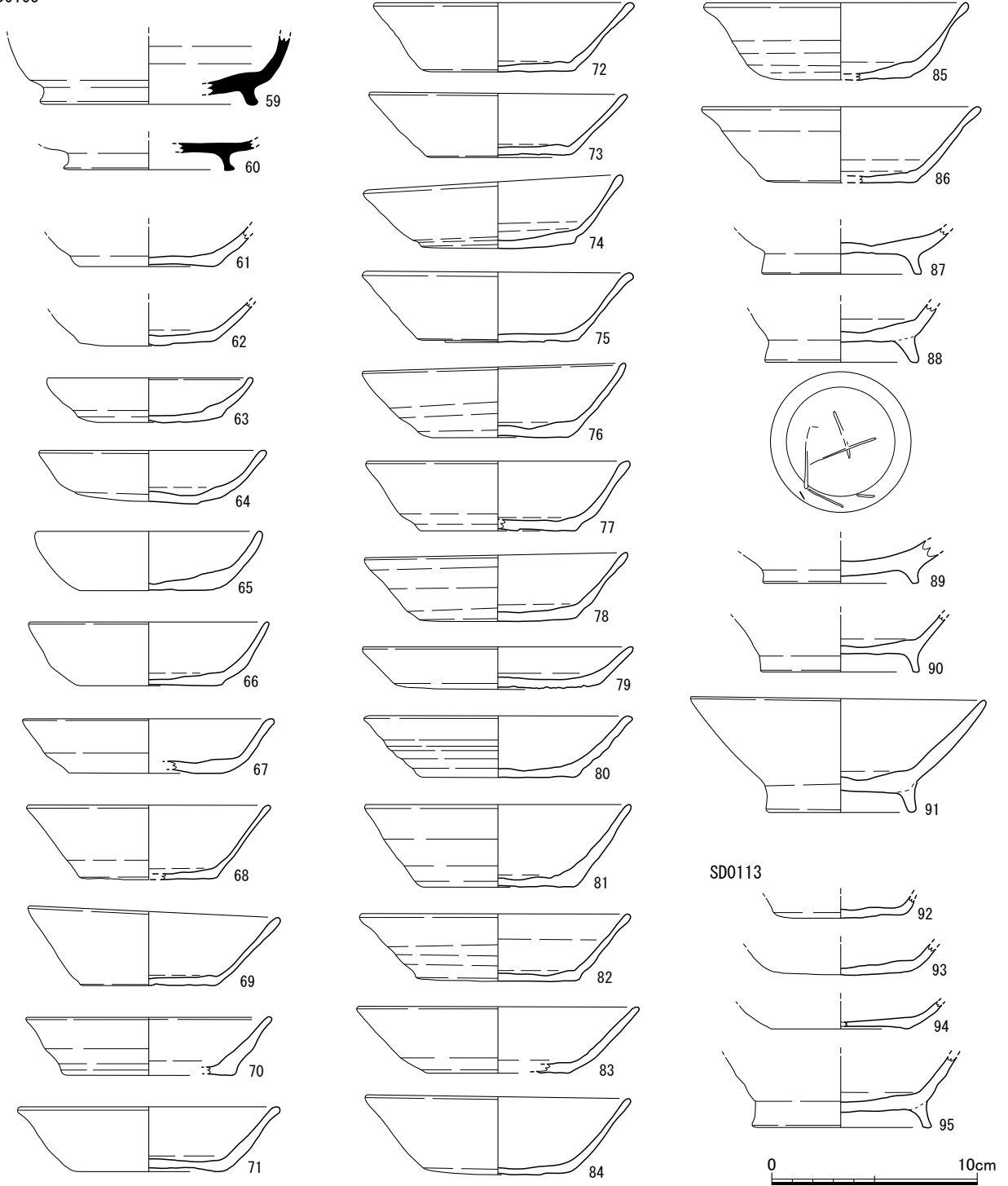


图34 SD0105・0112・0113土層(1/40)、溝跡出土遺物3(1/3)

(4) 土坑

古代の土坑として8基を報告するが、部分的な掘り下げや遺構検出のみにとどめているため、時期比定は確実ではなく、また性格などは不明である。

SK0004 土坑

311・342 調査区の南西部、SD0009 と SD0010 の間に位置する。平面は長軸 2.4 m、短軸 1.4 m の楕円形である。出土遺物の摩耗が著しく、細片が多いことから、古代以降の可能性はある。なお、遺構個別図は図示していない。

SK0004 出土遺物

96 は須恵器蓋で、天井部が低く水平近くを開き、端部は下方に突出し、尖る。高く丸みを帯びたつまみをもつ。外面天井部は回転ヘラケズリ、つまみ部と口縁部は回転ナデ調整、内面はナデ調整を行う。

SK0013 土坑

311・342 調査区の南西部に位置している。検出のみにとどめているため、正確な形状などは不明である。検出面付近から瓦がまとまって出土した。なお、遺構個別図は図示していない。

SK0014 土坑

311・342 調査区の南部、SB0011 の西側に位置する。平面は長軸 1.9 m、短軸 1.7 m の不整形で、検出面からの深さは 0.6 m である。

SK0014 出土遺物

97 は土師器鉢で、体部は丸みを帯び、口縁部は長く外反しながら開く。内外面にナデ調整を行う。

SK0017 土坑

311・342 調査区の南東部、SB0011 の東側に位置する。平面は長軸 1.5 m、短軸 1.3 m の不整楕円形で、検出面からの深さは 0.7 m である。

SK0017 出土遺物

98 は須恵器蓋で、器高が低く、天井部が歪みにより下方に窪んでいる。口縁端部は下方に突出する。外面天井部は回転ヘラケズリ、つまみ部と口縁部は回転ナデ調整、内面はナデ調整を行う。

99 は土師器甕で、頸部から短く開き、胴部はあまり広がらない器形である。口縁部内外面にはヨコナデ、外面胴部に縦方向ハケメ、内面頸部より下半部にケズリを行う。

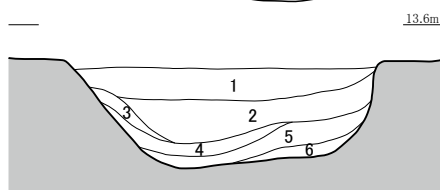
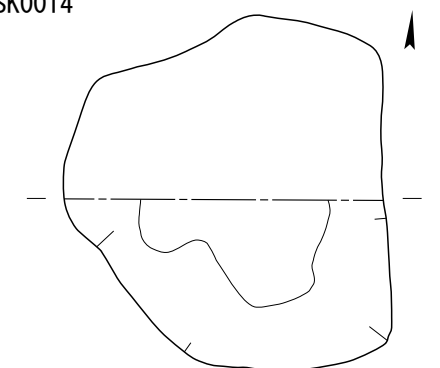
SK0033 土坑

311・342 調査区の南東部に位置する。平面は長軸 2.6 m、短軸 1.9 m の不整楕円形で、検出面からの深さは 0.5 m である。SD0036 より新しい。

SK0033 出土遺物

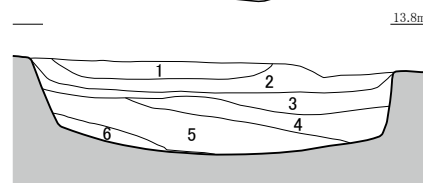
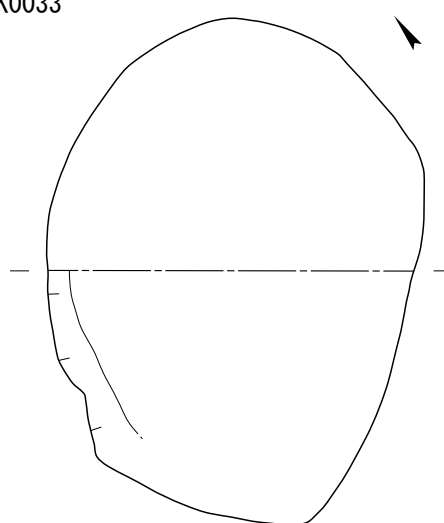
100 は須恵器蓋で、かえりを有し、天井部が高くなる器形と考えられる。内外面に回転ナデを行う。

SK0014



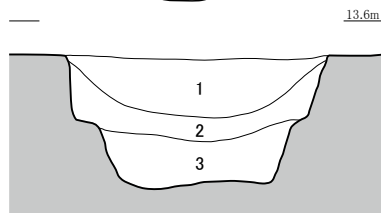
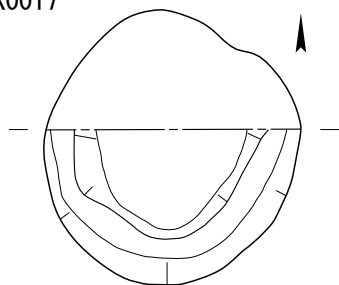
- 1. 茶褐色粘質土
- 2. 暗茶褐色粘質土
- 3. 暗褐色粘質土
- 4. 灰色粘質土
- 5. 暗茶褐色粘質土
- 6. 灰色粘質土

SK0033



- 1. 茶褐色粘質土
- 2. 黒色砂質土
- 3. 灰色砂質土
- 4. 黒色粘質土
- 5. 灰色砂質土

SK0017



- 1. 暗茶褐色粘質土
- 2. 黒色粘質土
- 3. 暗茶褐色粘質土

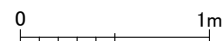


図35 SK0014・0017・SK0033 (1/40)

SK0098 土坑

366 調査区の南部に位置する。検出面で土師器杯・椀、黒色土器椀が重なった状態で出土した部分に遺構番号を付したが、明確な掘方などは不明であり、遺構個別図は図示していない。

SK0098 出土遺物

101～103は底部へラ切り離しの土師器杯である。101は底部が厚く、体部が直線的に開く器形となる。器面調整は摩耗のため不明である。102は体部が直線的に開く器形となる。上半部はヨコナデ、内面は摩耗のため不明である。103は底部と体部の境が明確で、体部が内湾しながら開く器形となる。上半部はヨコナデ、内面は摩耗のため不明である。104・105は土師器椀である。104は高台が高く、体部が内湾しながら開く器形となる。外面底部はへら切り離し後ナデ、上半部はヨコナデ、内面はヨコナデを行う。

105は黒色土器A類椀である。高台が高く、外側に張り出し、体部は丸く深い器形で、端部は丸くなる。外面底部はへら切り離し後ナデ、上半部は摩耗のため不明である。内面はへらミガキを行う。

SK0102 土坑

366 調査区の北西部に位置する。南側の溝状遺構と重複しているが、新旧関係は不明であり、平面形が不明確であるため、遺構個別図は図示していない。

SK0102 出土遺物

106・107 は須恵器蓋である。106 は天井部が低く水平近くを開き、端部は下方に突出し、丸く肥厚する。外面天井部は回転ヘラケズリ後回転ナデ、口縁部は回転ナデ、内面は回転ナデ、ナデ調整を行う。107 は天井部が非常に低く水平近くを開き、つまみをもつ蓋である。外面天井部はヘラ切り離し後ナデ、回転ナデ、

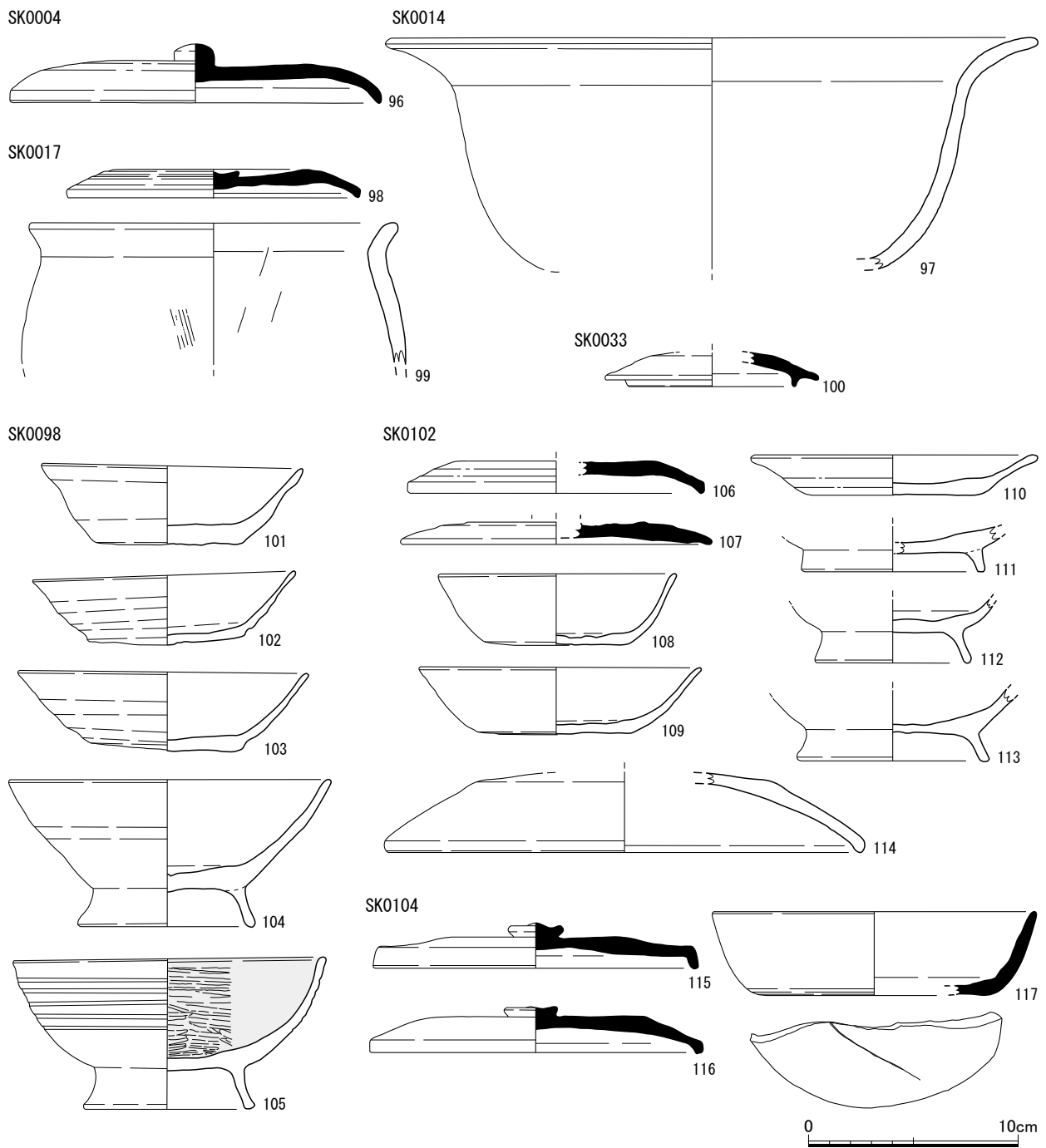


図 36 土坑出土遺物 (1/3)

内面はナデ調整を行う。

108・109は土師器坏である。108は体部が内湾気味に開き、深くなる器形となる。内外面は摩耗のため不明である。煤が付着しており、灯明皿とみられる。109は体部が直線的に伸び、口縁部がやや外反しながら開く。外面底部はヘラ切り離し後未調整、その他は摩耗のため不明である。110は土師器皿で、体部が外反しながら大きく開く。外面はナデ調整、体部下半部には回転ヘラケズリ、内面はナデ調整を行う。111～113は土師器碗である。111は高台が高く、外側に張り出し、接地部分に面をなす。内外面にナデ調整を行う。112・113は高台が高く、外側に張り出し、体部が直線的に開くものと考えられる。112は内外面にナデ調整を行う。113は外面ナデ調整、底部はヘラ切り離し後未調整で、内面は摩耗のため不明である。114は大型の土師器蓋で、天井部より緩やかに開き、端部は下方に突出し、丸く肥厚する。器面調整は摩耗のため不明である。

SK0104 土坑

366調査区の西端中央やや北寄りに位置する。遺構の掘り下げを行っておらず、遺物は検出面から出土した。なお、遺構個別図は図示していない。

SK0104 出土遺物

115・116は須恵器蓋である。115は天井部が低く水平近くに開き、端部は下方に長く突出し、丸く肥厚する。内外面に回転ナデ、ナデ調整を行う。116は天井部が低く水平近くに開き、端部は下方に突出し、接地部分は面をなしている。外面天井部は回転ヘラケズリ、つまみ部と口縁部は回転ナデ調整、内面はナデ調整を行う。117は須恵器坏で、底部と体部の境に明確な稜をもたず、体部は内湾気味に開く深い器形となる。外面はナデ調整、体部下半部から底部にかけて回転ヘラケズリ、内面は回転ナデ、ナデ調整を行う。底部に1本のヘラ記号を施す。

表1 辛上廃寺跡 出土須恵器・土師器

挿図-番号	佐賀県遺物登録番号	出土位置	種別	器種	寸法 cm			色調		備考
					口径	底径	器高	外面	内面	
図 22-1	12002786	SX0049	須恵器	蓋	14.5*			灰	灰	
図 22-2	12002787	SX0049	須恵器	蓋	14.0*			灰	灰	
図 22-3	07002479	SX0049	須恵器	横瓶				灰	灰	
図 22-4	07002478	SX0049	土師器	甗	17.7*			明褐	明褐	
図 22-5	20000648	SX0049	須恵器	蓋				灰	灰	
図 22-6	20000650	SX0049	須恵器	蓋	14.0*		2.1	暗灰	灰	
図 22-7	20000649	SX0049	須恵器	蓋	14.6*		2.0	灰白	灰白	
図 22-8	20000645	SX0049	須恵器	高台付坏		8.8*		灰	灰	
図 22-9	20000646	SX0049	須恵器	小壺	4.9*		5.4	褐灰	褐灰	
図 22-10	20000644	SX0049	須恵器	高坏		7.4*		褐灰	褐灰	
図 23-11	20000642	SB0011	須恵器	高坏	9.9*			灰	灰	

表1 辛上廃寺跡 出土須恵器・土師器

挿図 - 番号	佐賀県遺物 登録番号	出土位置	種別	器種	寸法 cm			色調		備考
					口径	底径	器高	外面	内面	
図 25-12	20000693	SB0095	須恵器	高台付坏		9.0*		灰	灰	底面ヘラ記号
図 27-13	07002509	SB0096	須恵器	蓋	12.8*			灰褐	にぶい赤褐	
図 27-14	07002508	SB0096	須恵器	甗				灰	灰黄	
図 27-15	07002510	SB0096	土師器	鉢	19.8*			にぶい黄橙	にぶい黄橙	
図 28-16	07002513	SB0097	須恵器	蓋	14.7*			灰	灰	
図 28-17	07002512	SB0097	土師器	坏	14.1*	10.0*	2.8	橙	橙	
図 28-18	07002511	SB0097	土師器	坏	13.6*	10.3*	3.2	明赤褐	明赤褐	内面煤付着
図 31-19	20000637	SD0003	須恵器	高台付坏		7.4*		黄灰	灰白	
図 31-20	20000639	SD0003	須恵器	高台付坏		6.8*		灰	灰	内面墨痕
図 31-21	20000638	SD0003	須恵器	高台付坏		9.2*		灰	灰白	
図 31-22	12002736	SD0007	須恵器	皿	18.5*		2.8	灰	灰	
図 31-23	20000640	SD0009	須恵器	高台付坏		11.4*		灰白	灰白	
図 31-24	12002766	SD0009	須恵器	壺				灰	灰	
図 31-25	12002767	SD0009	須恵器	高坏		7.6		灰	灰	
図 31-26	20000641	SD0009	土師器	坏		6.8*		橙	浅黄橙	
図 31-27	12002775	SD0010	須恵器	高台付坏		11.2*		灰	灰	
図 31-28	12002774	SD0010	須恵器	甗				灰	灰	
図 31-29	12002773	SD0010	土師器	坏	13.2	7.1	3.3	淡褐	明黄褐	板状圧痕
図 31-30	07002469	SD0036	土師器	甗	39.1*			明褐	明褐	
図 31-31	20000653	SD0064	須恵器	高台付坏	13.0*	9.8*	3.6	灰白	灰	
図 31-32	20000655	SD0064	土師器	碗				橙	橙	内面ヘラ記号
図 31-33	20000656	SD0064	土師器	碗		11.0*		灰黄褐	灰黄褐	
図 31-34	20000654	SD0064	土師器	皿	18.8*	14.0*	1.4	浅黄橙	浅黄橙	
図 33-35	07002487	SD0066	須恵器	蓋	14.3*		2.1	灰	灰	
図 33-36	20000661	SD0066	須恵器	蓋	14.2*			灰	灰	
図 33-37	20000663	SD0066	須恵器	蓋	14.8*		2.2	灰	灰	
図 33-38	20000662	SD0066	須恵器	蓋	15.6*			灰白	灰白	
図 33-39	20000647	SD0066	須恵器	蓋	16.8*			灰白	灰	
図 33-40	07002486	SD0066	須恵器	蓋	19.0*		3.5	灰白	灰白	
図 33-41	20000660	SD0066	須恵器	坏	10.2*		3.2	灰白	灰白	
図 33-42	20000659	SD0066	須恵器	坏	12.4*		3.6	灰	灰	
図 33-43	07002485	SD0066	須恵器	高台付坏	14.8*	9.8*	4.0	灰	灰白	
図 33-44	20000658	SD0066	須恵器	高台付坏	17.6*	10.4*	5.3	灰	灰	
図 33-45	07002484	SD0066	須恵器	高台付坏	23.6*	20.2*	4.8	灰	灰	
図 33-46	20000657	SD0066	須恵器	甗	24.5*			黒褐	灰	
図 33-47	07002482	SD0066	須恵器	鉢	21.2			灰	暗灰	
図 33-48	07002481	SD0066	須恵器	鉢	20.6*		12.5	灰黄	暗灰黄	

表1 辛上廃寺跡 出土須恵器・土師器

挿図 - 番号	佐賀県遺物 登録番号	出土位置	種別	器種	寸法 cm			色調		備考
					口径	底径	器高	外面	内面	
図 33-49	07002483	SD0066	須恵器	鉢	24.6		10.8	灰	灰白	
図 33-50	07002488	SD0066	土師器	椀	9.0*	5.1*	3.9	橙	橙	
図 33-51	07002490	SD0067	須恵器	蓋	14.6*		3.4	灰	灰白	
図 33-52	07002491	SD0067	須恵器	蓋	14.8*		1.6	暗灰	灰	
図 33-53	07002492	SD0067	須恵器	蓋	14.2*			灰	灰	
図 33-54	07002493	SD0067	須恵器	高台付坏	15.5*	11.2*	3.8	灰	灰	
図 33-55	20000664	SD0067	土師器	蓋	16.4*			浅黄橙	浅黄橙	
図 33-56	20000651	SD0067	土師器	坏		10.7*		橙	橙	
図 33-57	07002489	SD0067	土師器	坏	13.2*	10.4*	3.1	明赤褐	明赤褐	
図 33-58	20000665	SD0082	土師器	高台付坏		10.8*		浅黄橙	浅黄橙	
図 34-59	20000672	SD0105	須恵器	高台付坏		10.6*		灰	灰	
図 34-60	20000673	SD0105	須恵器	高台付坏		8.4*		灰	灰	
図 34-61	20000671	SD0105	土師器	坏		7.0*		橙	橙	
図 34-62	20000680	SD0105	土師器	坏		6.6*		浅黄橙	淡黄	内面煤付着
図 34-63	20000679	SD0105	土師器	坏	10.0*	7.0*	2.2	にぶい橙	橙	
図 34-64	07002528	SD0105	土師器	坏	11.1*	7.2	2.6	橙	にぶい褐	内面煤付着 板状圧痕
図 34-65	20000682	SD0105	土師器	坏	11.0*	6.9*	2.9	灰白	褐灰	内面煤付着
図 34-66	07002540	SD0105	土師器	坏	11.7*	7.1*	3.1	橙	にぶい黄橙	
図 34-67	20000683	SD0105	土師器	坏	12.2*	7.7*	2.7	灰白	にぶい橙	内面煤付着
図 34-68	07002538	SD0105	土師器	坏	11.9*	6.7*	3.6	明赤褐	明赤褐	内面煤付着 板状圧痕
図 34-69	07002536	SD0105	土師器	坏	12.6*	6.7*	3.9	橙	橙	内面煤付着 板状圧痕
図 34-70	20000681	SD0105	土師器	坏	12.0*	8.0*	2.8	にぶい橙	浅黄橙	内面煤付着
図 34-71	20000675	SD0105	土師器	坏	12.8*	8.0*	3.1	にぶい橙	にぶい橙	
図 34-72	07002539	SD0105	土師器	坏	12.7*	7.5*	3.4	橙	黄橙	内面煤付着 板状圧痕
図 34-73	07002530	SD0105	土師器	坏	12.6	7.0	3.2	橙	橙	板状圧痕
図 34-74	07002533	SD0105	土師器	坏	12.6	7.5	3.6	橙	橙	板状圧痕
図 34-75	07002531	SD0105	土師器	坏	13.2	7.8	3.5	にぶい黄橙	橙	
図 34-76	07002535	SD0105	土師器	坏	12.8	6.9	3.6	にぶい黄橙	橙	板状圧痕
図 34-77	07002527	SD0105	土師器	坏	12.9*	7.6*	3.4	橙	橙	板状圧痕
図 34-78	07002534	SD0105	土師器	坏	12.8	7.7	3.4	橙	橙	内面煤付着
図 34-79	20000674	SD0105	土師器	坏	12.8*	10.0*	2.1	にぶい橙	にぶい橙	
図 34-80	20000678	SD0105	土師器	坏	13.0*	7.7*	3.0	淡黄	灰白	
図 34-81	20000677	SD0105	土師器	坏	13.0*	7.4*	4.0	橙	橙	内面煤付着
図 34-82	07002537	SD0105	土師器	坏	13.2*	8.0	3.3	橙	橙	内面煤付着 板状圧痕
図 34-83	20000676	SD0105	土師器	坏	13.7*	7.0*	3.2	橙	橙	内面煤付着
図 34-84	07002532	SD0105	土師器	坏	12.9	7.3	3.9	橙	橙	内面煤付着
図 34-85	07002541	SD0105	土師器	坏	12.9*	6.9	3.8	橙	浅黄橙	内面煤付着 板状圧痕

表1 辛上廃寺跡 出土須恵器・土師器

挿図-番号	佐賀県遺物 登録番号	出土位置	種別	器種	寸法 cm			色調		備考
					口径	底径	器高	外面	内面	
図 34-86	07002529	SD0105	土師器	坏	13.6*	7.3	3.7	橙	橙	
図 34-87	20000666	SD0105	土師器	椀		7.7*		にぶい橙	にぶい橙	
図 34-88	20000667	SD0105	土師器	椀		7.5*		橙	橙	底面ヘラ記号
図 34-89	20000669	SD0105	土師器	椀		7.6*		黒	浅黄橙	
図 34-90	20000670	SD0105	土師器	椀		7.7*		橙	橙	
図 34-91	07002542	SD0105	土師器	椀	14.4	7.3*	5.6	橙	橙	
図 34-92	20000687	SD0113	土師器	坏		6.0*		橙	浅黄橙	
図 34-93	20000685	SD0113	土師器	坏		7.0*		灰黄	黄灰	
図 34-94	20000684	SD0113	土師器	坏		6.6*		橙	橙	
図 34-95	20000686	SD0113	土師器	椀		8.7*		灰白	灰白	
図 36-96	12002778	SK0004	須恵器	蓋	17.7		2.8	灰	灰	
図 36-97	12002780	SK0014	土師器	鉢	31.0*			茶褐	茶褐	
図 36-98	12002782	SK0017	須恵器	蓋	13.8*		1.4	灰	灰	
図 36-99	12002781	SK0017	土師器	甗	17.2*			明黄褐	明黄褐	
図 36-100	20000643	SK0033	須恵器	蓋	7.8*			灰	灰	
図 36-101	07002501	SK0098	土師器	坏	12.5	7.1	3.9	明黄褐	にぶい黄橙	
図 36-102	07002504	SK0098	土師器	坏	12.6	7.5	3.5	にぶい橙	浅黄橙	板状圧痕
図 36-103	07002503	SK0098	土師器	坏	13.9	7.3	3.7	にぶい黄橙	にぶい黄橙	板状圧痕
図 36-104	07002505	SK0098	土師器	椀	15.4*	8.5*	7.0	橙	橙	
図 36-105	07002502	SK0098	黒色土器	椀	14.9*	8.1*	7.2	橙	黒	
図 36-106	20000692	SK0102	須恵器	蓋	14.2*			灰	灰	
図 36-107	07002516	SK0102	須恵器	蓋	14.9*			灰	灰白	
図 36-108	07002517	SK0102	土師器	坏	11.3	7.0	3.4	明赤褐	明赤褐	内面煤付着 板状圧痕
図 36-109	07002518	SK0102	土師器	坏	13.4*	7.4	3.2	橙	にぶい橙	
図 36-110	20000691	SK0102	土師器	皿	13.2*	8.5*	1.9	浅黄橙	浅黄橙	
図 36-111	20000688	SK0102	土師器	椀		8.8*		褐灰	褐灰	
図 36-112	20000690	SK0102	土師器	椀		7.5*		浅黄	にぶい橙	
図 36-113	20000689	SK0102	土師器	椀		9.2*		橙	橙	
図 36-114	07002515	SK0102	土師器	蓋	23.0*			橙	橙	
図 36-115	20000695	SK0104	須恵器	蓋	15.5*		2.2	灰	灰	
図 36-116	20000694	SK0104	須恵器	蓋	15.9		2.2	灰	にぶい褐	
図 36-117	20000696	SK0104	須恵器	坏	15.5*	11.0*	4.0	灰	灰	底面ヘラ記号

3 出土瓦

(1) 軒丸瓦

軒丸瓦として確認できるものは、すべて複弁七弁蓮華文軒丸瓦であり、以下の文様を基本としているものと推定される。

内区中央の中房に蓮子が1個、それを取り囲むように8個配置される。

七つの複弁のうち、一つは単弁となり、複弁間には先端が二つに分かれる子葉状の間弁がある。

外区には珠文が18個配置される。

1はSD0007出土で、瓦当面がほぼ残存している。丸瓦部の接合部分で剥離している。瓦当径18.0cm、内区の中房径6.2cm、外区の内縁幅は1.8cm、外縁幅は0.8cmを測る。外区の珠文が18個、内区の複弁が6、単弁が1、間弁、中房に蓮子が9個確認できる。2はSD0007出土で、瓦当面が約1/2残存し、丸瓦部分まで残る唯一の例である。瓦当復元径20.6cm、内区の中房径6.4cm、外区の内縁幅は2.2cm、外縁幅は0.8cmを測る。丸瓦部との接合部分に明瞭な段を残し、接合部分に凹凸を施しており、瓦当裏面には強いユビオサエ、内面には整った布目痕が確認できる。外区の珠文が9個、内区の複弁が4、中房に蓮子が6個確認できる。3はSD0008出土で、瓦当面がほぼ残存しているが、下端部内面が一部欠けている。瓦当径19.0cm、内区の中房径6.4cm、外区の内縁幅は2.0cm、外縁幅は0.8cmを測る。範傷が確認でき、全体的に文様の彫り込みが浅く、珠文や中房の蓮子もほとんど潰れている。丸瓦部と接合する部分で剥離している。外区の珠文が11個、内区の複弁が6、単弁が1、間弁、中房に蓮子が4個確認できる。瓦当裏面には強いユビナデがみられる。4はSD0112出土で、瓦当面がほぼ残存しており、丸瓦部と接合する部分で剥離している。瓦当径18.5cm、内区の中房径6.6cm、外区の内縁幅は1.6cm、外縁幅は0.6cmを測る。範傷が複数入っており、こちらも彫り込みが浅くなっている。外区の珠文が14個、内区の複弁が6、単弁が1、間弁、中房に蓮子が8個確認できる。5はSD0052出土で、瓦当面がほぼ残存している。丸瓦部の接合部分で剥離しており、緩やかに外側に膨らむ縦断面である。瓦当径18.5cm、内区の中房径6.7cm、外区の内縁幅は1.8cm、外縁幅は0.8cmを測る。外区の珠文が18個、内区の複弁が6、単弁が1、間弁、中房に蓮子が9個確認できる。6は342調査区検出面出土で、瓦当面がほぼ残存しており、一部表面が剥離している。瓦当径19.1cm、内区の中房径6.6cm、外区の内縁幅は1.8cm、外縁幅は0.8cmを測る。丸瓦部と接合する部分で剥離している。瓦当裏面には強いユビナデがみられる。外区の珠文が13個、内区の複弁が6、単弁が1、間弁、中房に蓮子が9個確認できる。7は366調査区検出面出土で、瓦当面が約1/2残存し、丸瓦部との接合部分に明瞭な段を残している。外区の内縁幅は1.7cm、外縁幅は0.8cmを測る。瓦当裏面には強いユビオサエがみられる。外区の珠文が5個、内区の複弁が4、単弁が1、間弁が確認できる。

8は311調査区検出面出土で、瓦当面が約1/3残存している。丸瓦部と接合する部分で剥離している。瓦当表面は著しく摩耗しており、内区の複弁2が確認できる程である。9はSD0064出土で、瓦当面が剥離しているため、薄手になっている。外区の珠文が4個、内区の複弁が2、間弁、中房に蓮子が1個確認できる。10は311調査区検出面出土で、瓦当面が約1/6残存している。丸瓦部との接合部分が見られないため瓦当面下部の一部だと考えられる。外区の珠文が5個、内区の複弁が1、間弁が確認できる。11はSD0066出土で、瓦当面の一部である。瓦当裏面に強いユビナデがみられる。外区の珠文が5個、内区の間弁が確認できる。12は311調査区検出面出土で、瓦当面が剥離しているため、薄手になっている。外区の珠文が2個、内区の単弁が1、間弁が確認できる。13は348調査区検出面出土で、瓦当面が約1/8残存し



図37 軒丸瓦 1 (1/4)

ている。丸瓦部と接合する部分で剥離している。瓦当裏面には強いユビオサエがみられる。外区の珠文が3、内区の複弁が1、間弁、中房に蓮子が4個確認できる。14は311調査区検出面出土で、瓦当面が剥離しており、瓦当裏面は摩耗している。外区の珠文2個が確認できる。15は311調査区検出面出土で、瓦当面の一部である。瓦当裏面は摩耗している。外区の珠文1個が確認できる。16はSD0007出土で、瓦当面の一部である瓦当裏面は摩耗している。内区の複弁1と間弁が確認できる。

(2) 軒平瓦

軒平瓦として確認できるものは、1点を除き、均整唐草文軒平瓦と推定される。下縁が判明するもののいずれも上向きの鋸歯文が施されるが、通常の鋸歯文とは逆の方向を向いている。

17はSD0066出土で、瓦当面の約1/2が残存している。凹面には布目痕、凸面には1辺0.5cm四方の方形のタタキを行っている。瓦当厚4.9cm、瓦当顎幅4.7cm、瓦当顎高2.0cmを測る。上外区の楕円状珠文が8個、内区の均整唐草文、下外区の鋸歯文11が確認できる。18はSX0051(311調査区位置不明)出土で、瓦当面の約1/4が残存している。瓦当厚4.5cm、瓦当顎幅5.2cm、瓦当顎高1.2cmを測る。凹面には整った布目痕、凸面には1辺0.3～0.5cm四方の方形のタタキを行っている。上外区の楕円状珠文が4個、内区の均整唐草文、下外区の鋸歯文5が確認できる。19はSX0051出土で、瓦当面の約1/6が残存している。瓦当厚5.1cm、瓦当顎幅5.2cm、瓦当顎高1.4cmを測る。凹面には整った布目痕が確認できる。文様の形状から軒平瓦の中央部分と考えられる。上外区の楕円状珠文が3個、内区の均整唐草文、下外区の鋸歯文4が確認できる。20は311調査区検出面出土で、瓦当面がごくわずかに残る。文様から軒平瓦の中央部分だと推測される。内区の均整唐草文、下外区の鋸歯文1が確認できる。21は342調査区検出面出土で、瓦当面の一部が残存する。内区の唐草文、下外区の鋸歯文2が確認できる。22は342調査区攪乱出土で、瓦当面の一部が残存する。上外区の楕円状珠文が2個、内区の均整唐草文が確認できる。接合面にもタタキがみられる。23は311調査区検出面出土の重弧文軒平瓦で、瓦当厚3.2cmを測る。凹面には整った布目痕が確認できる。出現する時期は7世紀末～8世紀初頭と考えられる。重弧文軒平瓦の出土は1点のみなので、搬入品の可能性が高い。

(3) 丸瓦

確認できるものはすべて玉縁式であった。完形に近いものはなく、ほとんどが破片資料である。

24はSD0066出土で、凹面に粗い布目痕がみられる。25はSD0007出土で、両端部が残存しており、横断面が比較的わかる例である。26はSD0007出土で、厚さが薄いため、熨斗瓦などの可能性もある。凹面に粗い布目痕がみられる。27はSD0007出土で、26と比べ、器壁は厚いが緩やかな横断面である。凹面に整った布目痕がみられる。28はSD0007出土で、緩やかな横断面を呈す。凹面に粗い布目痕がみられる。29は311調査区SK0019出土で、玉縁部分を作り出す部分まで残る。凹面に目が粗い布目痕がみられる。30はSK0013出土で、凹面に整った布目痕がみられる。31はSK0013出土で、中央部分に向かって肥厚する。凹面に整った布目痕がみられる。32はSK0013出土で、端部両端を欠いており、凹面に整った布目痕がみられる。33はSK0013出土で、玉縁部分を作り出す部分まで残る。凹面にやや乱れた布目痕がみられる。34はSD0066出土で、凹面に粗い布目痕がみられる。前面と側面には線状痕が残る。35はSD0062出土で、全体的に薄手の造りとなっている。凹面には粗い布目痕がみられる。



図38 軒丸瓦2・軒平瓦(1/4)

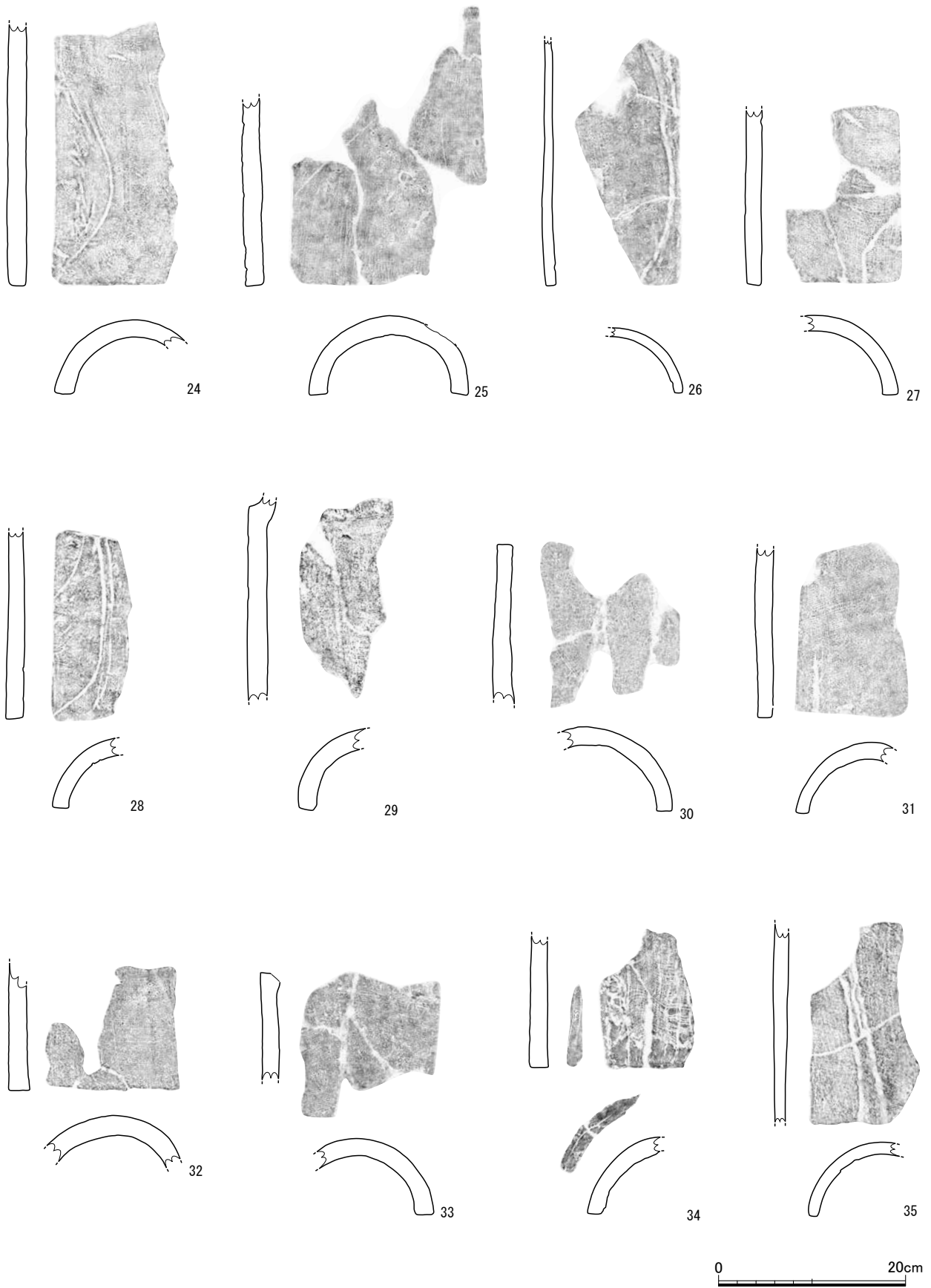


图39 丸瓦1 (1/6)

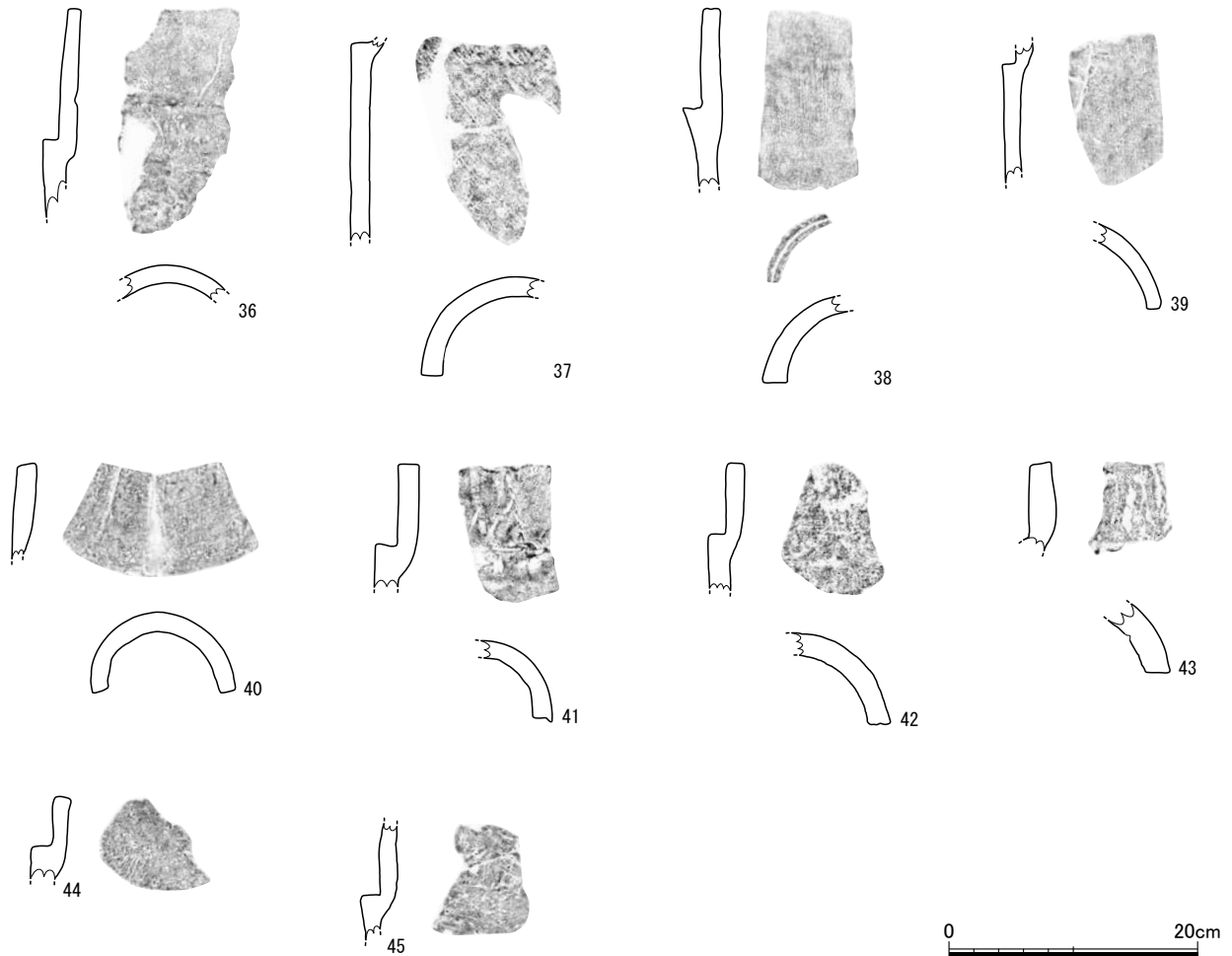
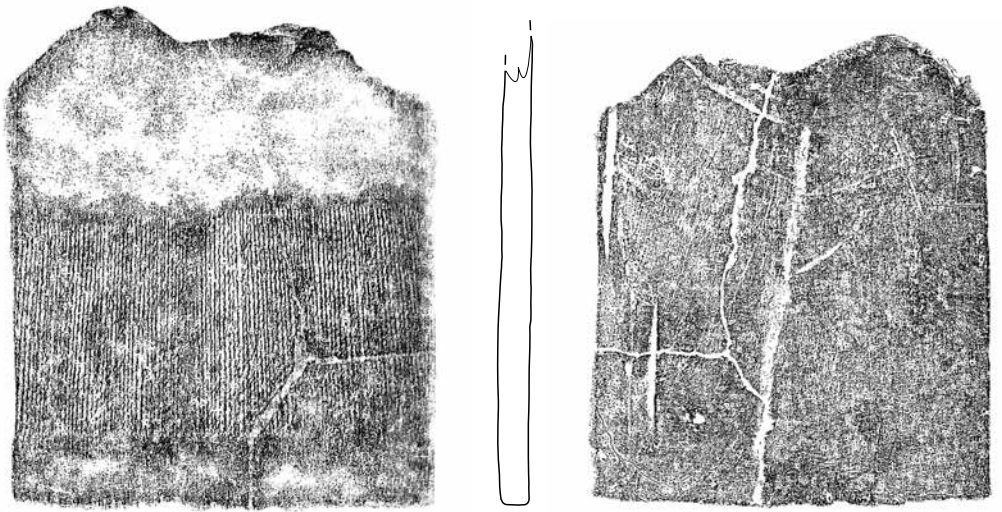


図40 丸瓦2 (1/6)

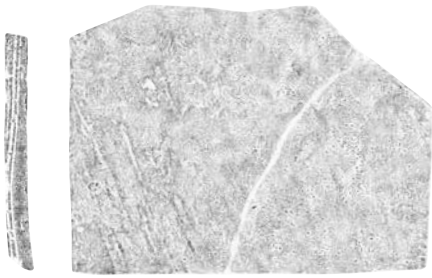
36は366調査区検出面出土で、端部両端を欠くが、玉縁部分が良く残る。玉縁の長さが約11cmとほかのものより長く、新しい時期のものである可能性がある。37はSD0007出土で、玉縁部分を作り出す部分まで残る。38はSK0102出土で、体部から玉縁部分まで確認できる。凹面に整った布目痕がみられ、前面には弧を描く線状痕が確認できる。39はSK0013出土で、緩やかで器壁が薄い横断面を呈す。凹面に整った布目痕がみられる。40はSK0013出土で、玉縁部分の両端部が残存しており、横断面が比較的わかる例である。41は確認調査No.65トレンチ出土で、玉縁部の端部が残存しており、内面に粗い布目痕が確認できる。42は311調査区検出面出土で、玉縁の端部が残存している。緩やかな横断面を呈している。43はSD0007出土で、玉縁へと造り出す部分から残っている。44はSK0013出土で、玉縁部分が4.0cmと短い。45はSK0013出土で、玉縁部分で端部を欠いており、5cm以上になると考えられる。

(4) 平瓦

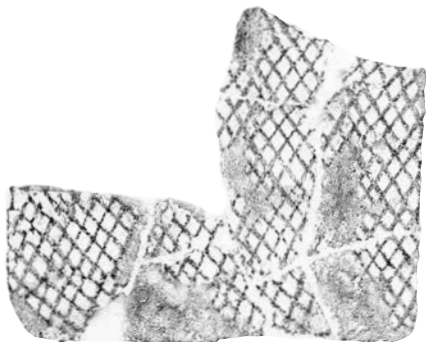
46はSD0007出土で、凸面が縄目文で、凹面は布目痕である。端部に段があり、下端を切っている。47はSD0007出土で、凸面が無文で、凹面に整った布目痕がみられる。48はSD0036出土で、凸面に1辺1.5cm四方の菱形のタタキを行い、凹面に粗い布目痕がある。49はSD0036出土で、凸面に1辺1.0cm四方の菱形のタタキを行い、凹面には糸切り痕が明瞭に残る。端部に段があり、下端を切っている。50は確



46



47



48



图41 平瓦1 (1/6)

認調査 No.56 トレンチ出土で、凸面に1辺1.5cm四方の方形のタタキを行い、凹面に整った布目痕がみられる。51はSD0062出土で、凹面に整った布目痕がみられ、端部には段がついており、下端を切っている。52はSK0013出土で、凸面に1辺1.0cm四方の菱形のタタキがわずかに残る。53はSD0036出土で、凸面に1辺1.0cm四方の菱形のタタキを行い、凹面に糸切り痕が明瞭に残る。54はSD0007出土で、凸面に約6cm×6cmの目が小さい方形タタキの単位で、タタキ同士が重ならないように施している。凹面には布目痕が乱れているのが確認できる。端部に段があり、下端を切っている。

55はSD0062出土で、凸面に1辺1.0cm四方の菱形のタタキを行い、凹面に糸切り痕が明瞭に残る。56は確認調査No.65トレンチ出土で、凸面に1辺1.0cm四方の菱形のタタキを行っている。57はSD0062出土で、凸面に1辺1.0cm四方の菱形のタタキを行い、凹面に糸切り痕が明瞭に残る。58はSK0032出土で、凸面に1辺1.5cm四方の菱形のタタキを行う。端部には段がついており、下端を切っている。59はSX0051出土で、凸面は1辺1.0cm四方の方形のタタキで、約5cm×8cmの単位が確認できる。端部に段があり、下端を切っている。60はSK0013出土で、凸面は1辺0.5cm四方の方形のタタキで、凹面に整った布目痕がみられる。

61はSD0036出土で、凸面に1辺1.5cm四方の菱形のタタキを行い、凹面に粗い布目痕がある。62はSK0014出土で、凸面に1辺0.5cm四方の菱形のタタキを行い、端部は丸く整形される。63はSX0065出土で、凸面に1辺0.5cm四方の方形のタタキ、凹面に糸切り痕が残る。端部に段があり、下端を切っている。64はSD0007出土で、凸面は1辺0.5cm四方の方形のタタキである。端部に段があり、下端を切っている。65は311調査区検出面出土で、凸面は約6cm×6cmの目が小さい方形タタキの単位で、タタキ同士が重ならないように施している。凹面に整った布目痕がみられる。端部に段があり、下端を切っている。66はSK0014出土で、凸面に1辺0.5cm四方の菱形のタタキを行い、凹面に整った布目痕がみられる。端部に段があり、下端を大きく切っている。67はSK0017出土で、凸面に1辺0.5cm四方の菱形のタタキを行い、端部は上端と下端を切っている。68はSD0007出土で、凸面に1辺0.5cm四方の菱形のタタキがわずかに残る。端部は上端と下端を切っている。

69はSK0014出土で、凸面が縄目文と思われ、凹面は布目痕である。70はSD0009出土で、凸面に1辺1.0cm四方の菱形のタタキを行う。71はSD0066出土で、凸面に1辺1.0cm四方の方形のタタキを行い、凹面には整った布目痕がみられる。端部に段があり、下端を切っている。72はSD0009出土で、凸面は約6cm×6cmの目が小さい方形タタキの単位で、タタキ同士が重ならないように施している。73はSD0066出土で、凸面に1辺1.0cm四方の菱形のタタキを行っている。74はSD0066出土で、凸面は1辺0.5cm四方の方形のタタキで、凹面に整った布目痕がみられる。75は348調査区検出面出土で、凸面に1辺0.5cm四方の菱形のタタキを行い、端部は上端と下端を切っている。76はSD0064出土で、凸面に1辺1.0～1.5cm四方の方形のタタキを行う。

77はSD0062出土で、凸面に1辺1.0cm四方の菱形のタタキを行う。78はSD0036出土で、凸面に1辺1.0～1.5cm四方の菱形のタタキを行う。端部に段があり、下端を切っている。79はSD0066出土で、凸面に1辺1.0cm四方の菱形のタタキを行い、凹面に糸切り痕が残る。80はSD0113出土で、凸面に1辺1.0cm四方の菱形のタタキを行い、凹面に整った布目痕がみられる。端部に段があり、下端を切っている。81はSD0036出土で、凸面に1辺1.0cm四方の菱形のタタキを行う。82は確認調査No.65トレンチ出土で、凸面に1辺1.0cm四方の菱形のタタキを行う。83はSD0036出土で、凸面に1辺1.0～1.5cm四方の菱形

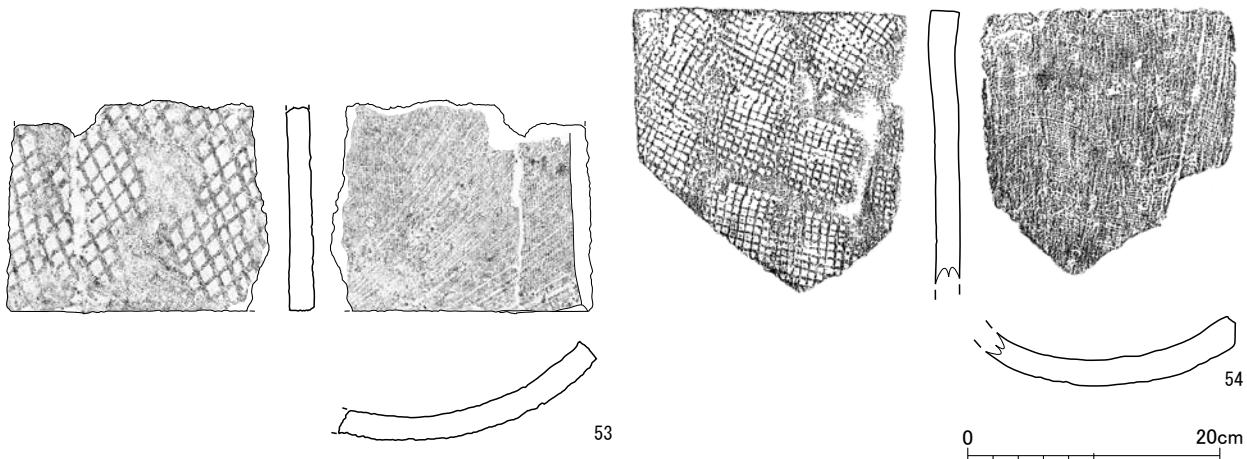
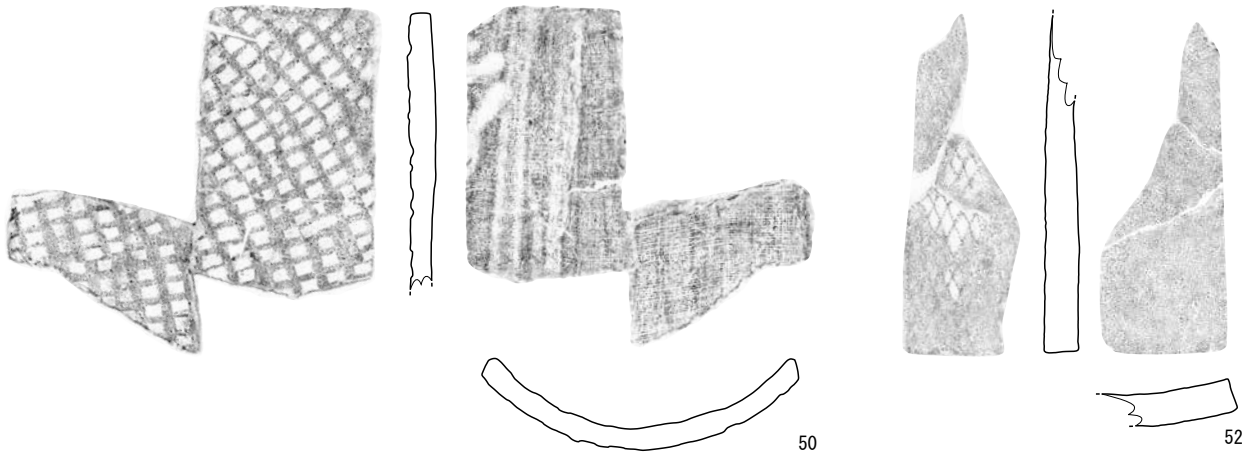
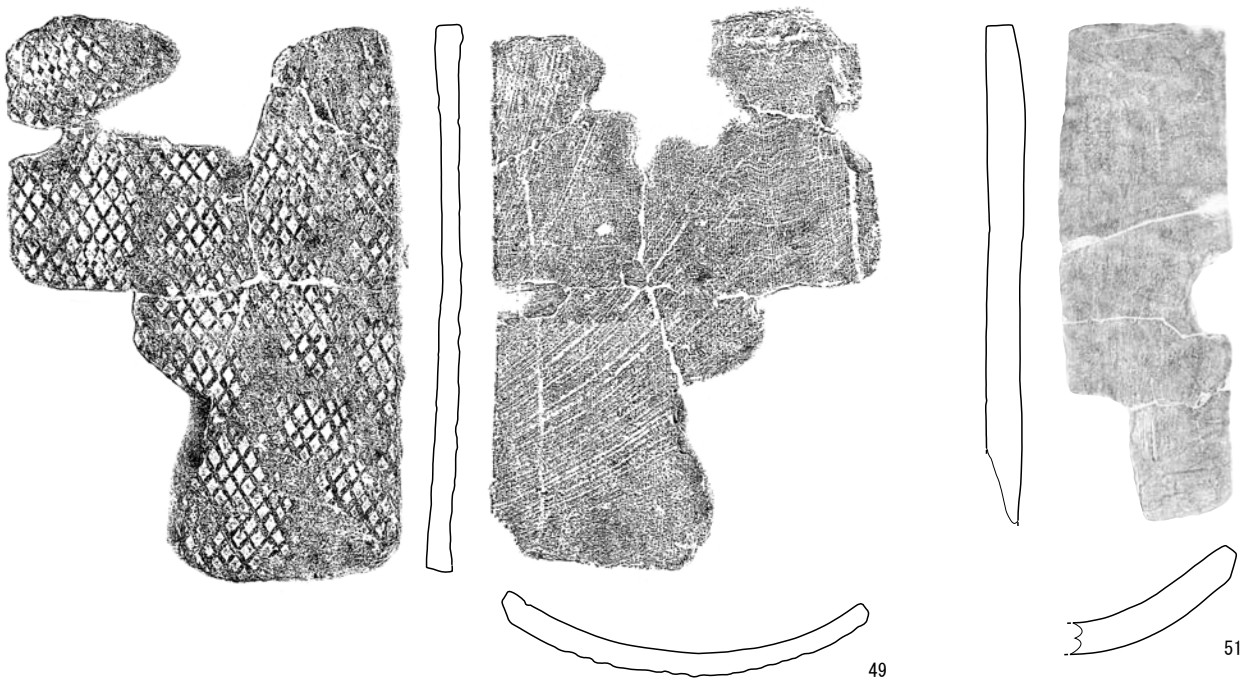


图42 平瓦2 (1/6)

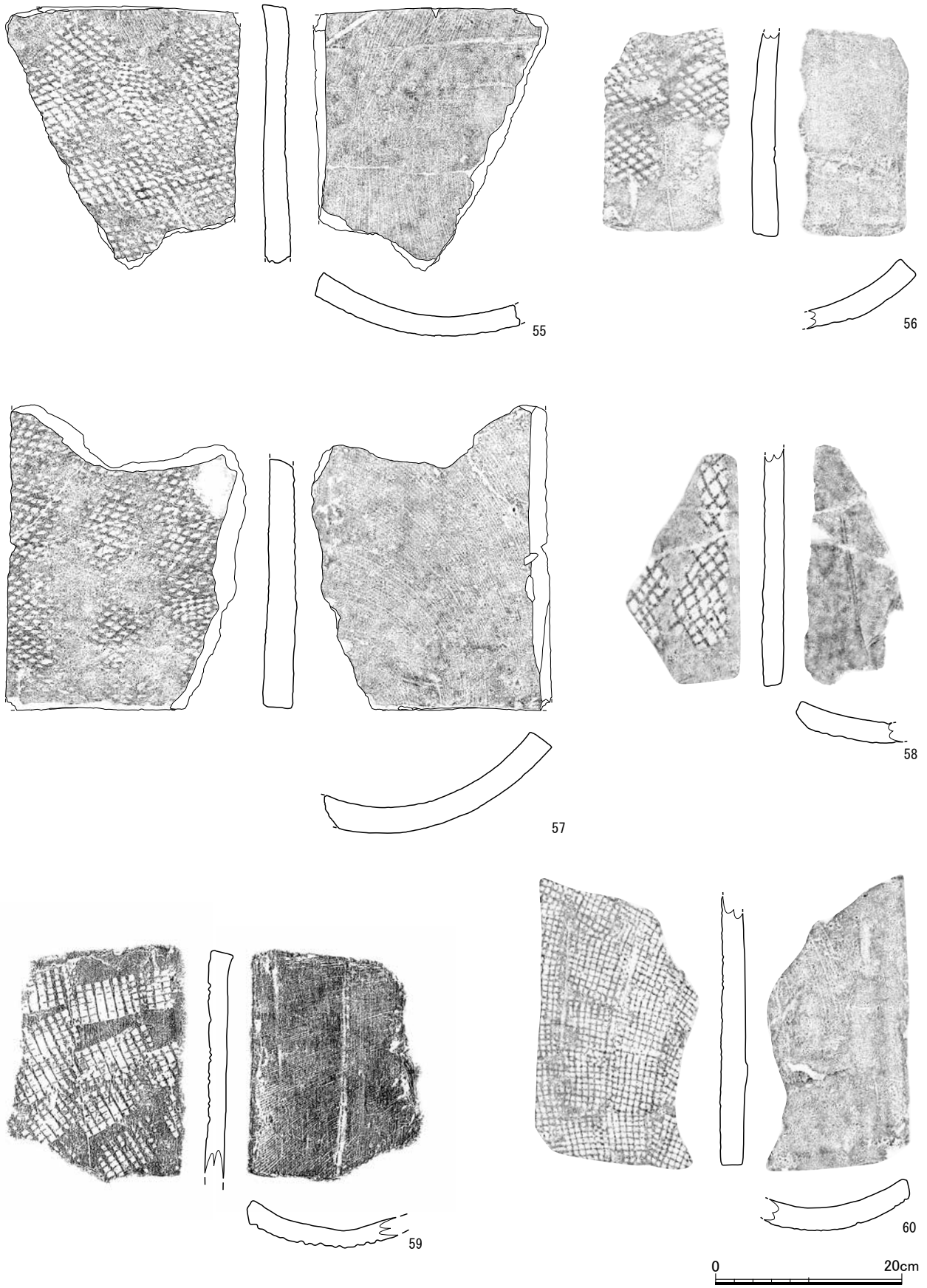


図43 平瓦3 (1/6)

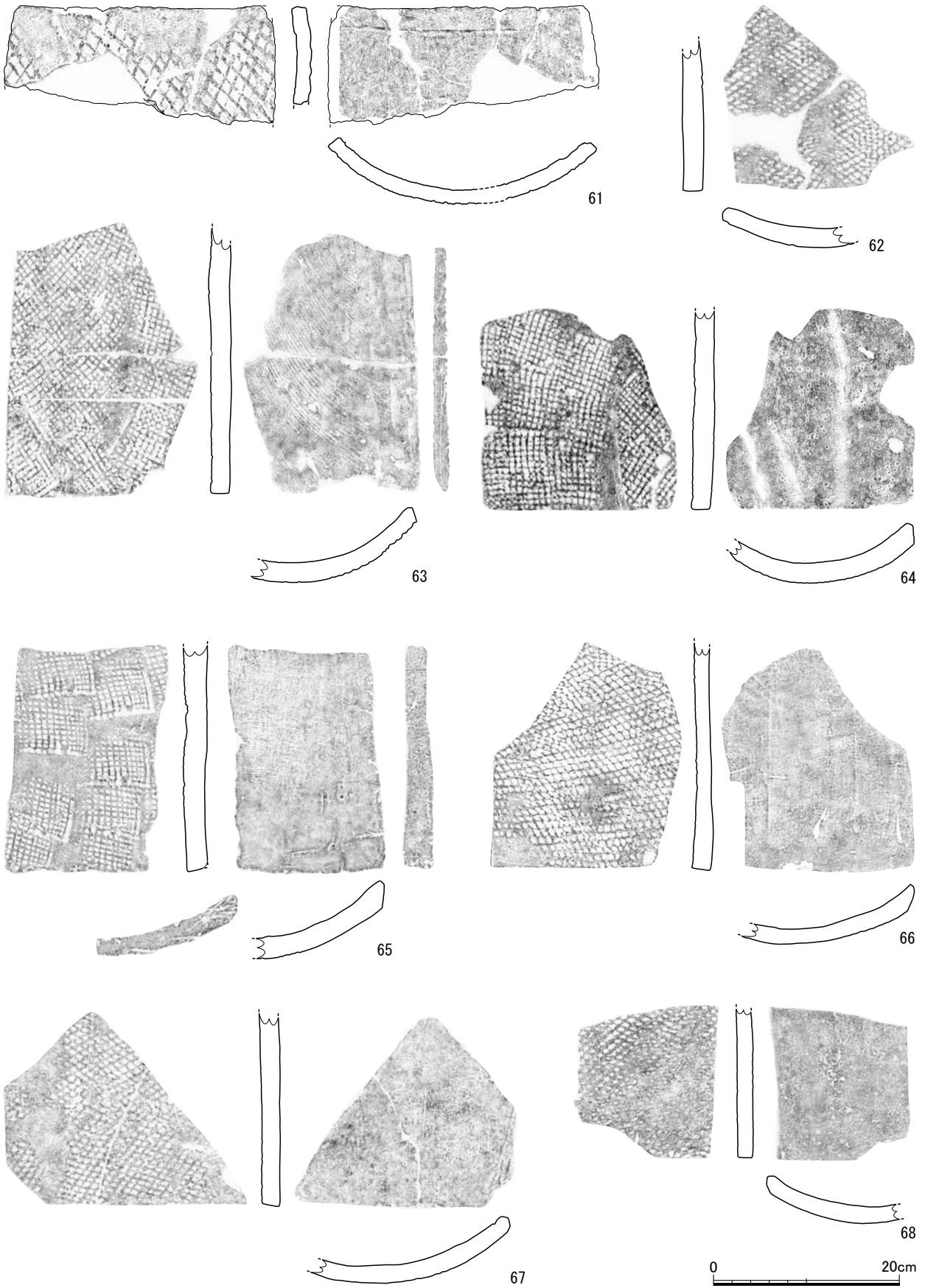


图44 平瓦4 (1/6)

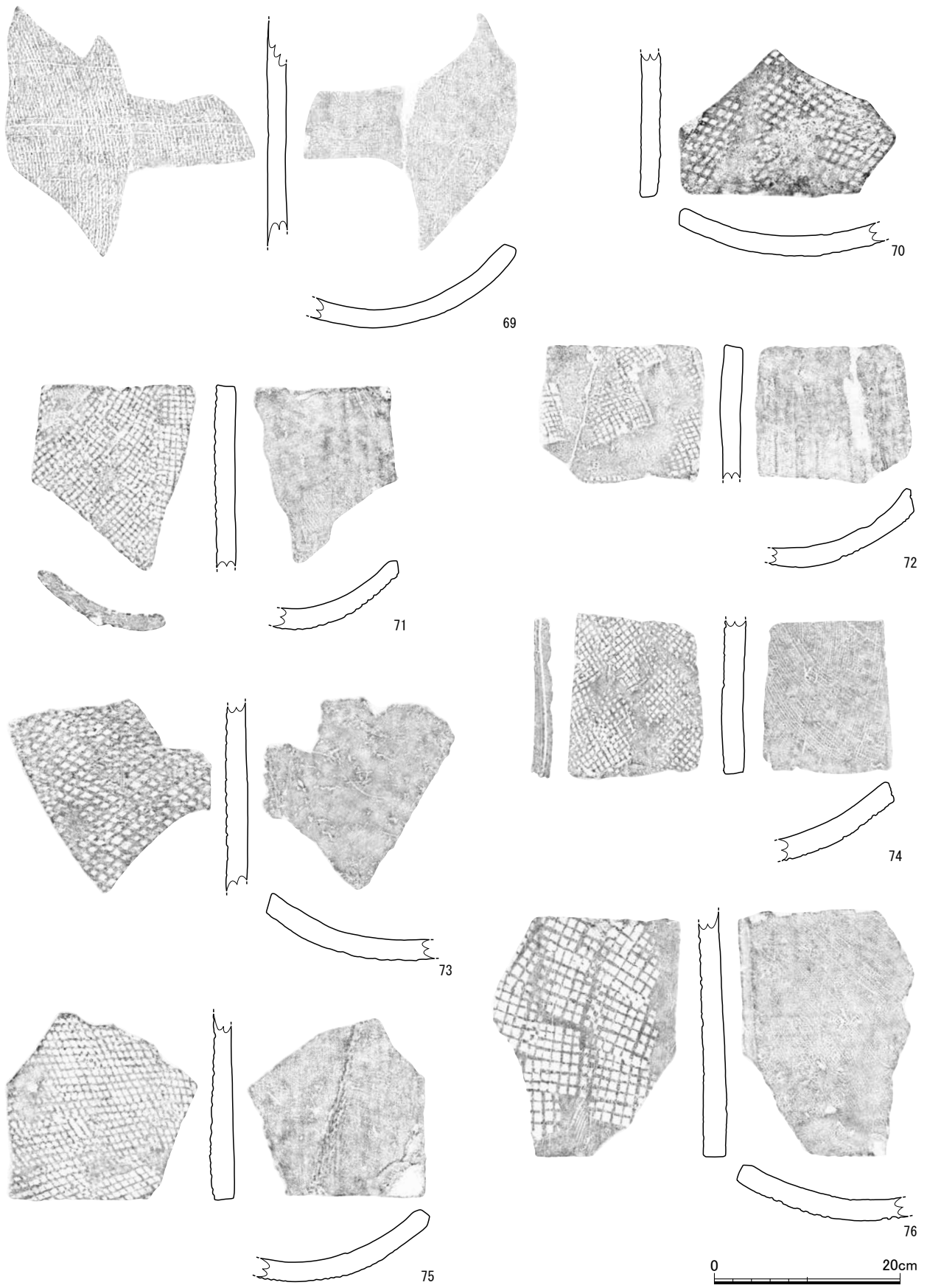


図45 平瓦5 (1/6)

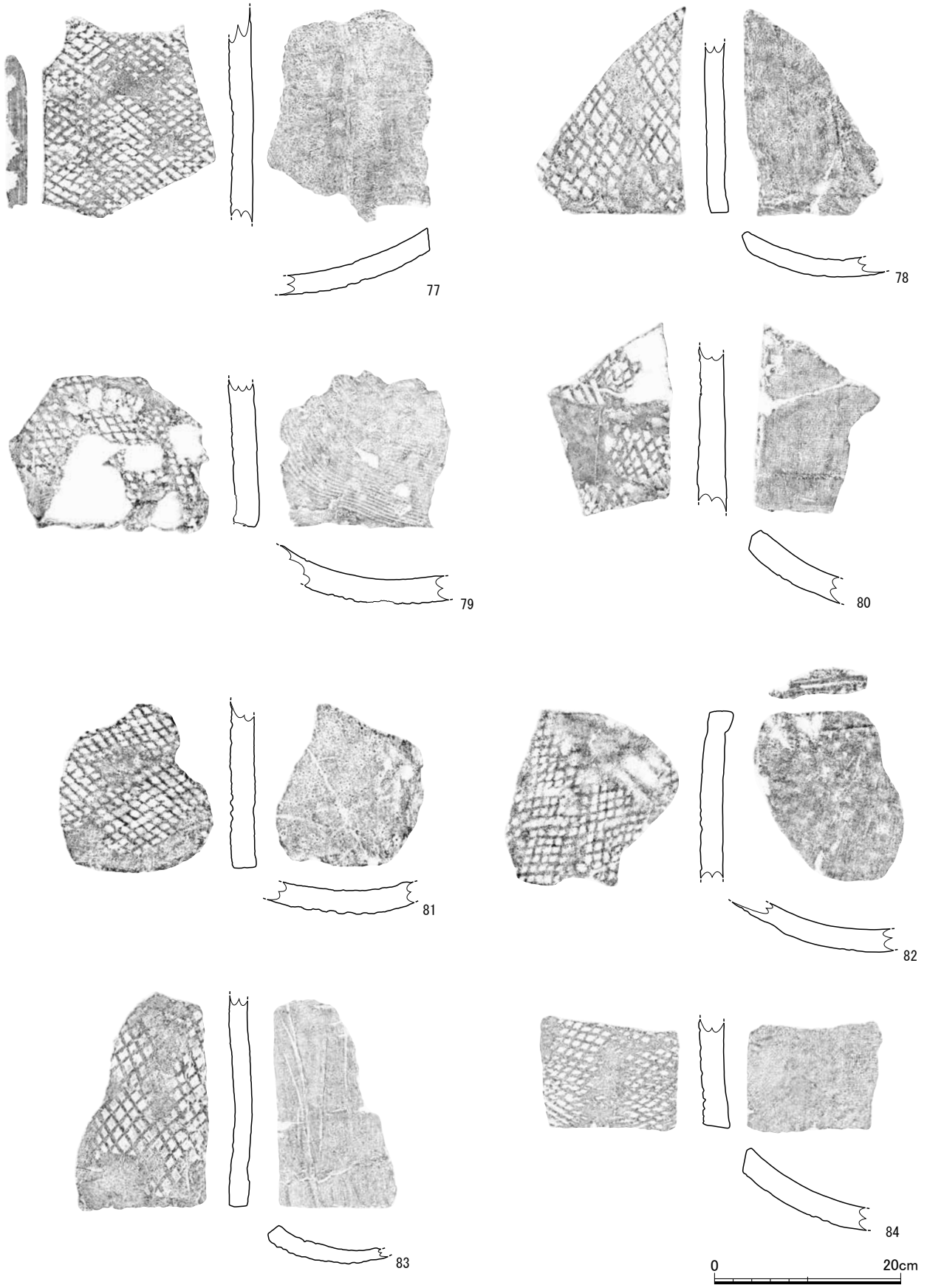


图46 平瓦6 (1/6)

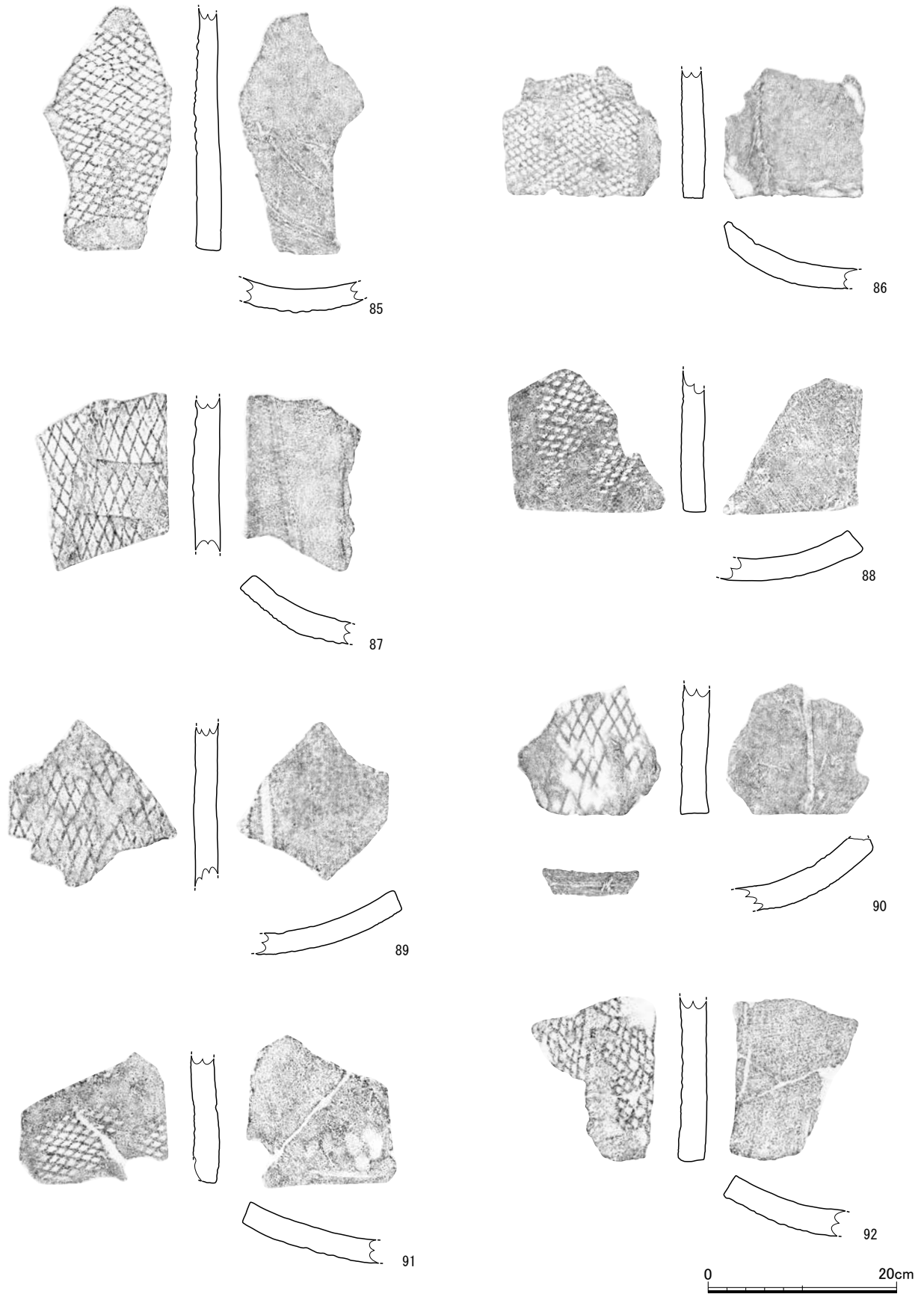


図47 平瓦7 (1/6)

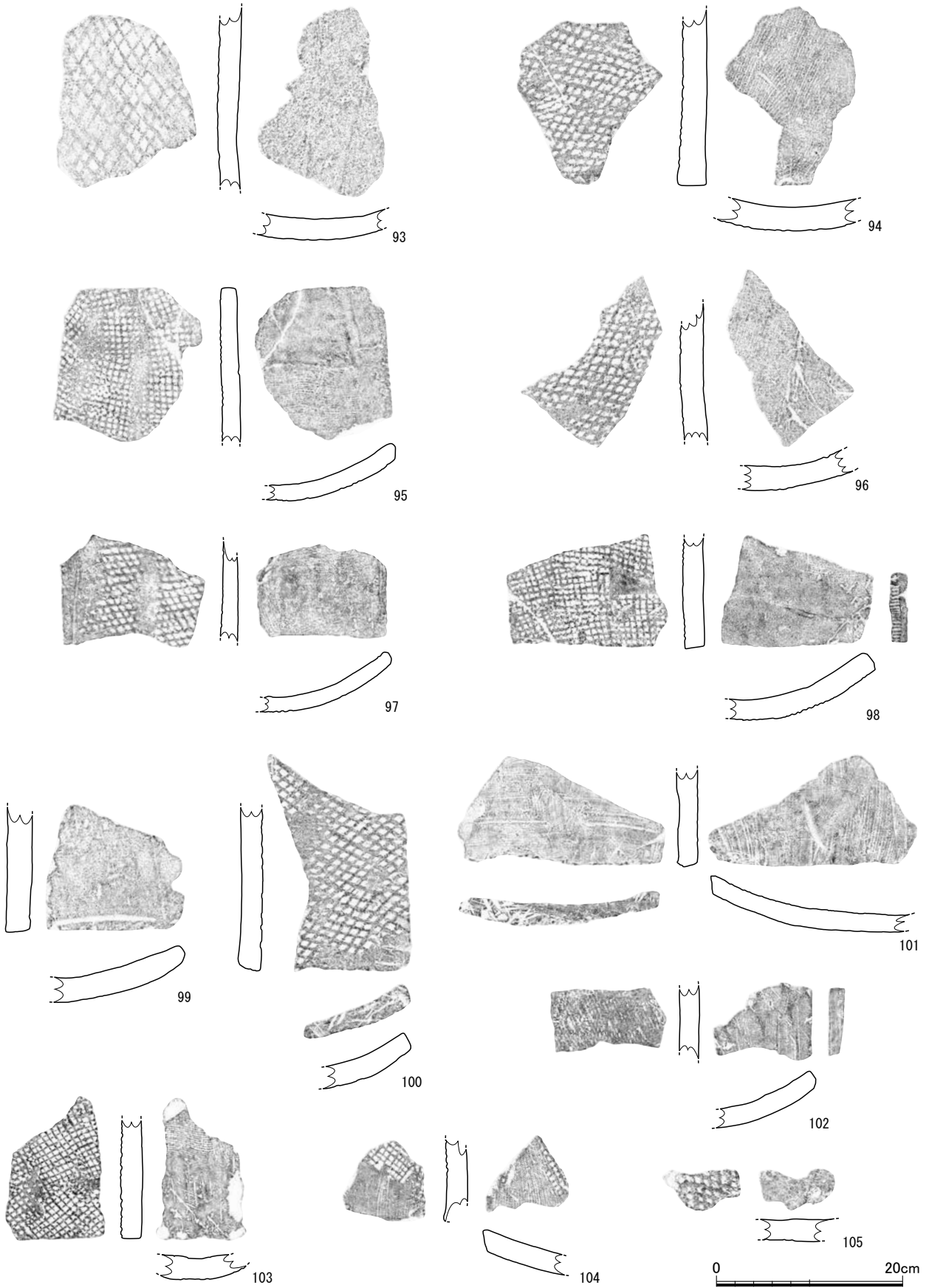


图48 平瓦8 (1/6)

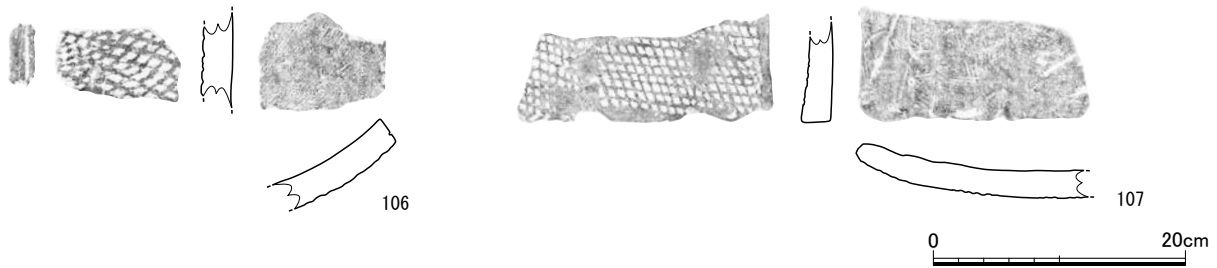


図49 平瓦9 (1/6)

のタタキを行い、凹面に粗い布目痕がある。84は確認調査No.65トレンチ出土で、凸面は1辺0.5cm四方の菱形のタタキで、凹面に整った布目痕がみられる。

85はSD0062出土で、凸面に1辺1.0cm四方の菱形のタタキを行う。86はSK0102出土で、凸面に1辺0.5cm四方の菱形のタタキを行い、端部は下端を切っている。87は確認調査No.65トレンチ出土で、凸面に1辺1.5～2.0cm四方の菱形のタタキを行い、凹面に整った布目痕がみられる。88はSK0033出土で、凸面に1辺0.5cm四方の菱形のタタキを行う。89は確認調査No.27トレンチ出土で、凸面に1辺1.5cm四方の菱形のタタキを行う。90は311調査区検出面出土で、凸面に1辺1.5cm四方の菱形のタタキを行い、凹面に整った布目痕がみられる。91はSK0038出土で、凸面に1辺0.5cm四方の菱形のタタキを行い、凹面に強いユビナデがみられる。92はSD0062出土で、凸面に1辺1.0cm四方の菱形のタタキを行う。

93はSK0038出土で、凸面に1辺1.0cm四方の菱形のタタキを行い、凹面に粗い布目痕がある。94は確認調査No.65トレンチ出土で、凸面に1辺0.5cm四方の菱形のタタキを行い、凹面に糸切り痕が残る。95は確認調査No.65トレンチ出土で、凸面に1辺0.5cm四方の方形のタタキを行う。96は確認調査No.10トレンチ出土、97は311調査区検出面出土で、凸面に1辺0.5cm四方の菱形のタタキを行い、凹面に粗い布目痕がある。98は確認調査No.65トレンチ出土で、凸面に1辺0.5cm四方の方形のタタキを行い、凹面に整った布目痕がみられる。99はSD0009出土で、凹面に整った布目痕がみられ、端部には段があり、下端を切っている。100はSD0062出土で、凸面に1辺1.0cm四方の菱形のタタキを行う。101はSD0064出土で、凸面が無文で、凹面には粗い布目痕がある。102はSD0066出土で、凸面が無文で、凹面に整った布目痕がみられる。103はSD0064出土で、凸面に1辺0.5cm四方の方形のタタキを行い、凹面に粗い布目痕がある。104はSD0064出土で、凸面、凹面に1辺0.5cm四方の方形のタタキを行う。これは桶巻作りで分割した後、整形台に乗せて、さらに凹面を叩いたためと考えられる。105はSD0064出土で、凸面は1辺0.5cm四方の菱形のタタキと思われる。

106はSX0065出土で、凸面に1辺0.5cm四方の菱形のタタキを行い、凹面に整った布目痕がみられる。107は366調査区検出面出土で、凸面に1辺1.0cm四方の菱形のタタキを行い、凹面には粗い布目痕がある。

表2 辛上廃寺跡 出土瓦

挿図-番号	佐賀県遺物 登録番号	出土位置	器種	寸法 cm			色調	備考
				長さ	幅	厚さ		
図 37-1	01000890	SD0007	軒丸瓦			4.2	灰白	
図 37-2	12002716	SD0007	軒丸瓦			4.5	明黄褐	
図 37-3	12002764	SD0008	軒丸瓦			4.6	淡褐	
図 37-4	20000636	SD0112	軒丸瓦			4.2	にぶい橙	
図 37-5	07002480	SD0052	軒丸瓦			4.0	黄灰	
図 37-6	20000635	342 区検出面	軒丸瓦			5.0	灰黄	
図 37-7	20000634	366 区検出面	軒丸瓦			3.8	灰黄	
図 38-8	19001047	311 区検出面	軒丸瓦			4.0	灰白	
図 38-9	19001071	SD0064	軒丸瓦			1.7+	灰白	
図 38-10	19001048	311 区検出面	軒丸瓦			2.9	灰白	
図 38-11	20000079	SD0066	軒丸瓦			3.0	にぶい橙	
図 38-12	19001049	311 区検出面	軒丸瓦			2.9	灰白	
図 38-13	20000092	348 区検出面	軒丸瓦			3.9	にぶい黄橙・橙	
図 38-14	19001050	311 区検出面	軒丸瓦				橙	
図 38-15	19001051	311 区検出面	軒丸瓦				橙	
図 38-16	19000894	SD0007	軒丸瓦				橙	
図 38-17	12002757	SD0066	軒平瓦			2.2	にぶい黄橙	
図 38-18	19001066	SX0051	軒平瓦			3.0	橙	
図 38-19	19000973	SX0051	軒平瓦			5.1	灰白	
図 38-20	20000084	311 区検出面	軒平瓦				にぶい黄橙	
図 38-21	19001052	342 区検出面	軒平瓦			4.4	にぶい橙	
図 38-22	19001067	342 区攪乱	軒平瓦				灰白	
図 38-23	19000972	311 区検出面	軒平瓦				橙	
図 39-24	20000070	SD0066	丸瓦	28.8+	15.3+	2.1	にぶい黄橙	
図 39-25	19000892	SD0007	丸瓦	30.5+	17.1	2.1	橙	
図 39-26	19000901	SD0007	丸瓦	26.7+	11.2+	1.3	黄橙	
図 39-27	19000903	SD0007	丸瓦	19.6+	13.3+	1.8	橙	
図 39-28	19000899	SD0007	丸瓦	21.6+	10.5+	1.9	灰白	
図 39-29	19000857	SK0019	丸瓦	23.0+	12.0+	2.7	灰白・灰	
図 39-30	19000835	SK0013	丸瓦	18.0+	15.1+	2.1	にぶい黄橙	
図 39-31	19000836	SK0013	丸瓦	19.0+	12.7+	1.8	灰白・浅黄	
図 39-32	19000837	SK0013	丸瓦	14.3+	15.3+	2.1	にぶい橙・橙	
図 39-33	19000838	SK0013	丸瓦	16.0+	14.0+	2.2	灰白	
図 39-34	20000076	SD0066	丸瓦	14.8+	11.8+	2.0	橙	前面と側面に線状痕あり
図 39-35	19000955	SD0062	丸瓦	22.1+	12.3+	1.6	灰白	
図 40-36	20000133	366 区検出面	丸瓦	18.3+	9.6+	2.7	浅黄橙	
図 40-37	19000904	SD0007	丸瓦	17.1+	12.2+	2.5	橙	
図 40-38	20000113	SK0102	丸瓦	14.4+	8.5+	3.1	にぶい黄橙	
図 40-39	19000841	SK0013	丸瓦	13.0+	9.2+	1.9	灰白・にぶい黄橙	
図 40-40	19000845	SK0013	丸瓦	7.8+	12.1	1.7	浅黄・灰白	

表2 辛上廃寺跡 出土瓦

挿図・番号	佐賀県遺物 登録番号	出土位置	器種	寸法 cm			色調	備考
				長さ	幅	厚さ		
図 40-41	20000051	65tr	丸瓦	12.2+	10.4+	3.3	浅黄橙	
図 40-42	20000058	311 区検出面	丸瓦	11.4+	11.3+	2.7	灰白	
図 40-43	19000902	SD0007	丸瓦	8.5+	8.6+	2.2	にぶい黄橙	
図 40-44	19000839	SK0013	丸瓦	8.9+	10.0+	2.9	灰白・淡黄	
図 40-45	19000840	SK0013	丸瓦	10.6+	9.2+	2.8	灰黄	
図 41-46	12002759	SD0007	平瓦	36.7+	29.8+	2.8	灰白	
図 41-47	19000889	SD0007	平瓦	22.2+	27.4+	2.1	灰白・黄灰	側面に線状痕あり
図 41-48	19000947	SD0036	平瓦	27.6+	29.8	1.8	浅黄・灰黄	
図 42-49	12002776	SD0036	平瓦	43.5+	29.1	2.6	灰	
図 42-50	20000033	56tr	平瓦	27.5+	25.2	2.2	黄灰	
図 42-51	20000061	SD0062	平瓦	39.9+	15.5	3.0	明黄褐	
図 42-52	19000833	SK0013	平瓦	27.5+	11.2	2.8	灰白・浅黄橙	
図 42-53	07002471	SD0036	平瓦	16.6+	20.6+	2.2	灰	
図 42-54	12002760	SD0007	平瓦	21.7+	20.0+	2.4	灰	
図 43-55	07002472	SD0062	平瓦	28.8+	25.0+	2.4	灰	
図 43-56	20000040	65tr	平瓦	22.9+	13.2+	2.8	灰白	
図 43-57	07002473	SD0062	平瓦	32.8+	25.0+	3.0	灰	
図 43-58	19000867	SK0032	平瓦	26.2+	12.2+	2.4	浅黄	
図 43-59	12002792	SX0051	平瓦	24.5+	17.5+	2.0	灰褐	
図 43-60	19000816	SK0013	平瓦	31.9+	16.5+	2.5	浅黄橙	
図 44-61	07002470	SD0036	平瓦	12.6+	29.2+	2.0	灰	
図 44-62	19000849	SK0014	平瓦	20.0+	19.0+	2.4	橙	
図 44-63	20000098	SX0065	平瓦	29.2+	20.0+	2.3	灰白	側面に線状痕あり
図 44-64	19000891	SD0007	平瓦	22.2+	20.2+	2.3	浅黄橙・灰白	
図 44-65	20000059	311 区検出面	平瓦	25.0+	18.3+	2.7	黄灰	側面、前面に線状痕あり
図 44-66	19000846	SK0014	平瓦	24.8+	21.0+	2.1	黒	
図 44-67	19000853	SK0017	平瓦	21.2+	24.4+	2.1	淡黄	
図 44-68	19000897	SD0007	平瓦	16.9+	16.1+	1.9	明黄褐・灰白	
図 45-69	19000847	SK0014	平瓦	27.5+	25.3+	2.2	橙	
図 45-70	19000914	SD0009	平瓦	16.0+	22.8+	2.2	橙・灰白	
図 45-71	20000071	SD0066	平瓦	19.8+	16.6+	2.3	灰白	
図 45-72	20000060	SD0009	平瓦	15.1+	18.0+	2.3	褐	
図 45-73	20000072	SD0066	平瓦	21.2+	20.5+	2.4	灰白	
図 45-74	20000081	SD0066	平瓦	17.5+	14.5+	2.4	灰・にぶい黄橙	側面に線状痕あり
図 45-75	20000088	348 区検出面	平瓦	20.3+	20.0+	2.7	褐灰	
図 45-76	19001085	SD0064	平瓦	26.7+	19.3	2.5	灰黄	
図 46-77	19000956	SD0062	平瓦	23.6+	18.4+	2.3	灰	側面に線状痕あり
図 46-78	19000943	SD0036	平瓦	22.9+	16.0+	2.2	橙・にぶい橙	
図 46-79	20000080	SD0066	平瓦	17.0+	21.0+	2.7	灰白	
図 46-80	20000127	SD0113	平瓦	20.8+	13.9+	3.1	灰黄	

表2 辛上廃寺跡 出土瓦

挿図-番号	佐賀県遺物 登録番号	出土位置	器種	寸法 cm			色調	備考
				長さ	幅	厚さ		
図 46-81	19000942	SD0036	平瓦	18.7+	17.3+	2.6	明黄褐・灰白	
図 46-82	20000043	65tr	平瓦	19.4+	20.1+	2.6	灰白	前面に線状痕あり
図 46-83	19000940	SD0036	平瓦	23.2+	13.9+	2.2	灰	
図 46-84	20000036	65tr	平瓦	13.2+	15.6+	2.8	灰白・褐灰	
図 47-85	19000952	SD0062	平瓦	26.0+	13.8+	2.6	浅黄橙	
図 47-86	20000101	SK0102	平瓦	13.8+	15.0+	2.4	にぶい黄橙	
図 47-87	20000035	65tr	平瓦	19.4+	13.6+	2.8	灰白	
図 47-88	19000868	SK0033	平瓦	15.5+	16.4+	2.7	灰白	
図 47-89	20000032	27tr	平瓦	18.3+	17.8+	2.4	浅黄橙・にぶい橙	
図 47-90	20000056	311 区検出面	平瓦	14.5+	15.9+	3.0	にぶい黄橙・灰白	
図 47-91	19000873	SK0038	平瓦	16.6+	16.5+	2.9	にぶい黄橙・灰白	
図 47-92	19000958	SD0062	平瓦	17.8+	14.4+	2.9	灰	
図 48-93	19000870	SK0038	平瓦	21.0+	15.8+	2.4	浅黄・灰白	
図 48-94	20000044	65tr	平瓦	19.8+	15.7+	3.1	灰黄褐	
図 48-95	20000041	65tr	平瓦	17.1+	15.8+	2.0	灰白	
図 48-96	20000022	10tr	平瓦	19.2+	15.5+	2.7	灰	外面に布の端部痕
図 48-97	20000054	311 区検出面	平瓦	12.7+	15.5+	1.9	暗灰	布の端部痕か
図 48-98	20000037	65tr	平瓦	12.5+	17.5+	2.4	浅黄橙	側面に叩きあり
図 48-99	19000910	SD0009	平瓦	15.0+	16.7+	2.8	黄灰・灰	
図 48-100	19000953	SD0062	平瓦	26.0+	13.8+	2.6	黄橙	
図 48-101	19001087	SD0064	平瓦	12.1+	22.9+	2.2	灰白	
図 48-102	20000073	SD0066	平瓦	8.7+	12.5+	2.1	橙	側面に指紋あり
図 48-103	19001074	SD0064	平瓦	15.4+	10.3+	2.6	浅黄橙・にぶい黄橙	内面ににぶいへら痕多数
図 48-104	19001082	SD0064	平瓦	9.9+	10.2+	2.4	にぶい黄橙	
図 48-105	19001073	SD0064	平瓦	5.2+	8.9+	2.4	灰白	内面指押さえ
図 49-106	20000094	SX0065	平瓦	8.6+	10.3+	2.6	黄灰	側面に線状痕あり
図 49-107	20000128	366 区検出面	平瓦	9.2+	19.4+	2.4	浅黄・黄灰	

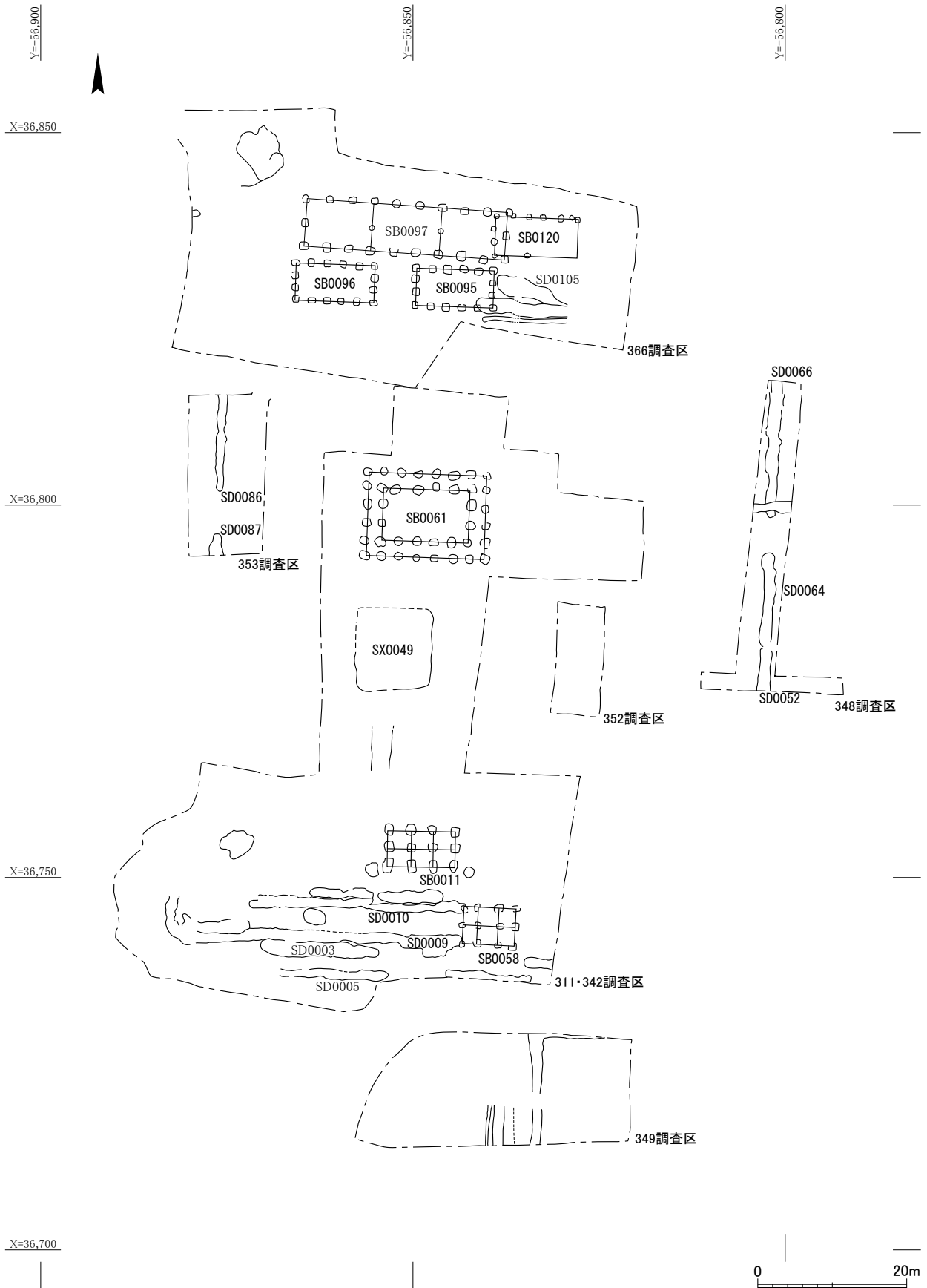


図 50 辛上廃寺跡 古代の主な遺構 (1/750)

第4章 まとめ

ここまで、辛上廃寺跡の調査成果を報告したが、整理や検討が不十分な部分もあることから、現段階でのまとめを以下に簡潔に述べる。今後の総括のなかで、更に検討を加えていきたい。

(1) 調査成果

大曲一の坪地区の発掘調査の結果、古代寺院に関する遺構として塔基壇跡1基、掘立柱建物跡7棟、溝跡15条などを確認した。

塔基壇跡

基壇跡と認識できるのはSX0049塔基壇跡のみであり、現状では基壇を伴う建物は塔のみであったと考えられる。遺構に伴うとみられる出土遺物は7世紀代のものであり、創建時期に造営されたと推測される。

掘立柱建物跡

確認した建物のうち、機能が判別できるのは、構造や溝跡との関係から門と推定されるSB0058、4面廂という構造から金堂と推定されるSB0061である。また、SB0095・0096は同時期に存在したと考えられ、金堂と推定されるSB0061の北側にあることから、僧坊の可能性もある。そのほかの建物については、性格まで推測できる材料に乏しい。なお、いずれの建物でも建て替えは認められなかった。

主軸方位でみると、すべてわずかに東傾しているが、SB0097のみ5°とやや傾きが異なっている。さらに、梁行2間、桁行9間という細長い構造であることや柱間がほかの建物と異なることから、SB0097は全体の中では異質な建物であることがいえる。

建物の時期を示す遺物は、完掘していないことから少ないが、ほとんどが7世紀以前のものである。そのなかで、SB0097出土土師器坏は新しい時期のものともみられ、類似するものとしてはSD0066より新しいSD0067出土坏がある。まだ吉野ヶ里遺跡周辺での古代の土師器の編年は確立していないが、大宰府での成果を参考にすれば、8世紀後半代でも新しい時期の可能性もある。

このようなことから、SB0097を除けば、それ以外の建物は同時に存在した可能性がある。

溝跡

溝跡のうち、東西方向のSD0009とSD0010とは相互の位置的な関係やSB0058柱穴との関係から、その間に築地塀があったことを推測させる。このほか、SD0003とSD0005の関係も同様のものであるかもしれない。南北方向のSD0052・0064・0066、SD0086・0087はそれぞれ寺域の東西を区画する溝と推定されるが、平行する溝跡が確認されていないことから、築地塀は存在していないことが示唆される。

出土須恵器・土師器

古代関連では大きく2時期あり、SD0066出土遺物とSD0105出土遺物に代表される。また、7世紀代の遺物も散見される。SD0066出土遺物は、須恵器の特徴からみて8世紀後半代が主体を占める。SD0105出土遺物は、大宰府での成果を参考すると、土師器坏の口径の縮小傾向がみられることから、9世紀第2四半世紀前後と推測され、この時期の遺物は366調査区を中心に出土している。

出土瓦

軒丸瓦は、すべてが複弁七弁蓮華文軒丸瓦と考えられる。軒丸瓦は、1点重弧文軒平瓦があるが、それ以

外は均整唐草文軒平瓦とみられる。軒丸瓦・軒平瓦とも瓦当文様はほぼ同一のものであり、多様性はない。このようなことから、軒瓦の年代は8世紀後半のみとみられる。そのほか、平瓦の割合が丸瓦に比べて、非常に多いという特徴がある。瓦の分析については途上にあるため、今後さらに検討が必要である。

(2) 伽藍配置について

伽藍配置と変遷については、すでに報告しているが(『172集』)、改めて考えてみたい。

掘立柱建物跡のうち、SB0097は主軸方位や建物構造、時期の点でほかの建物とは異なっている。建物配置の点でも、SB0095・0096と近く、同時存在は考えにくい。逆に、SB0097と同時期と考えられる建物がないことになる。

建物には建て替えがみられず、基壇跡も1基のみであり、掘立柱建物から基壇を伴う礎石建物へという変遷も考えにくい。また、SB0097を除けば、主軸方位もほぼ同一であることから、建物の点からは大きな伽藍配置の変遷は想定しなくてよいものと推測される。

区画の溝跡についても、掘り直しなどは認められない。ただ、SD0003・0005を築地塀に関連するものと評価すると、2時期の可能性は残されている。区画という点では、南辺の西側は築地塀の存在が想定される。東西両辺には区画溝があり、それぞれ金堂と推定されるSB0061の位置で途切れていることから、出入口となっていたと考えられる。このように、ある程度の寺域は確定しているが、北辺の区画は明確ではない。

以上のことから、本書では、南辺に築地塀、東西両辺は区画溝で区画された寺域に、SB0097以外の掘立柱建物と塔で構成される伽藍配置で、明確な時期的変遷がないことを想定したい。時期としては、瓦やSD0066出土遺物などからみて、8世紀後半代に建立・存続した寺院と推定される。

問題点

今後のために、問題点を述べておく。まず、金堂が掘立柱建物であるという点は、類例などから検討する必要がある。また、寺域について現状では南辺西側にのみ築地塀があるため、南辺東側にも延長があるのか、さらに1辺のみ築地塀であること、北側の区画の有無も検討する必要がある。伽藍配置では、SB0058が寺域南北中心軸上に位置するが、金堂・塔とも南北中軸線の西側に偏っており、寺域東部に何も無いのかは検討の余地がある。

寺院の時期として、本書では8世紀後半としたが、その場合、『肥前風土記』の記述の「寺」かどうかは課題としてある。

また、SB0097やSD0105に代表される新しい時期の遺構が集中する366調査区など、主として9世紀前半代にどのように利用されていたかが明確になっていない。今後、周辺の地区の変遷などを含めた広い範囲での検討が必要になってくると考えている。

(3) 肥前国における辛上廃寺

ここでは、肥前国の古代寺院のなかでの辛上廃寺について、小田富士雄氏の見解(小田1995)を参照しながら、簡単にまとめてみたい。なお、古代を総括するなかで、今後さらに検討していきたい。

第1・2章でふれたように、官寺である佐賀市肥前国分寺・尼寺を除けば、上峰町塔の塚廃寺(律令制の三根郡)・吉野ヶ里町辛上廃寺(神埼郡)・佐賀市大願寺廃寺(佐嘉郡)・小城市寺浦廃寺(小城郡)が私寺的寺院とみられる。

このうち、発掘調査で内容がある程度判明しているのが寺浦廃寺である。伽藍配置の変遷もわかっており、創建時は金堂を中心として周囲に掘立柱の回廊を配置する形で、回廊が一度建て替えられ、その後に西回廊を廃絶し、法隆寺系の伽藍配置をとることが明らかとなっている。出土瓦には、唐草文縁単弁八葉軒丸瓦・重弧文軒平瓦の組合せと、鴻臚館系軒丸瓦・偏行唐草文軒平瓦の組合せがある。

大願寺廃寺は発掘調査が行われていないため、伽藍配置の変遷などは不明であるが、礎石の分布などから方2町の寺域を推定することができる。瓦は、百済系単弁軒丸瓦・三重弧文軒平瓦と大宰府系古瓦（鴻臚館式軒丸瓦・老司系軒平瓦）の2種がみられる。

塔の塚廃寺も発掘調査が行われておらず、詳細は不明であるが、戦前には塔基壇・礎石跡が残っており、百済系単弁軒丸瓦が採集されている。

出土瓦の点からみて、辛上廃寺が他の3寺と異なる点は、百済系単弁軒丸瓦が出土していない点である。これは、辛上廃寺の創建時期が他の3寺と比べ、遅れていることを示すものと考えられる。さらに、同様に百済系単弁軒丸瓦が出土していない肥前国分寺の創建との関連性をうかがわせるものかもしれない。肥前国分寺と辛上廃寺から同範の軒平瓦が出土していることは示唆的である。

いずれにせよ、西海道各地における大宰府系古瓦の普及の契機となった国分寺の建立の時期か、その直後に辛上廃寺が創建されたものとみられる。このような時代的背景や郡衙近くに位置していることから、あるいは単なる私寺的なものではない可能性もある。

また、辛上廃寺から3kmほどしか離れていない塔の塚廃寺との関係は、今後検討する必要がある。前述のように、塔の塚廃寺は詳細が不明であるが、辛上廃寺と同様に塔基壇跡が残っていたことは、二つの寺院の共通点かもしれない。現状では、辛上廃寺において塔基壇跡以外に基壇は確認されておらず、塔の塚廃寺周辺は戦前までそれほど開発が盛んに行われていた場所とは思われないが、そのような状況のなかで塔基壇以外に基壇が残っていないことは、両寺とも基壇を伴う建物は塔だけであった可能性がある。

推論のうえの推論にはなるが、創建時期を単純に瓦からみて、塔の塚廃寺→辛上廃寺と想定すると、伽藍配置の共通性から、あるいは寺院の移転が行われたことも考慮すべきかもしれない。塔の塚廃寺は肥前西海道から離れた位置にあるため、官道と郡衙に近い場所に移転したことは考えられないだろうか。

このような視点を含めて、二つの寺院の関係性を検討していきたい。

(4) 塔心礎について

辛上廃寺にあったと思われる塔心礎について、松尾禎作氏が辛上廃寺跡の報告で、辛上集落の北側の「八反」と呼ばれる畑地に存在しており、「塚の如き一小丘」と伝えられており、その近くに塔心礎が現れていたが、大正時代に辛上の志岐氏宅に運ばれて手洗鉢に転用されたことを報告した。転用の際に柄孔が拡張され、側面に排水溝が付けられたとされている(松尾 1936)。現在では吉野ヶ里町辛上集落に入る辛上橋を渡った先の東屋の近くに所在する。塔心礎自体の図は松尾氏の略図のみであり、その後存在は認知されてきたものの図化作業は行われていない。

塔心礎(礎石)は寺院跡における残存状態が良好な場合が多い。そして、寺院の伽藍配置を構成する内の一つである「塔」を支える重要な箇所であり、世界最古の木造塔である法隆寺でも塔心礎は現存している。全国的に見ても残りやすいという点と形状が地域によって異なる点から、昭和初期より研究の対象とされてきた。そして、現存する木造塔を参考にし、全国で残っている塔心礎と比較することで塔心礎の形状や大き

さから「塔」自体の規模を割り出す研究が成されてきた。塔基壇や塔心礎周囲に配置する四天柱の礎石が残っていないともおおよそではあるが、復元可能な領域に近づきつつある。今回は、塔心礎の実測図化と松尾氏の略図および、県内の塔心礎との比較検討を行う。

塔心礎の研究については、石田茂作氏の先行研究があり（石田 1933）、塔心礎の形式、心礎の高さと層数との関係、心礎溝孔について論じられた。その後、足立康氏（足立 1938）、田中重久氏（田中 1939）によって、それぞれの視点で見解を示された。石田氏の研究はさらに進められ（石田 1963・1977）、塔心礎の研究は完成しつつあった。さらに、岩井隆次氏の研究（岩井 1978・1982）によって、石田氏の研究を基礎としつつ分類論を展開し体系的にまとめることで、塔心礎の研究が飛躍的に進んだ。

以上のような先学の研究に準拠して、辛上集落内の塔心礎について述べていきたい。県内の古代寺院跡としては、吉野ヶ里町辛上廃寺跡、上峰町塔の塚廃寺跡、佐賀市大願寺廃寺跡・肥前国分寺跡・国分尼寺跡、小城市寺浦廃寺跡がある。その中で塔心礎が現存しているものは辛上廃寺跡、寺浦廃寺跡の2遺跡、記録に残っているものとしては塔の塚廃寺跡が挙げられる。大願寺廃寺跡では多数の礎石が記録として残っているが、塔心礎を特定できるような記述はない。肥前国分寺跡は1辺が20 mを超える塔基壇のみが検出され、それに伴う塔心礎は確認されていない。調査区周辺より6基礎石が発見されたが、いずれも塔心礎だと断定できるものはなかった。以上、この3遺跡が県内で確認されている塔心礎である。

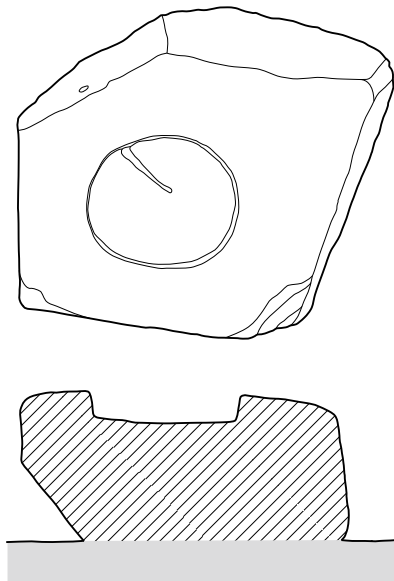
辛上廃寺跡の塔心礎の実測図化を行うなかで、通常手計りで作成するところを今回は SfM/MVS と呼ばれる三次元計測を用いて図化作業を進めることとした。SfM/MVS は文化財の現状の記録作成や図化作業の迅速化が期待され、記録作業終了後はインターネットでの公開や AR、VR の素材としても活用できる。このような観点から三次元計測を用いることとした。

撮影に使用したカメラは OLYMPUS OM-D E-M5 Mark III（OLYMPUS 単焦点レンズ M.ZUIKO DIGITAL 17mm F1.8）を使用した。解析に使っているソフトウェアは Agisoft 社の Metashape（Standard 版）、編集にはオープンソースの CloudCompare、図化作成には Illustrator である。基準点は水準器で水平に置いた矩尺を塔心礎付近に設置した。撮影、解析方法等を詳細に述べていきたいところであるが、紙面の都合上ここでは割愛する。

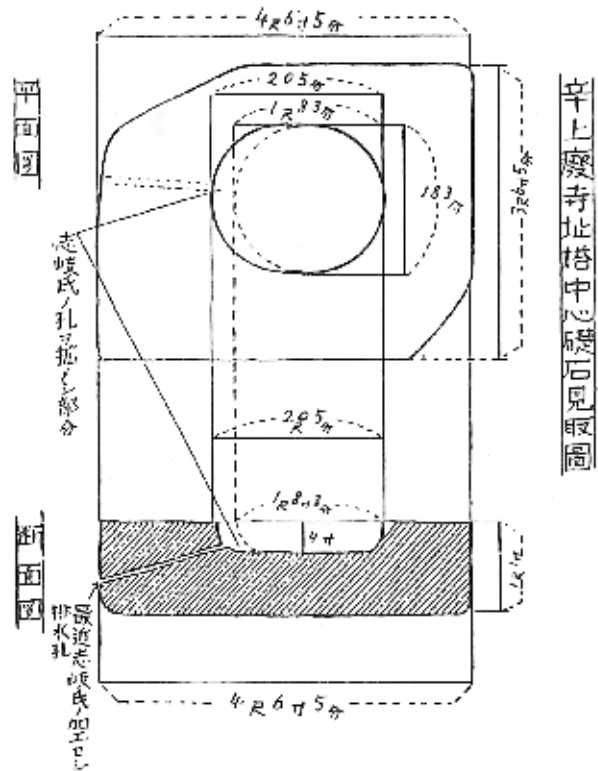
三次元計測を基に作成した図と松尾氏の略図を図示した。辛上廃寺跡の塔心礎の規模は長辺 124cm、短辺 111cm、残存高 57cm の不揃いな五角形を呈しており、東側下部は内側に向かって抉れている。後世の転用等によって抉れたものではなく、元々はその高さまで塔基壇に埋まっていたものだと考えられる。柄孔の直径 54～61cm、柱座径は 50～58cm、深さは 10～12cm で平面が長楕円形を呈している。石材は花崗岩製である。柄孔の中央より南側から側面に向かって孔が穿たれている。これは松尾氏の報告にもあるように、手洗鉢に転用された際にあけられた孔である。一方、松尾氏の略図は長辺 4 尺 6 寸 5 分（140.8cm）、短辺 3 尺 6 寸 5 分（110.5cm）、残存高 1 尺 1 寸（33.3cm）、柄孔の直径 183～205 分（55.4～62.1cm）、復元直径 1 尺 8 分（55.1cm）、深さ 4 寸（12.1cm）となっている。

このように、平面形と規模、柄孔、特徴は松尾氏の略図とほぼ一致する。所見では柄孔に沿った下端中央より西側には約 1 cm 程度の溝が彫られており、東に向かって溝が浅くなり、なくなる。柄孔に沿った溝は塔心礎が造られた際に彫られたもので、溝が浅くなるのは後世の柄孔拡張で削られた痕跡ではないかと考えられる。

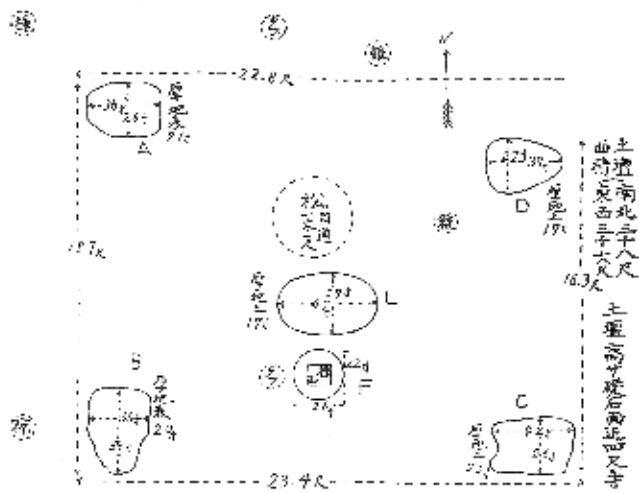
塔の塚廃寺跡の心礎は略図でのみ残されており、1934 年の目達原飛行場建設に伴い周辺域が大きく地下



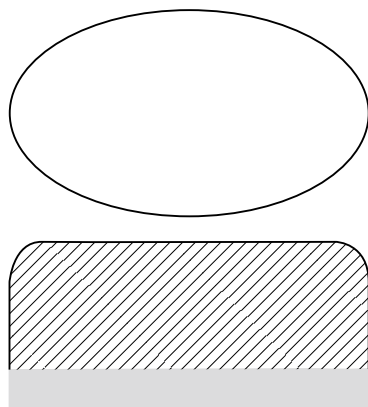
辛上集落内塔心礎 三次元計測図 (S=1/30)



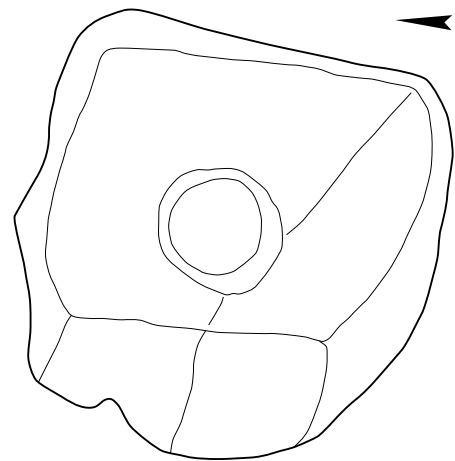
松尾禎作氏作成 塔心礎略図 (縮尺任意)
(松尾 1936 より)



塔の塚廢寺跡 礎石配置 (縮尺任意: 松尾 1940a より)



塔の塚廢寺跡 塔心礎復元図 (S=1/30)



寺浦廢寺跡 塔心礎 (S=1/30)



図51 辛上廢寺跡・塔の塚廢寺跡・寺浦廢寺跡 塔心礎

げされ、現在では残っていない。略図より形状や寸法を参考にし、縮尺を合わせ復元図を作成した。略図中央にある礎石Eが塔心礎だと推定されているが、松尾氏の報告によるとこの礎石は南に傾覆し、柱型の造り出しや削り込みがない自然石とされている。塔心礎（礎石E）の規模は長辺47寸（142.4cm）、短辺27寸（81.8cm）、残存高17寸（51.5cm）である。辛上廃寺跡、寺浦廃寺跡とは異なり、平面形は長楕円で、柱座の部分を造らない塔心礎となる。

寺浦廃寺跡の塔心礎の規模は長辺180cm、短辺170cmで、柄孔の直径48cm、柱座径は38cm、深さは21cmである。石材は花崗岩製である。松尾氏の報告によると、地元の方から聞いた話では柱座底面が餅のように隆起していたが削り取られてしまったという内容が残されている。今回は三次元計測までには至らなかったが、断面図がないため今後作成していきたい。

岩井氏の分類によると、全国の248個の心礎を観察し、形式ごと34項目に分けられている。そのうち、5項目、13項目に「上部中央に穴だけあるもの」（124個）があり、寺浦廃寺跡はこの項目に既に含まれている。辛上廃寺跡も寺浦廃寺跡の塔心礎と同様な形状をしているため、この項目に該当する。塔の塚廃寺跡の心礎が報告通りのものであれば、34項目の「自然石で人工を加えてないもの」（全国では4ヶ所）に該当する。

辛上廃寺跡の塔心礎は全国的に最も多い型式であり、寺浦廃寺跡と同じ型式の塔心礎であることが分かった。県内における現存している塔心礎はこの2点であり、非常に貴重な文化財である。寺浦廃寺跡の塔跡と礎石は県史跡に指定されている一方、辛上集落内の塔心礎は地域住民によって大切にされているものの、屋外に放置された状態である。今後、保存・活用を積極的に行っていきたい。

第4章 参考文献

- 足立康（1938）「心礎分類法と舞木廃寺心礎」『考古学』第9巻第7号
- 石田茂作（1933）「塔の中心心礎に就て」『考古学雑誌』第22巻第2・3号
- 石田茂作（1977）『塔の中心礎石の研究』仏教考古学論叢四・仏塔編
- 石田茂作（1963）「塔の心礎を訪ねて（1～4）」『真珠』
- 岩井隆次（1978）「塔心礎の分類に就いて」『古代文化』第30巻第8号
- 岩井隆次（1982）『日本の木造塔跡—心礎集成とその分析—』考古学選書20
- 小城町教育委員会（1991）『寺浦廃寺』小城町文化財調査報告書第8集
- 小田富士雄（1995）「肥前の奈良時代寺院跡」『風土記の考古学5 肥前風土記の巻』同成社
- 田中重久（1939）「塔婆心礎の研究」『考古学』第10巻第6号
- 松尾禎作（1936）「東脊振村辛上廃寺跡の調査」『佐賀県史蹟名勝天然記念物調査報告第5輯』
- 松尾禎作（1937）「寺浦廃寺跡の調査」『佐賀県史蹟名勝天然記念物調査報告第6輯』
- 松尾禎作（1940a）「塔の塚廃寺址」『佐賀県史蹟名勝天然記念物調査報告第7輯』
- 松尾禎作（1940b）「大願寺廃寺址」『佐賀県史蹟名勝天然記念物調査報告第7輯』
- 松尾禎作（1950）「塔の塚廃寺について」『佐賀県史蹟名勝天然記念物調査報告第9輯』

写真図版



吉野ヶ里遺跡全景（上空から 昭和 23 年米軍撮影）



吉野ヶ里遺跡全景（南から）



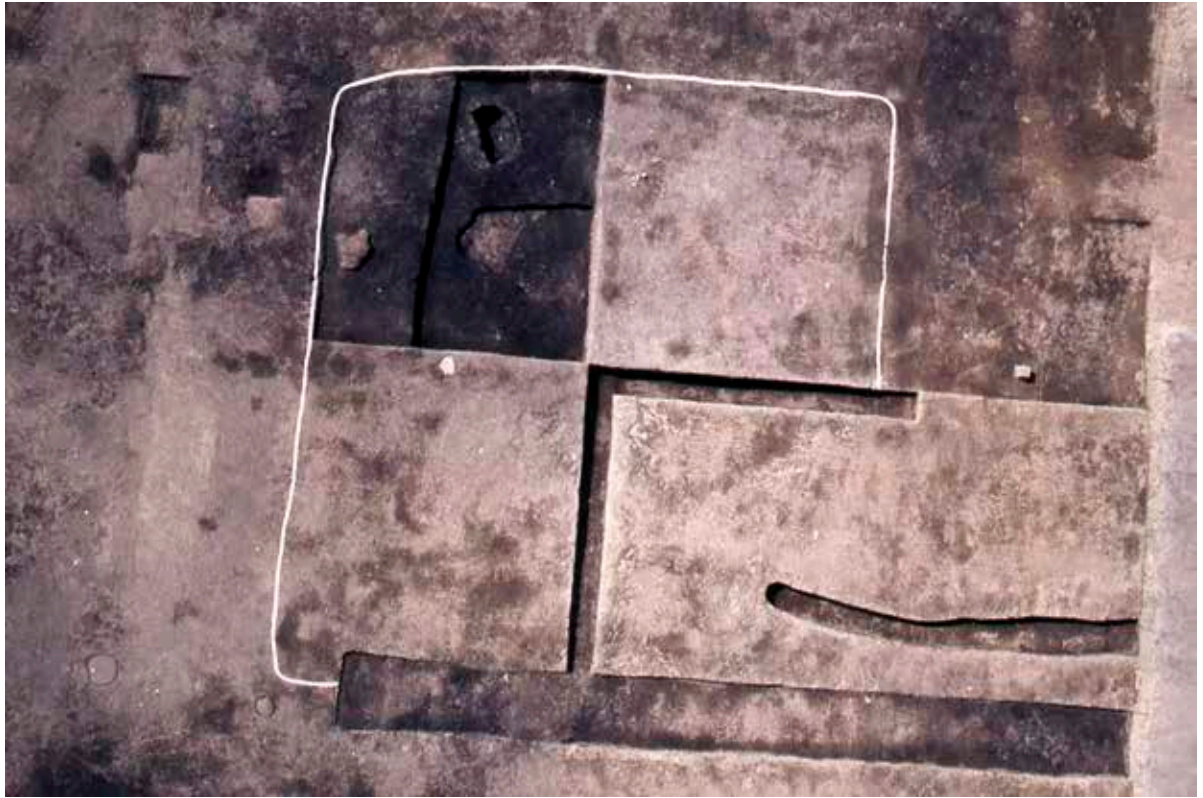
311・342・348・349 調査区 全景（南から）



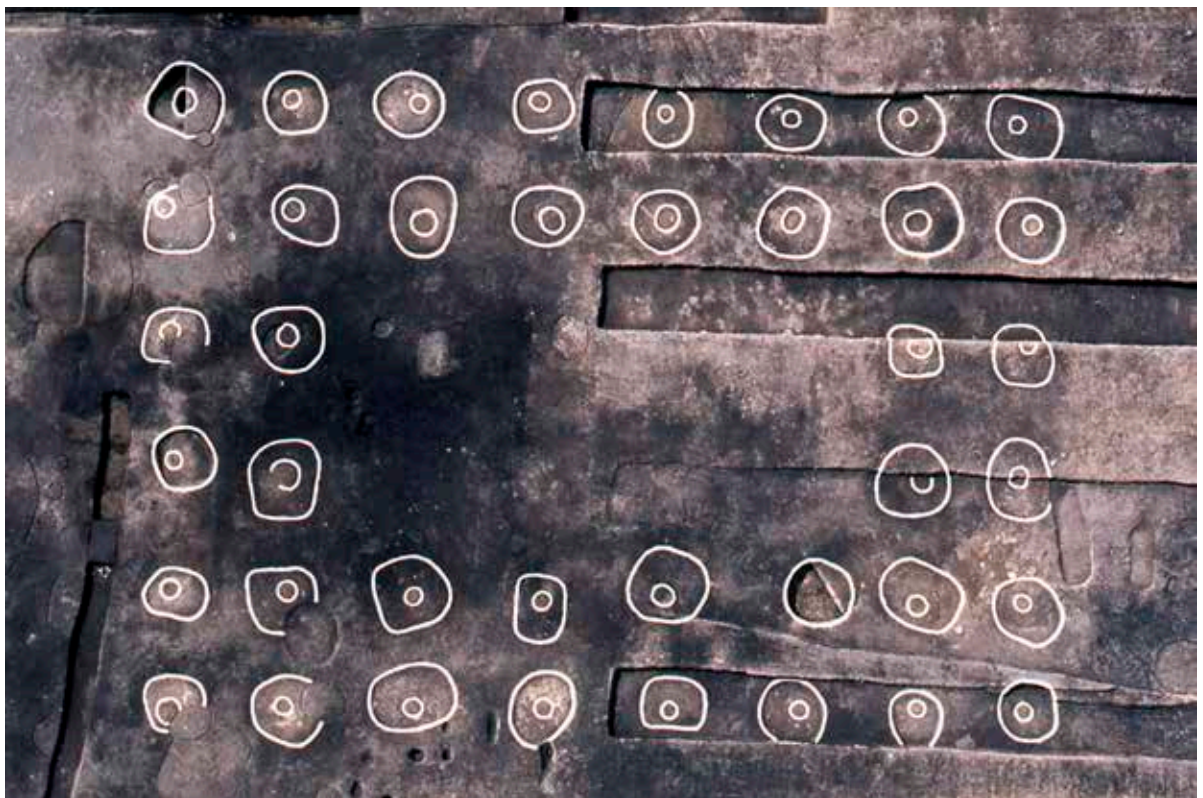
348 調査区 全景 (西から)



366 調査区 全景 (南から)



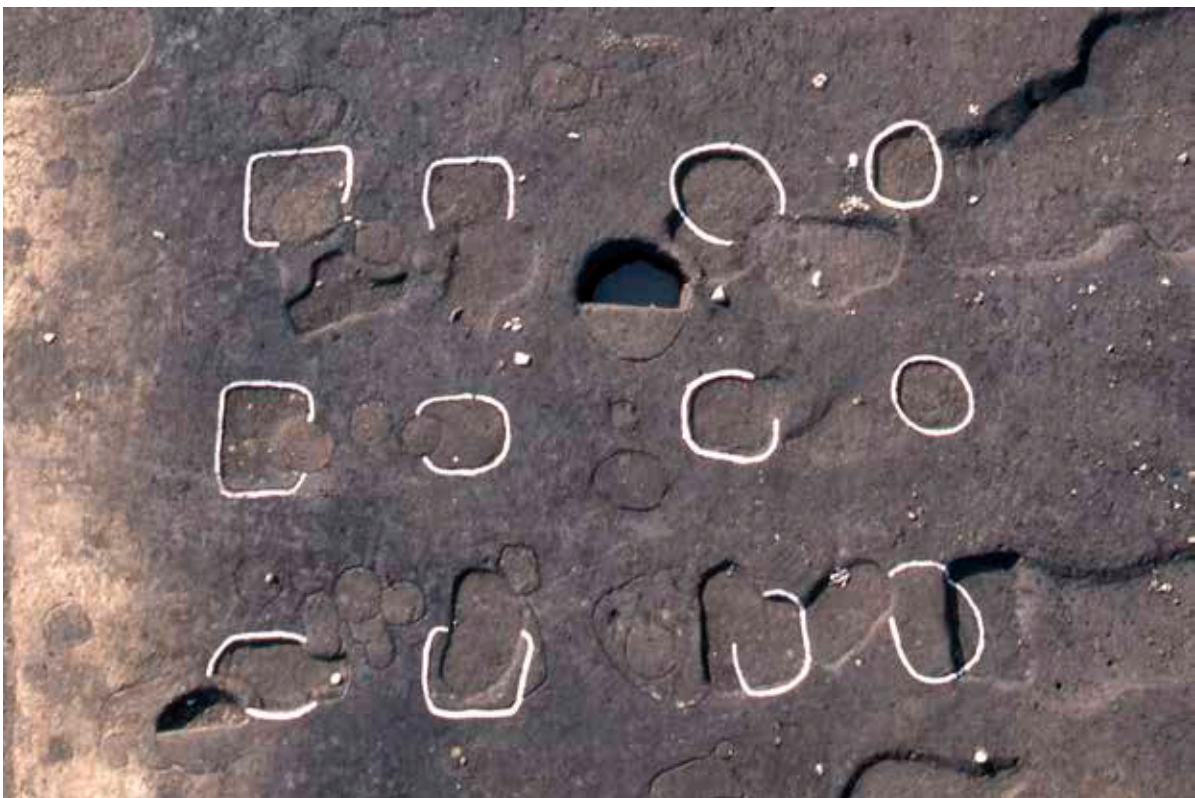
SX0049 (真上から 上が南)



SB0061 (真上から 上が南)



SB0011 (真上から 上が北)



SB0058 (真上から 上が南)



SX0049 東西土層東半部 (南から)



SX0049 A-B 土層 (東から)



SB0011 P1 (東から)



SB0061 P1 (東から)



SB0095 P6 (北から)



SB0095 P7 (北から)



SB0095 P11 (北から)



SB0095 P14 (北から)

写真図版 8



SB0096 P1 (南から)



SB0096 P4 (北から)



SB0096 P6 (北から)



SB0096 P11 (北から)



SB0096 P15 (北から)



SB0097 P1 (北から)



SB0097 P4 (北から)



SB0097 P5 (北から)



SB0097 P10 (北から)



SB0097 P12 (北から)



SB0097 P13 (北から)



SB0097 P14 (北から)



SB0097 P18 (北から)



SB0097 P21 (北から)



SB0097 P22 (北から)



SB0097 P23 (北から)



SB0097 P24 (北から)



SD0003・0009 土層 (西から)



SD0007 遺物出土状況 (南西から)



SD0009・0036 土層 (北西から)



SD0010 土層 (西から)



SD0064 (南から)



SD0066 遺物出土状況 (北から)



SD0066 土層 (北から)



SD0067 遺物出土状況 (南から)



SD0105 遺物出土状況 (東から)



SK0004 検出状況 (南から)



SK0013 検出状況 (西から)



SK0014 (南から)



SK0102 (西から)



塔心礎



塔心礎柄穴部分

報告書抄録

ふりがな	よしのがりいせき こだいへん 1						
書名	吉野ヶ里遺跡 古代編 1						
副書名	辛上廃寺跡						
シリーズ名	佐賀県文化財調査報告書						
シリーズ番号	第 229 集						
編著者名	渋谷格（編） 塩見恭平						
編集機関	佐賀県						
所在地	〒 840-8570 佐賀県佐賀市内 1 丁目 1 番 59 号 TEL : 0952-25-7233						
発行年月日	2021（令和 3）年 3 月 31 日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘原因
		市町村	遺跡番号				
よしのがりいせき 吉野ヶ里遺跡 おおまがりいちのつぼちく 大曲一の坪地区	さがけん 佐賀県 よしのがりちよう 吉野ヶ里町大字大 曲	413275	0081	33° 20' 00" 日本測地系 (33° 19' 48")	130° 23' 14" 日本測地系 (130° 23' 22")	20000517 ～ 20040309	県立吉野ヶ里歴史公園整備に係る資料を得るため
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項	
吉野ヶ里遺跡 大曲一の坪地区	社寺跡	古代	塔基壇跡 1、 掘立柱建物跡 7、 溝跡 15、土坑 8	須恵器、土師器、瓦		古代寺院跡	
要約	<p>本書は、これまで実施された吉野ヶ里遺跡の発掘調査成果のうち、古代の総括報告の第 1 冊目にあたり、古代寺院である辛上廃寺跡の調査報告書である。今後順次、古代の総括報告を行う予定である。</p> <p>辛上廃寺跡が所在する大曲一の坪地区では、古くから瓦が採集され、基壇とみられる高まり、塔心礎とみられる礎石があったことから、『肥前風土記』に記された「寺壹所僧寺」にあたる古代寺院の場所と推測されてきた。</p> <p>発掘調査の結果、塔基壇跡、金堂や門と推定される掘立柱建物跡、築地塀に関連すると可能性がある溝跡などを確認し、おおよその伽藍配置や寺域が判明した。寺院の時期は、8 世紀後半代と考えられる。しかしながら、性格を明らかにできていない建物があり、また出土遺物の分析などに課題が残されており、今後の総括報告の中でできる限り解明していく必要がある。</p>						

佐賀県文化財調査報告書第 229 集
吉野ヶ里遺跡 古代編 1
—辛上廃寺跡—

令和3年(2021)年3月31日

発行 佐賀県

〒840-8570 佐賀県佐賀市城内1丁目1番59号

印刷 株式会社 佐賀印刷社

〒849-0921 佐賀市高木瀬西6丁目11番7号
